74-188

陸象山

天行健君子以自彊不息

自彊錄

一

明治丁酉孟夏

水域學人

陸象山序

聖人之學。唯在明此心而已。此心爲私欲所蔽。則去聖人遠。苟明此心乎。此心即是聖人之心。而我與聖人爲一。乃知聖人之學。可由內而達也。非可由外而達也。然而俗士不知之。涉獵群書。稽查衆說。洽聞殫見。至頭白盡。而遂不能窺聖人之學者。因不知其可由內而達焉耳。孔子曰。仁遠乎哉。我欲仁。斯仁至矣。孟子曰。學問之道無他。求其放心而已矣。由此觀之。其學可由內而達也無疑矣。因又思之。是不獨止于孔孟。凡到聖域者。皆無不然。佛陀以爲人各有佛性。耶蘇以爲天國在胸矣。瑣克剌底戒人曰。知己。而老聃亦曰。不出戶。知天下。不窺牖。見天道。其出彌遠。其知彌少。是豈

不可由內而達之意耶。陸象山嘗有見于此。嘗曰。東海有聖人出焉。此心同也。此理同也。西海有聖人出焉。此心同也。此理同也。南海北海。有聖人出焉。此心同也。此理同也。千百世之上。有聖人出焉。此心同也。此理同也。千百世之下。有聖人出焉。此心同也。此理同也。乃講其學也。以此心爲本。一切之理。不待外求。反求諸己。尋念繹思。憬然分曉。有所自得于內。而與聖人之心合。故曰。我不註六經。六經皆我註脚。是可不謂眞活學乎。今也各種之學。競起于我邦。而文物之盛。前古所未聞也。然而異說百出。徒爭是非。將無所底止。是以多岐亡羊。人不知其所適從。殊如倫理之學。無其所宗。支離滅裂。全爲死學。於是乎風敎頹而廉耻滅。可歎哉。當是之時中流砥柱。欲矯此弊。則莫若修可由內而達之學也。識者或憂之。唱王陽明之學。極力發揮其旨。以使人知明此心之要。於是乎世之學者翕然呼應。欲就正路者漸多。將餒之氣。磅礴復起。是爲甚可喜之徵。雖然陽明之學出于象山。象山者。本源也。陽明者。末流也。豈可捨本源而獨逐末流乎哉。頃者文學士建部遯吾君著書一卷。題曰陸象山。來屬序于余。余披而見之。叙述象山之學。委曲周到。而附以陽明學派之梗槩。其事歷々如指掌而示之。余曰。有是哉。世之學者。由此而學之。收散漫而歸簡約。唯明此心之務。則聖人之學。庶乎可得而達矣。乃書所見。以爲之序。

明治三十年六月十七日　　井上哲次郎撰

陸象山序

水流の溶々たる、氷雪の皚々たる、形狀の變や大、而も成分に於ては即ち一、凡そ人寰の事、是亦形狀より觀れば、須臾相同じき者有らず、而して成分より觀れば、百世と雖も推知すべきなり。庸人は末を先にして本を後にする者、達人は本を先にして末を後にする者、故に北條早雲儒士を召して三畧を說かしめ、首に主將の法務めて英雄の心を攬るに在りと聞て、乃ち曰く、止めよ、吾既に之を得たりと、赤手八州を包擧するの識見を以て所謂黃石公なる者の心を揣りしもの、子房の解せし所蓋し亦此の外に出でざらんか、幾多の註釋抑〻末なり。加藤肥州の論語を讀みて最も感發せ

し所は何ぞ、以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべく、大節に臨みて奪ふべからざるは君子人なりといふ、是れなり、道は廣しと雖も、國士の行くべきは洵に此に在るべきか、肥州と訓詁の徒と其れ孰れか孔子の志を繼げりとすべき。風俗は議論と等しく年々歳々粗よりして精に赴くもの、古の以て奢侈と爲し、し所今は以て質素と爲し、古の以て細緻と爲しゝ所今は以て麁雑と爲す、比々皆然るべけれど、而も人の能力は時代にて大差あるなく、古の英雄若しくは聖賢をして今に生れしむるも、又恐らくは英雄若しくは聖賢たるを失はざるべし。傳ふるが如くば、紂王の始めて象箸を爲くる、箕子歎して曰く、彼れ象箸を爲らば、必ず玉杯を爲らん、杯を爲らば、則ち必す遠方珍怪の物を思ひて之を御せん、輿馬宮室の漸此より始まらん、救ふべからざるなりと、今日に在て之を想へば象箸を議すると殆と狂に類す、國王として茆茨の下に舍るは寧ろ陋とすべく、輿馬宮室を壯麗にして民をして貴むべきを知らしむるは固より可、遠方珍怪の物を聚むるも亦尚ほ可、況んや玉杯をや、象箸をや、然れども禍患を忽微に警めて權者の驕奢を制せざるべからざるは千古に渉りて變らず、彼の時に於て彼の如くなりし箕子は今に於て猶ほ賢者たらんか。禮に適ふは人に在りて服に在らず、叔孫通儒服して、漢王に憎まれ、廼ち其服を變して楚製の短衣を着す、儒服の通も短衣の通も禮に通せしに於て則ち同じかるべし、漢の禮服は唐人の視て以て笑ひし所、然れとも漢の禮服ありしや猶ほ唐の如きのみ。

獨り外物にあらず、思想の重んずべきも亦精神に在りて方法に在らず、左傳史記の議論、之を躰系より見れば實に言ふに足らざる者、然るに誰か是を以て之を輕んせんとするや、方法は時々流行ありて、短に傾くことあり、長に傾くことあり、辨證を旨とすることあり、實驗を旨とすることあり、短に傾く時は自ら短、長に傾く時は自ら長、辨證を旨とする時は自ら辨證、實驗を旨とする時は自ら實驗、勢に驅らるゝ毫も衣服の時樣あるに異ならず、但だ美人麁服して依然として美、醜婦盛裝して依然として醜、而して田夫野人多く衣裳を以て人品を判つあると均しく、議論に在ても、識者は主として精神を取んとし、庸者は云ふ、引證該備、論評剴切と、而して識者冷然、庸者は云ふ、章を吐き文を陳ぬる懸河瀉水

の注て竭きざるが如しと、而して識者冷然、識者に於ては一言尚ほ足ることあり、苟も誠意の以て我を導くあらば、則ち鞭を執て從ふとも辭せざるなり。歐陽氏李翺の復性書三篇を讀みて曰く、此れ中庸の義疏のみ、智者其性を識れば、當に中庸を復すべし、愚者は此を讀むと雖も曉らざるなりと、既にして幽懷賦を讀むに及て、書を置て嘆して已まず、復讀自ら休まず、曰く、恨むらくは翺の今に生れずして之と交るを得ざるを、又恨むらくは予の翺が時に生れて翺と其論を上下するを得ざるをと、而して其の嘆して已まざる所の者は、衆囂々而雜處兮、咸歎老而嗟卑、視予心之不然兮、慮行道之猶非、怪神堯以一旅取天下、後世子孫不能以天下取河北、以爲憂、數句に過ぎず、復性書は議論として備はれども、翺の

精神は賦に見るべかりしなり。議論の形式を批評する、之を譬ふれば猶ほ衣服の着法を批評するが如し、人の往來するを視て、彼は衣冠を正しくして堂々たり、此は帽が曲がり、帶が緩み、袴が垂れたり、など評する、興なきに非ざれども、而も爲めに笑ふ可らざる者を笑ひ、敬ふ可らざる者を敬ふこと少しとせざるべし、服を以て人を取るは輿丁の事なり、讀書家亦往々此弊の在るありて、古今を該ね、微妙を極め、撿覈到らざる莫きに拘らず、遂に賤丈夫たるを離れざることあり、初より書を以て遊藝とせば已むべきも、苟も以て人の盡すべき分を知らんと欲せば、斯の若くにして可ならんや。陸象山曰く、氣庸質腐、溺於鄙陋之俗、習於庸猥之說、膠於卑賤零亂之見、而乃勉々而學、孜々而問、茫々而思、汲々而行、聞見

愈雜、智識愈迷、東轅則恐背於西、南轅則恐違於北、執一則懼爲通者所笑、泛從則懼爲專者所非、進退無守、彷徨失據、是其好之愈篤、而自病愈深、若是而學、若是而好者、果可謂之近於智乎。象山は此の弊を免れんと欲し、之を免るゝは直に古豪傑の精神に通するに在りとし、孟軻の仁人心也、學問之道無他、求其放心而已矣、と言明せしに接して頗る感悟する所ありき。王陽明云ふ、陸氏簡易直截、其學は孟氏の學なりと、陸氏の學ありて、而して王氏の學あり、皆精神に得たりし者なり。人各々業あり、癖あり、讀書家は書に耽ると雖も、讀書の遑なき者、若しくは讀書に慣れざる者、若しくは好む所を讀む者、若しくは全く好まざる者に向て博引旁證事理を剖析せんとを望むも得べからず、是れ之を望むは、望む者の暴なり。人

の道は遠にあらず、此を尋ぬる、必すしも章句の訓詁を要せず、精神を求むるに習はゞ、則ち一卷のソクラテス傳にて足る、プラトン讀まずして可、アリストテレス讀まずして可、讀書を職業とせば、群書を渉獵せざる能はざるべきも、胸中理論を錬らんと欲せば、先づカント、餘暇あらばヘーゲル、須らく其の大體を了すべし、ヘーゲルの影響の哲學よりも他に多きは、之が精神を得る者の却て他に在るが爲にや、現にラッソンの法理はヘーゲルに據りつゝあるなり。若し夫れ大丈夫の世に立つの本領を知らんと欲せば、小松内府傳、豐太閤傳、クロムウエル傳、ワシントン傳、ピョートル傳、ガリバルヂー傳、延てステフエンソン傳に至る、此等の類皆取るべし、讀み去り讀み來て識らず知らず精神に融合する、乾

燥無味の哲學書と孰れぞ、書を讀みて書に讀まれざらんとせば、深く此に稽ふる所なかる可らず。陸王の學は書を讀みて書に讀まれざらんことを期する者、過去の遺物に似たれども、其精神を發揮するに於ては、天下の書生滔々相率ゐて書に讀まれんとするの今日豈生氣なしとせんや。余や先年『王陽明』を公にせしが、單に斯の偉人の名を今世に紹介せしに過ぎざれども、陽明其人は書生をして書に讀まれざらしめんことを務めしもの、既に王氏あれば陸氏なきを得ず、幸にして建部水城の『陸象山』の著あり、君は學問に忠實にして、書を讀む多々益辨するも、又絶えて書に讀まれんとはせず、且つ又人の書に讀まるゝをば好まず、自彊錄の首卷として本書を出版するもの、其れ必ずや偶然ならざる者あ

りて存せんか。西人の未だ鋤を容れざる東洋哲學の開拓に功ある事、之を尋常思想家の學說の上に就て言ふは善し、力行を之れ主とせし象山に關しては姑く言はざるも妨なかるべし。玆に餘白を假りて自ら戒め、幷せて大方に質すと云爾。

明治三十年六月

雪嶺迂人識

目次

序論　一

發端—人生本有の問題—儒學の目的—儒學の始源—發生第一期、政治論經濟策—發生第二期、倫理的政治的教化—發生第三期、體系的叙述—發生第四期、完全なる實現、儒學の完成—解體、儒家の發生—孔子—九家の發生—古代儒學の終期、秦火—中古儒學の起程、漢學—賈生及び太史公—學問的六朝—隋唐の諸儒—近古の儒學、宋學—朱晦庵—陸象山の地位

傳

第一　系譜　二五

金谿陸氏の家系—果して看る逸才の名門に生するを—陸道卿の家庭—象山の家族

第二　年譜　二九

第三　時代　三四

唐宋社會形勢の對比—黨禍及び外釁—靖康の變—小康時代—洪水將に至らむとす

第四　生涯　三九

長成　奇氣ある少年—天地の窮際を解得す—感發弓馬を學ふ—氣風の變化　三九
講學　草莽の處士・父憂に丁る—婚娶—呂東萊と相知る—鵝湖の會—白鹿洞の講説　四四
濟世の上　仕官—立朝—天下の形勢—獻替—貶黜　五〇
教育　象山草堂—講學且嘯傲—泉石に訣す　五五
濟世の下　手に唾して起つ—荊門の守備—施政　六〇
終焉　臨終一週日の紀事　六三

第五　死後　六四
喪葬—遺文を編す—祠堂を建つ—謚號を賜ふ—義門を旌表す—子孫を録す—無窮なる生活

教學　六七

第一　遡源　六七
學問の系圖—悠遠なる淵源—自負自期

第二　組織　六七
當時の學弊—象山學問の綱領—學問の進程

第三　哲學　七〇
太極　朱陸二家の太極—辨難往復—虚虚實實—百尺竿頭更に一歩を進む—比較判斷—三項に要約す　七五
道及ひ理　理心性説の綱領—理の意義—道—道と理との關係　七五
心　理の備はる所—心即理—明理の要—二種の私心—本心—無心論を駁す　八三
性　性善説の淵源由來—象山の性善説—氣禀の差等　八六
習及ひ欲　私心の由來—義利の辨—道を求むること如何　九〇
學　志—講明及ひ踐履—簡易直截　九二
工夫　疑に始まる—省察—細近—知耻—餘裕—佛説の加味　九五
實踐　空論を排す—誠—實　九八
異學の論　釋氏を論す—異端に對する見地—禪を論す—老を論す—合成主義か　一〇一
餘説　純正哲學の闕無—易説—揲蓍論—象數圖—易の作成を論す—陰陽論—天文曆法醫藥論　一〇三
第四　教育　一〇七

主義　教及ひ學—自立自重主義—實主義—義利辨別主義—切近　一一三
實地　知人の要訣—應人與誨—元氣と血氣—身を以て儀表と爲す　一一六
讀書及ひ文藝　讀書法—詩文論　一一九
第五　政治
國家の起源—理及ひ勢—政治の大義—王安石を評論す—禮樂刑政論—君主の官能—官吏及ひ政府—儒學本來の政治學—受命放伐論　一二二
第六　法律
禮樂道義及ひ法律功利—刑法の起原—迂儒の見を排す—用刑訟獄—法治主義を排す　一三一
第七　經濟
經濟問題學問上の地位—王安石の新法を論す—經濟上の劃策—平倉設置の意見—醇乎たる社會政策—學者又實務家　一三五

歴程

第一　先驅　一四一
改革者とは何ぞや—獨立自由—歴程總論—宋學の流勢—程明道及ひ程伊川—明道の小傳—明道の教學—定性書—識仁篇—明道と象山—伊川と晦庵—伊川の性說—伊川の知行合一說—謝上蔡及ひ楊龜山—王震澤—林艾軒—命谿陸氏の家學—復齋の人物—宋學一大波瀾の機熟す　一四一
第二　紫陽
朱陸異同の細目—太極の見解—理の見解—心性の見解—二元論及ひ一元論—善惡の由來を論す—未發已發の論—朱の所謂氣稟何より生ずる—進學工夫及ひ教育方法—朱は歸納的なり陸は演繹的なり—兩者の得失—誇多鬬靡及ひ利祿—異同の大綱—一括斷案—朱陸異同の史的重要—異同の時代　一五九
第二　後繼
明州の四先生—楊慈湖の虛無唯心論—慈湖の人物—袁絜齋の正傳—舒璘の人物—沈炳—傳統系圖—無形的傳統　一七四
第四　餘姚
儒學の新正氣—心即理—惡の說明—知行合一—三種の知行合一論—致良知—良知の四性質—陽明進學の過程—陽明と晦庵及ひ象山—佛を論す—教學の一貫—陽明の少時—陽明洞中の靜居—楚囚の人—謫に龍場に赴く—憤悱啓發—立功の時代—終焉—後繼　一八三
第五　日東
帝國當日の形勢何如—藤原惺窩—中江藤樹—隱君子と時勢—藤樹と蕃山—時處位の達士—風流才人—三輪執齋—雄琴石庵及ひ東里—德川儒學の復活—革命の豫言者—一齋と中齋—山陽と中齋—中齋の生涯—大破裂—豫言者死すと謂ふか　一九九

結論

論評—世界の三大思潮—三大思潮の比較—支那思想變遷の因緣—宋學及ひ古學—象山の哲學—理心性の關係—太極論—性論—象山と佛說との關係—教育者、君子儒—人生本有の問題を解了す—陸象山は改革家なり—英雄相識る—憂國者の運命—奇渥溫氏の儒者處分策—明の儒學—王陽明の學を論す—吾人は何なか王陽明に學ふ可き—陽明學の効果—斯學東漸す—回看一番—王政維新と斯學—結語

陸象山像　卷首
陸象山序　井上哲次郎撰　卷首
陸象山序　三宅雄二郎撰　卷首

目次

參考書目　卷首
後序　卷尾

序論

發端

人生本有の問題

五尺を以て無際に處し、五十年を以て無始に介す、噫我我を如何にすべき。蓋し人の猶太初の狀態に在るや、昏昏として眠り、蠢蠢として動き、獼猴と友處し、蜉蝣と同滅し、曾に其何處より來り何處にか去るを問はざるのみならず、亦其何處に在るかをも省思せざるなり、彼は全く意識なき生活を趁へる者なり。而も原人は人の獼猴と相距るの始なり。涓涓たる谿間幾滴の澗水は、晝夜流注して暫くも停まらざるや、終に千里の汪洋を成すに至る。進歩は對數函數的なり。一進一進を導き、一歩一歩を生じ、十數萬年の星霜は、稍稍として草昧を變して開明と爲し、麤野を移して文章と爲し乃ち當日獼猴と鄰棲せし者の子孫をして、敢て昂然として天地の生宰、萬物の靈長を以て自ら稱し自ら居らしむるを致す。是れ即ち彼等の意識が漸く啓發暢達して、正に自覺の域に達したるの時なり。

嗚呼我何處よりか來り、何處にか去る。何故に生れ、何故に死する。生死去住由來解

す可きこと難し。乃ち繁瑣なる一切の疑問を擧けて悉く之を高閣に束ね了るも、我の實在する間は到底脱却離棄するを容さざる一個恒常の問題有りて存す、我を如何にすべきの問題即ち是れなり。蓋し人の漸く自覺的狀態に到達するや、其去住生死の問題は漸くにして其意識に上る。是れ哲學史開卷の示す所にして、人は自個と自個が經驗せる萬有とを合せて、唯一刀に裁理せむとす。而して幾回の試驗終に其能く爲す無きを知了せる者は希臘哲學なり、其終に完全なる成功に至れるを自認する者は佛敎なり、其未だ曾て成功せざるを認めつつ猶營營として其試驗に從事する者は、今日に迄る各國の哲學者なり。蓋し其終に能く爲す無きを覺悟する者は、惰性の働く所、遂にあらゆる問題の解釋を擧げて悉く這般の覺悟の範域に措く、之を懷疑派の眞相と爲す。中古理學者の一類は、一個の寶石を究索して以て萬般の態力を得むと力めたり。近世科學の曙光は暗黑なる彼等の實驗室を照して其迷想を覺破したり。而も第十九世紀日新の學術界猶一種無形の寶石に營營する者を許容するは、豈彼等が從ふ所の事、實に人の自然的爵位に相應する者あるが爲なるか。

初より這般の討索の無用を認めて、直に人生本有の問題に向うて進みたる者は、則ち所謂儒學是れなり。謂へらく、已に生を知らず、安んぞ死を知らむと、乃ち去來過未の攷究をは一切束擱して、直に人生現在を以て撿覈吟味の對象と爲し、人生は如何に在るべきかを以て終極の問題と爲せり。

蓋し我の實在が如何に狂妄なる懷疑論者にも拒否せらるゝ能はざるが如く、人生如何の問題は亦之に附隨して到底人生恒常の問題たるを失ふべからず。我の實在は先つ個我の實在を認む、故に斯問題は個我は如何に在るべきかの問題を成す、是れ即ち今の所謂倫理の範疇なり。個我は衆我と共に在り、衆我と相倚りて存す、故に斯問題は衆我は如何に在るべきかの問題を成す、是れ即ち今の所謂政治の範疇なり。個我は天地宇宙の中に在りて天地宇宙をして意味ある實在たらしむ、故に斯問題は又天地宇宙は如何に在るべきかの問題を成す、是れ即ち倫理及ひ政治に關繫する範域に限れる今の所謂哲學の一部なり。凡そ此三個の問題は即ち人生本有の問題を構成する所以の者にして之を以て其學問思辨の對象と爲し、其學問思辨の結果を取り實在せる我即ち人格を介して之を實行に表現する者は、所謂儒即ち是れなり。

支那に於ける儒學始源の歴史を尋繹するに於いて、吾人か最古の簡牘に著されたる者として今日に有する所は、易と洪範となりとす。之に先たちて河圖洛書、其他黄帝に關する典籍、三墳五典八索九丘の如き、其存在を説く者ありと雖も、概ね荒誕不稽にして信憑す可からず。牧畜の時代、伏羲氏之に當り、耕作の時代、神農氏之に當る。黄帝軒轅氏に至るに及びて、蒼頡沮誦始めて文字を作り、衣裳を製し、宮室を作り、曆算を創め、音樂を制し、律度量衡を設け、制度文物の興隆彬彬として觀るべし。乃ち多少の典籍此時を以て世に出でむこと殆と自然なりとするも、吾人が今日に於いて傳へ有する所は到底後人の僞作に過ぎざるのみ。

易の起原は伏羲に在り。伏羲仰いで天に觀、俯して地に察し、遠く諸を物に取り、近く之を身に得、而して八卦を畫す。文王周公に至りて六十四卦を生成し、卦辭爻辭の作あり、其後孔子又彖象二傳を作り、而して易の經は乃ち成る。繫辭以下六翼が孔子の作に非ざる事は既に定論と爲せる所。若し夫れ洪範は則ち洛書より得たりと傳説すれども、其怪誕は暫く措き其起原を禹に有するは明確なり。此二書卽ち吾人に與ふるに支那思想の淵源を以てする者。今據りて以て攷究する所あり、太古以來凡そ四期の發達を經て儒學乃ち成れるを知る。

第一。稱して支那太古の思想と謂ふ、普通に時代思潮といふ者と同しく。水平線を劃する一般國民思想の謂に非すして、乃ち其水平線上に立てる代表者先覺者の思想の謂なりとす。而して支那の太古に於ける這般思想の先覺者は、又同時に國民社會的生活に於ける先覺者にして、頗プラトオンが共和國に於ける君長と其性質を同しうする者、而も其思想は則ち此國固有の趨嚮を現して、國民の生活卽ち其唯一の對象たりしなり。如何にせば國民をして安寧福祉を享有せしむべきか。一方には牧畜耕耘を敎へて其生活の需要を贍らし、而して一方に於いては道義社交の道を敎へて以て社會的生活に於ける相互の關係を圓滑和融ならしむ。是故に希臘哲學の第一期か自然觀察なりしに似ず、印度哲學の第一期が厭苦離生なりしに似ず、支那哲學の第一期は則ち國民生活を對象とせる政治論經濟策を以て始まれる者と謂はざる可からず。

第二。然りと雖も人智の開展は稍稍として停まらず、這般の政治倫理の運用も、單に法制的敎導を以てしては其感化の效甚た薄し。是れ伏羲氏以來高陽氏に至る千

餘年間歷代の先覺者が實驗せる所。則ち化育の第一方面たる物質的生活需要の賑贍は年所を追うて增大滋殖する所ありしも、化育の第二方面たる倫理敎育の方針は、茲に多少の釐脩を要するの氣運至れり。是れ即ち堯舜の時代堯舜の事業にして、支那思想開展の第二期なりとす。此事業此思想の面目を尤も簡明に尤も充分に顯現せるは舜典の一節なり。堯曰、咨、爾舜。天之曆數在爾躬。允執其中。四海困窮、天祿永終。この文義を按すれば、其大旨は之を四項に約すべし。(一)先覺者の任務は民人の社會的生活を保全するに在る事。(二)恒常なる理法の遍滿光明なる支配の存在を明認する事。(三)斯かる支配の表彰は所謂曆數を以て其用と爲すと信する事。(四)應事接物即ち實踐哲學の大綱は、一個第一義なる中を以てするに在るを認了せる事、これなり。就中第一項は第一期以來の繼承なりと雖も、第二項以下は則ち新に第二期に於いて起れる思想にして、倫理的政治的敎化の根原亦茲に建てる者と謂ふべきなり。後世孔子の敎學に於いて堯舜を祖述すといへる、其起源亦實に茲に存す。

第三期、體系的叙述

第三。而して明に之を體系的叙述に顯現せる者は禹の洪範なりとす。洪範の九疇を按せば、如何に當時の哲學者即ち先覺者の事業か其對象を有せしかを知らむとす。

五行　水、火、木、金、土。
五事　貌、言、視、聽、思。
八政　食、貨、祀、司空、司徒、司寇、賓、卿。
五紀　歲、月、日、星辰、曆數。
皇極
三經　正直、剛克、柔克。
稽疑　卜筮、雨霽、蒙、驛、克、貞、悔。
庶徵　雨、煒、燠、寒、風。
五福六極　壽、福、康寧、攸好德、考終命。凶、短折、疾、憂、貧、惡、弱。

乃ち看る洪範の九疇は即ち當時の支那哲學の範疇系にして、政治經濟倫理の事項を含有せるは論を須たず、則ち其政治經濟的の着眼よりして天地運行萬象の事理に於いて、其人生即ち民人の生活に關繫ある事項は悉く網羅して遺すことなきを。但夫れ凡べて這般の事項を政法の實地に應用するに至りては、夏殷一千載奕世の

第四期、充全なる實現、儒學の完成

先覺者亦未だ至らざる所有り孔子が夏禮殷禮を以て、能く之を言へども徵とする能はずと爲せる、即ち之が爲のみ。

第四。而して周に於いては則ち曰はく、周監於二代、郁郁乎文哉吾從周と。蓋し這般教學の理想とせる所を執りて最も完全充分に實現せるは則ち文武周公なり。是れ實に從來發達せる支那哲學の一體系が其最盛の機運に到達せる時代と謂はざる可からず。而して此最盛時代の先覺者即ち哲學者が、幾分の組織を以て、這般の思想主義に則りて其世界觀人生觀を寓せる著作を周易の一經とす。易は如何なる書ぞや、今其大綱を揭げむか。其純正哲學の（上）を現象論と爲し、（甲）万象は變易なる事、（乙）變易に一定の秩序あり、即ち萬象恒常なる事、（丙）各個現象即ち各個變易は始中終の三相の運移より成立する事、の三綱に約すべく。（下）を本體論と爲し、（甲）萬有は一なる事、（乙）萬有は一より起りて一なると同時に二なり、是を以て萬有ある事、の二綱に約すべし。若し夫れ其實踐哲學は則ち此事理に基つける所謂儒學の道德政治等の學即ち廣義に於ける社會學なり。而して這般思想到達の次序に關しては、（甲）自家の擧止率止と自個利害の倚繫とは攷究を促しゝ第一因なり。（乙）現象論の到達先つ有りて

解體、儒家の殘生

而して後本體論上の攷察を始めたり。（丙）本體論の到達ありて而して後宇宙論の構造に進みたれども、尙僅に其萌芽を見るのみ、未だ截然たる結果有らず。（丁）現象論中變易に一定不紊の秩序ある事を認了せり。而して純正哲學の効果に關しては、（一）現象論の到達は實用的倫理問題の解釋に與ふるに理論的根據を以てせり、（二）本體論の到達は、構成的に其世界觀を大成し、一系の範疇を副產し、其象形的に表示せらるゝや、乃ち卜筮の用を成すに至れり。是の如き易は實に極盛時代の哲學者の作成せる所。而も事每に心と合し、境順にして功成れる周初の聖人即ち先覺者は、深くこれが理說を開展することなく、偏に卜筮の用に就いて以て易の用を成せりとせり。斯かる哲學思想の實現なる法制組織は、即ち彬彬として美を盡くせる周の禮其者に他ならず。

支那古代の文明は實に周代を以て其極盛に達す。夫れ文明の開展は即ち思想の開展なり、殊に社會的知行合一の好標本たる支那思想の歷程に於いて然りと爲す。這般の文明、這般の思想是即ち最も充全に實現せられたる儒學の理想に他ならず。して、儒學の全く成れるは正に此時に在りと爲す。然りと雖も上九由來久しく住ま

る可からず、周代支那の正徑的思想、その極盛に達するや、之を承けて更に開展する所の學派は到底其全豹を發達するに堪へず、則ち斯學の正統を紹述するを以て自ら任する者と雖も、亦遂に事理と知行と雙雙合一の盛美を保持すること能はずして、儒家は九家と相駢ひて馳するの已む可からざるを致せり。

夫れ洪範は帝王の大則なり。儒學の對象は斯問題を構成する三類九疇なり。儒學の事業は唯り學問思辨の四者に止まらすして、亦隨うて此四者が到達せる結果を行ふを要したる者なり。是故に唯り個我の完美のみならず、衆我即ち社會の完美より、拖いて天地宇宙の完美に迄る、凡そ之を學問思辨し之を實行するは、即ち是れ帝王の事業なり。儒の事業は即ち帝王の事業にして、帝王の大則を與ふる洪範は即ち儒學の大綱を與ふる者たるなり。所謂明德を明にし、民を親しうし、至善に止まり、修身齊家より治國平天下に及ひ、更に進みて天地の化育に參贊する所以の事、これ實に帝王に在りて尤も充全に實現せられ得べき理想にして、而も亦直に以て儒の理想とすべき者たりしなり。蓋し其初や未た曾て儒なく亦特に學問と稱す可き者あらざりき。唯人生見に在りて茲に人事あり、人事在りて茲に人道存す。人道如何を致

察して躬ら其事に當る者を稱して、聖人と爲し帝王と呼ひ、帝王を輔けて亦其事に當る者をも包括して、之を儒と稱するに至りしのみ。所謂堯は之を以て之を舜に傳へ、舜は之を以て之を禹に傳へ、而して湯、而して文武周公、皆是れ儒たり、聖人たり、帝王たりしなり。後世ベベゥフ、カベエ、サンシモン等佛國社會主義の徒が理想とせる政教兼一の君主は、即ち這般の聖人に他ならず。

周道衰へ、夏夷辨を失し、九鼎の輕重漸く將に問ふ者有らむとするや、其位に當る者其道を得ず、其道を得る者其位に當らず、天下の事殆と將に爲す可からざらむとす。孔子此時を以て魯に生れ、魯は周公の後なるを以て聖人の道を魯に行ひ、以て天下の溺を救はむとす。而も天未だ定まらず、魯遂に孔子を用ゐること能はず。乃ち陳蔡の厄あり。七十子の徒從うて遊び、往往にして聖人の道を聞くと雖も、亦隨うて之を施すを得る者太た罕にして、學問思辨と行とは遂に其人を異にするに至り、是に於いてか聖人の道ありと雖も而も聖人の事は復見る能はざるに終ふ。孔子既に魯に用ゐられず、亦衞趙陳楚に用ゐられず、乃ち退いて書傳禮記を敘し、詩を刪り樂を正し、易の彖象二傳を敘し、獲麟に感して春秋の筆を絶し、越えて二年而して卒す。夫

九家の發生

れ事遂に見る可からずと雖も、道猶聞く可きあるは實に孔子に賴る。孔子卒して七十子の徒、各其聞く所を以て之を天下に唱ふ。顏淵最も學を好み、夫子亦之を重んず、不幸短命にして死し、宗統殆と將に泯びむとす。幸に曾子の在るあり、魯得して而して傳ふる所あり。子思に至りて中庸の著あり、以て孟軻に至る。蓋し儒學初帝王の道を道とし帝王の事を事とす。孔子其道を得て其事を得ず、是に於いて聖人儒等の名稱は茲に一大變遷を經たり。即ち其道其事茲に分立して、而して其事漸く儒學範域の外に逸す。是れ所謂儒家の新に起りたる因緣にして、實に儒學の一大變革と謂はざる可からず。

是時に當り、僅に從來發達せる正徑的學問の一斑を得て、各旗幟を儒學門流の外に樹て、政治的紛擾の春秋戰國時代に亘りて更に學問的紛擾の無政府的光景を現出せる者を九家の諸學派と爲す。

(一)道家　哲學の對象中主として本體探究の方面を發達せむとせる者なり。其始は經驗世界にのみ世界觀の根據を置き、政治上倫理上に於いて繁文虛禮徒に末節を事として本源的修養を力めさる儒家の流弊に反對するに起り、虛無を以て宇宙の本體道體と爲し、獨り有名を以て萬物の母と爲す。所謂無名は名狀すべからざる一個實在的第一義なり、有名は既に吾人が見聞知覺に入る所の屬性を有する現象にして、既に絕對の無名に非ず。道家の開祖老子は絕對の第一義を以て無名と爲せども、直に又自ら玄牝、道、德の名稱を下せり、是れ其用に就いて命名せる者にして、萬有の始源たるに名つけて玄牝とし、恒常の定律たるに名つけて道とし、人の踐履すべき所たるに名つけて德とせるなり。而も未だ此無名が主觀に存するか將た客觀に存するかを講明せむとせず、這般の問題は道家の甚た以て念と爲さゝりし所、唯形式的繁瑣に代へて虛無を說き恬淡を以て事とせるは、頗る佛敎に於ける成實三論等純理無象論が毘曇法相等事象差別論の後に出でたるに似たる者あり。道家の哲學は其未た大に發達せざるに先たちて夙く所謂道敎の餌食となり、而も其思想界に及ぼせる影響は、主として戰國時代の諸家に多きを見る。

(二)陰陽家　これ從來の哲學對象中宇宙觀察の部分を發揮せる者。間、其說の細微に入る者有りと雖も、要するに學問の大綱を離却して不調和的に一偏の進路を取れる者にして、今日の學問より見れば笑ふ可き者のみ多し。人事の變を陰陽象數の變

によりて、其應を徵せむとする者なり。

(三)名家　禮官より出で、煩瑣なる名教儀法の末を以て經世の本と爲せる陋見者流なり。但當時に在りても甚た勢力を得すして止めり。鄧析子尹文子等之に屬す。

(四)法家　法律刑政を以てせざれば、先王の道亦國と天下とに行はれ難し。法家は此一偏に立ち、貴賤親疎を分たず、一に平等の刑名を以て擬する者、所謂一時の計に過きざる者なり。韓非商鞅の徒之を首唱し、而して還自ら困阨す。

(五)墨家　此平等にして差別を絶する原理の上に立ち、而して其內容資料は全く之と反對なる親と愛とに取れる者を墨家と爲す。曰はく、子自愛不愛父、欲虧父而自利、弟自愛不愛兄、欲虧兄而自利、非兼愛也。盜愛其室不愛異室、故竊異室以利其室、亦非兼愛也。墨子兼愛上編と、是れ此派兼愛說の眞相なり。其攷察の對象は學、戰、陳、禮の三を主とす、而も亦各平等の原理に本つけむことを期す。曰はく、君子雖有學、行爲本焉。戰雖有陣、勇爲本焉。喪雖有禮、哀爲本焉修身篇と。而して其事物を觀察する尤も經驗に重を置き、先天の性に至りては頗る之を輕視す。墨子見染絲而嘆曰、染於蒼則蒼、染於黃則黃、非獨染絲然也、國亦有染所染篇といへるが如き、頗る後世楊子雲が性善惡說を豫想する者あり。其儒家の說に於ける期する所相似て而も多少其途を異にする者と謂ふべし。

(六)縱橫家　辯論術を發揮せる學派なり。鬼谷子蘇秦張儀の徒之が白眉たり。希臘の縱橫家たる詭辯學派は哲理的に外界知覺の不可能を論し、印度の縱橫家たる尼夜耶學派は宗教的に聲の常住を論し、而して支那の教學に於ける縱橫家は、其思想全般の傾向に伴うて社會經營の問題を以て論議の主點と爲せり。

(七)雜家　陰陽象數より人間社會の實際問題に至る、皆之に觸れむとして、而も駁雜統一なき學派なり。

(八)農家　國家經營上民人の財力を贍らすことを主として論せる學派なり。

(九)兵家　攻守問題より社會經營を攷察する學派なり。

凡そ斯の如きは皆是れ學問衰頹の際に起る所にして、一偏の觀察論議を以て事物の全般を括論せむとするや弊一に此に至る。這般紛紛の議說天下に滿つるに際し、遙に孔子を承いて出でたるを孟子と爲す。孟子戰國の初に生れ、義利の辨王霸の別を以て到處に辯說し、渾身の熱血を瀝ぎ畢生の心氣を披いて、以て斯道を顯揚するに竭せりと雖も、蕩蕩たる大勢遏む可からず、政治社會の混亂は每に人心の慌擾

古代儒學の終期、秦火

中古儒學の起程、漢學

汨淪を伴うて以て秦の一統に至れり。思ふに孔孟の間、其教學に於いて亦多少の差なき能はず。孔子唯韶に於いて善美の窮盡を認め、而して孟子乃ち一夫之紂の說あり。夫子の性と天道とを言ふは得て聞く可からずして、孟子乃ち性善を論することと至れり。蓋し子思曩に天命に就いて性を立し、率性に據りて道を立せるも、其要中庸を說くに歸して、性の說に於いて未た太た詳にする所あらず。孟子に至りて性の論始めて精しきも、亦未た曾て其歸を古聖の傳統以外に求めず、荀卿出でて性惡說あり。其後漢に至りて楊子雲あり、之を調和せむとして成らず。皆既に聖人の旨に非ず。蓋し始皇は猶ユスティニアンの如し、希臘哲學西紀五二九年を以て終滅を告げ、而して支那古代の學問は正に秦火を以て其期を了す。斯の如くにして儒學及ひ諸家の運命は恰も周室及ひ諸侯伯の命運と相駢ひて其消長を同しうす。

六王の雄雌始めて分れ、四海纔に一なるを得たりと雖も極端なる獨裁專制の政治は直に其弱點を露し來り、天下の兵器咸陽に銷して鉏耰棘矜函谷に擧がり。先王の典籍を焚くの炎焰は化して帝闕三月の刼火と爲り、孺子軹道に降り、江東楚將を哭して、天下は氾上亭長の家を仰くに至れり。而して四百年泰平の基は開かれ、而して年來制禁の文學は復繁榮の運に向へり。

賈生及び太史公

陸賈新語を作りて漢高を悅はしめ、挾書の律一たひ禁を除くや、警敏なる董仲舒は賢良の三策を上り、儒學の面目漸く玆に表はれむとす。而も春秋を經戰國を歷て、縱橫屬至儒學が爲に被れる創痍は、一たび癒えて猶終に其痕跡を消すること能はず。孝文孝武獎むる所は則ち此に在り、董氏劉氏繹ぬる所亦此に在りと雖も、充分健全ならざる思想は遂に纖緯の說を雜生し、其前代の遺書に就いて討究する、亦概ね訓詁の末に僻し、橫流汨沒復當年壯大雄偉の宏道に優遊する者なきに至れり。是時に當りて獨り年少氣銳の賈生は、淚を揮うて建策する所あり、眞に是れ空谷の跫音、而も骯髒鬱勃遂に大に伸ぶるあるの位に當らず、瀟湘に遊びて屈平が寃魂を吊し、空しく多感の血淚を湘風楚雲に灑いで、謫居數歲、服鳥乃ち至る、空言皷說稍稍として天下を捲かむとするや、太史公遷が手を執りて而して泣き、小子敢て讓らず、孔子卒して五百歲乃ち能く明世を紹ぎ易傳を正し春秋を繼ぎ、詩書禮樂の際に本つけたる者有りて出づ。彼意鬱結する所あり、其道を通ずることを得ず、乃ち往事を述べて來者を思ひ、陶唐に起りて麟止に至る、誠に儒學事實の方面を開拓せる者と謂ふべ

し。（史記太史公自序傳）西漢の學問此二氏を除きて復觀るべき者なし。

思ふに洪範の五行以下を立つるは其旨皇極を立てむが爲なり。蓋し洪範は天人感應の理を述ぶる、唯大體の上より其關係を是定したるに過ぎず。易の象數亦その聖人の手に在るや、唯人道の大綱と其變易運行の幾微とを啓示せるに止まりて、所謂天人鬼神の際に至りては、眞に是れ言ふこと罕なりし者。夫の一言一行の得失を以て直に天然界に起る災祥の應を言ふが如きは、決して儒學の本體に於いて見る能はざる所なり。而して前漢學問の小康時代は、夙く已に方術の士の跋扈を來たし其弊遂に斯道の畛域にさへ浸入して、緯緯五行の說となり、董仲舒之を信し、劉向は洪範五行志の著あるに至れり。要するに訓詁は斯道を淺うし、緯緯は斯道を散ず。淺き者は之を得ること少く、散する者は之を失ふこと多し。得ること少ければ道漸く傳はらず、失ふこと多ければ事漸く實を距る。斯の如くにして前漢の世を終ふ。

漢東に遷りては、學者一般に廉潔高尙を尊び、學は漸く實に離れたり。蓋し前漢の學者は固陋なれども着實、後漢の學者は高尙なれども虛衒。是に於いて浮誇の潮流を生じ、是に於いて高慢の趨勢となり、鄭玄馬融より三國の王弼虞翻に至る、博識精

學問的六朝

隋唐の諸儒

見大に學術の面目を改むる者ありと雖も、儒道聖敎を距ること蓋し日に遠し。想ふに時、時ならず位當らざること、精采奕奕たる這般の鴻學をして、力を眞儒の宏道に致すこと能はさらしめたる者あるべしと雖も、抑〻亦橫流の勢、蕩蕩として遏むべきこと難く、而して這般亦其際に浮沈して自ら得たりと爲しゝなり。槳を橫へて詩を賦せし一世の雄曹孟德、其子丕植を魁首とせる、所謂建安の七子の如きは、則ち是れ當時浮誇華麗なる文學の代表者のみ、斯道に於いて奈何ともすることなきなり。

後漢の中葉佛法始めて入り、東晉の晩期諸胡連に侵し、支那の山川は茲に復び五百年來靜穩の風光を改め、人心亦隨うて甚だ攝亂に陷れり。當時纖に殘喘を衰僅の餘に保ちし儒學も政治社會の分裂と共に南北の區分を生ぜり。蓋し春秋割據の國粹が既に表明せし如く、アルプスの山脈が獨伊の文明を劃するに似て、南方は浮華なり、北方は素樸なり、乃ち書に於いては南宗と北宗ととなり、書に於いては鍾繇王羲之と蔡邕ととなり、而して儒學に於いては亦王肅が一派と鄭玄盧植が一派ととなれり。斯の如く紛紛擾擾の間に、學問的六朝は政治的六朝と相終始せり。

是より先、新莽の大夫楊雄あり、其人固より觀るに足らずと雖も、其著法言の說く

所は幾分か聖學の遺意を傳へさるに非ず。降りて隋の隱君子王仲淹に至りて、溷濁の世到底聖人の事を行ふを得ざるや、乃ち退いて敎育に從事す、其着眼未だ以て高しと爲す可からずと雖も、其心事其行實優に孟子以後の隨一に數ふへきの位に在り。而して其育成せる所悉く是れ風雲の寵兒、隴西の一裨將を輔けて亂を撥し正に反するの任、三百年太平の基を開くの實は、載せて彼等の雙肩に懸けられたり。

唐の太宗四方の志、伸びて八荒に及び、夏夷の分復た明にして、經術の士更に大に用ゐられ、粲然たる文化は天下に衣被し、孔穎達勅を奉して、五經正義を撰び以て官學の敎科書を制定するに及びて、南北の分派も亦茲に折衷統合せられたり。惜いかな唐の學術は遂に文藝に偏して思辨に精ならず、則ち孟子を以て自ら任せし韓退之と雖も、文八代の衰を起すは則ち之有り、而も遂に道天下の溺を救ふこと能はず、原道原人數篇の著、徒に其到達の卑近を示すに足るあるのみ。但其心操の高烈なる其行事の摯實なる、固より以て大儒とするを妨げず。柳子厚の學高淡逸雅、甚た欽す可き者ありと雖も、其儒學に於ける所得は思ふに一着を昌黎に輸せざるを得ざるべし。凡そ唐の代、有言者に乏しくして、而も有德者は則ち此の如く乏しきに至らず。

近古の儒學、宋學

五代を經て趙宋に至るに及びて、學術の面目茲に第二の一大變遷を成せり。

蓋し漢より唐に至る、顯晦汚隆時に一ならずと雖も、其異說を混入する者の他は、概ね古先聖王の遺意を經傳に求め、眞正確實に聖道を繹ぬるは、古書を眞確に理會するに在りと爲し、專ら訓詁に孜孜として以て講學の要を得たりと爲せり。而して講學實行を重んずる風尙の消長は常に二個の因子に倚繫せし者に似たり。一に曰はく陰陽五行說の消長なり、二に曰はく浮文虛詞の消長なり。此兩者の消するや、儒道の眞相は每に較〻闡揚せし者の如し。

趙宋の初、孫奭刑昺胡瑗を經て孫復に至り、尊王發微を著して春秋三傳の外に新說を立つ、是れ實に宋學異說を立すの始にして、宋學に特有なる討究的批評的精神は茲に其端を發したるなり。爾來石徂徠純ら孫復の後を承け、歐陽永叔は易童子問を作りて十翼が夫子の作に非ざるを說き、司馬君實は楊を好みて疑孟の作あり。偏に聖經賢傳を奉して以て學問の要を得たりと爲さず、徧く之を諸子百家異端外道に尋ね、苟くも取る可き所あれば、鋭利なる批評眼を以て輒ち之を資るの學風、翕然として茲に盛に、支那學問一新の氣運は漸く將に熟せむとせり。

時なるかな濂溪の周茂叔出でて大極圖說、而して通書の著あり、始めて無極而大極の義を揭げ、儒學固有の第一義以外、更に佛敎の純理無象論、道家の無名說を參取して、以て無差別絕對の第一原理を考定す。張橫渠の東銘西銘に至りては、老子の影響殆と掩ふ可からざる者あり。其所謂一大清虛は、即ち老子の無名、谷神、道、德の四義を兼有せる宇宙原理と正に相同しき者。若し夫れ邵康節の先天數理に至りては、則ち更に易が儒學の經典に於ける特殊の位地、即ち其純正哲學的象數的の觀察樣式を發揮して、這般の特殊なる意義を有する數を以て宇宙原理に擬せること、正に希臘へラクライトスの敎學に比すべく、其所謂數の甚た特殊なるは、以て印度婆羅門敎の數論勝論に於ける聲に類すとすべし。程明道程伊川次いで出で、茂叔の極端に至らずして、道理形器の諸說、剖析頗る其工に達す。二程の門下楊龜山謝上蔡あり、龜山は傳へて羅從彥より李侗に至る、李侗の門下乃ち朱晦庵あり。伊川の門下に王震澤あり、王震澤謝上蔡の末終に陸象山となる。其他二程の私淑に胡安國あり、晦庵象山の同代に陳龍川呂東萊あり。抑々宋學周茂叔に於いて大に起り、頗る理學的の色澤に富み、張橫渠に於いて更に此傾向を增し、二程に至りて多少儒學的に近つき、胡

安國は更に此傾向を强うす。

而して之を集めて大成せる者を朱晦庵と爲す。晦庵の學說、究理の學に於いては周濂溪の太極說を取り、人生の學に於いては二程の體系に隨うて、而も更に理氣の辨を詳にす。宋代の學術界、之を敍する簡短にして悉盡すること難し、今唯其三點の特色を擧けて、以て學問の變遷を觀るに資せむか。第一は性理の攷究是れなり。是れ恰も漢學の訓詁に對する者にして、其の思辨の範疇、彼に在りては太た狹く、此に在りては太た廣き所以、而も亦儒學の眞相と必すしも密に相契合せさる所以なり。不契合如何なる點にか表れたる、即ち第二學說の勃興是れなり。蓋し儒學は學問思辨行の五程一氣直下たるへき者にして、行なき所學問思辨あることなし、猶何ぞ人生別に學說と稱する者を容れむや。而して學說は即ち究理の結果を構敍する者なり、學說起りて學術成り、學術成りて儒學衰ふ。乃ち第三人生必須の問題の解釋は、這般深奧微妙にして又煩瑣なる學術に求めさるべからざるが故に、人は道を求むるの遠きを慽みて、身世の寧處し難きを歎す。之を要するに粲然たる文章言說誠に觀るべき者ありと雖も、顏子の好學曾子の魯得は遂に之を朱學派の一系に於いて求む

陸象山の地位

可からざる者あり。周濂溪に起りて朱晦庵に大成す、而して儒學終に起らず。

是時に當りて粗〻這般一系の學派の短處を電睨して、一派の異說を立て、直截簡易を以て學問の主旨と爲し、實踐躬行を以て學者の躰面と爲し、彼派以外に一流を創めて、雙雙並對時に諧調の和を得、時に琢磨の光を發ちて、以て今日に至れる者あり。金谿の陸象山即ち是れなり。

頭を回らせば星霜悠悠四千程、源を谿間の澗泉に發し、細流を併せ支川を派し、或は峻嶺嶸嶸の間を奔激し、或は曠原平野の中に漫溢し、蜿蜒千回漾漾蕩蕩として其流を改めさる儒學の大江は、其水質に於いて其兩岸の光景に於いては、舊觀時に隨うて變せりと雖も、一點消す可からざる清光は、依然として其下流に保持し、今や浩浩洱洱、汪洋として殆と其津涯を辨せさる宋代の滌漫に到達せり。所謂經久の清光とは何ぞや、實行を事業にし、實在を對象とすること即ち是れなり。陸氏の子如何に此際に其地歩を占めたるか、吾人は將に仔細に其內外兩面の生涯を窺はむとす。

傳

第一　系譜

金谿陸氏の家系

金谿陸氏の家系を繹ぬるに、諸書及ひ諸家の記する所殆と皆相同し。今寧ろ直に象山の自ら記する所によりて之を述ぶるを可とせむか。全州教授陸先生行狀と題する一篇（陸象山全集卷二十七、一左）は、象山が季兄復齋の行狀を敘せる者なり。其中に云はく、

先生名九齡、字子壽。其先嬀姓、田敬仲裔孫。齊宣王少子（元候諱）通、封於平原般陸鄉、即陸終故地、因以爲氏。通曾孫烈、爲吳令豫章都尉。既卒、吳人思之、迎其喪、葬于胥屏亭。子孫遂爲吳郡吳縣人。自烈三十九世、至唐末、爲希聲（是象山八世祖）論著甚多、後仕不偶、去隱義興。晚相昭宗、未幾罷。邠隴華三叛兵犯京師、輿疾避難。卒、謚曰文。文公六子、次子崇（七世祖）生德遷（六世祖）德晟、以五代末、避地于撫州之金谿、解橐中裝、買田治生、貲高閭里。德晟之後散徙不可復知。德遷遂爲金谿陸氏之祖。六子、高祖有程

果して看る逸才の名門に生ずるなり

爲第四子、五世祖博學於書無所不觀。三子、曾祖演四世祖爲第三子、以學術重於鄉里能世其業、寛厚有容。四子、祖戩爲第四子。再從兄第蓋四十人。先祖最幼。好釋老言、不治生産。四子、先考居士君賀爲次子。生有異稟、端重不伐、究心典籍、見於窮行。酌先儒冠昏喪祭之禮、行之家、家道之整、著聞州里。六子、先生爲第五子、生而穎異、能步趨則容止有法。

分註は象山の高足楊敬仲の象山行狀其他より補入せる者。五世の祖以來學術を以て家聲を世にせるの狀、以て看るべきなり。祖釋老を好み、考端重躬行酌禮整家といふか如き、夙く已に其端整なる家庭の最少兒の異日を想はしむるに足る者あり。今更に象山の兄弟を敘し、上述を併せて之を圖表すること左の如し、

- 田敬仲（三十九世孫）
  - 齊宣王（少子）
    - 通（元侯封於平原始稱陸氏）
      - 曾孫 烈（吳令豫章都尉）
      - 希聲（唐末文公）
        - 崇（有六子、次子）
          - 德遷（金谿陸氏之祖）
            - 有程（有三子、有六子、四子）
          - 德晟
- 季演（有四子、季戩好釋老）
  - 有四子、二子賀字道卿
    - 九思字子疆
      - 室鍵氏
        - 九余字子餘（總藥肆以足其家）
- 繼室鄧氏
  - 九皐字子昭號庸齋（六子皆其出也）
  - 九韶字子美號棱山
  - 九齡字子壽號復齋
  - 九淵字子靜號象山

道卿が其嚴整清肅なる家法を以て、式式として鬱鬱の六子を率ゐし狀、亦想見するに堪へたり。長九思慈祥にして篤實、其作る所家問一篇の如きは、朱晦庵が激賞して措かざる所。次九敘は則ち公正にして通敏、孜孜として家業藥肆の事を總べ、以て其家に給す。象山他日その墓誌銘を作りて云はく、

家素貧、無田業、自先世爲藥肆以養。生兄弟六人、公居次。伯叔氏皆從事場屋、公獨總藥肆事、一家之衣食、百用、盡出於此。（中略）故能以此足其家、而無匱乏。後雖稍有田畝、至今計所收、僅能供數月之糧。食指日衆、其仰給藥肆者日益重。公周旋其間、如一日也。（全集卷二十八三左）

以て九敘が一種出群の氣格ありしを見るべく、亦以て道卿一家の經濟が當時如何の狀なりしかを見るべきなり。九皐力學勤勉にして文行俱優の稱あり、文集あり、觀

るべき者多し。九韶に及びては則ち學識一等を超え、場屋を事とせず、其二弟を率ゐて盛に古學を講ず。朱晦庵と友とし善く、首めて太極圖說の正に非ざるを云ひ、乃ち後年季弟の爲に氣餒を吐くの導線となれり。九齡穎悟にして大志あり、學問浩博、季弟象山九淵と提携して、江西二陸の盛名は河南の二程と相比し、一世を震撼せる蓋し亦偶然に非ず。

象山尊親の系譜は略〻上の如し、其卑親に關することは宜しく彼が行狀の後に來るべき者なれども、便覽の爲茲に附記すべし。

象山の家族

- 九淵
  - 持之
  - 室吳氏 名愛卿 吳茂榮長女
  - 循之
  - 殤子 天折 季兄子壽が後たるべき者
  - 女子

これより以上は今詳にするを得ず、暫く闕きて異日を俟つ。

第二　年譜

一歲　南宋の高宗紹興九年。（崇德天皇保延五年。西紀一一三九年。）二月乙亥辰時、陸九淵字は子靜、支那江西撫州金谿の陸氏の家に生る。去年都を臨安に定む。吳价卒す。金人地を歸す。

二歲　紹興十年。金軍南侵して敗る。

三歲　紹興十一年。十一月十五日母饒氏卒す。秦檜奏して岳飛張憲岳雲を誅す。異議の人貶竄殆と盡き、敢て復兵を言ふ者なし。和議成る。

四歲　紹興十二年。天地の窮際を疑問す。

五歲　紹興十三年。鄉學に入り讀書す。

七歲　紹興十五年。既に鄉譽あり。

八歲　紹興十六年。論語を讀みて學而篇有子の語の支離を疑ふ。劉豫死す。

九歲　紹興十七年。（西紀一一四七年。）既に文を能くす。第二十字軍起り、土耳其人と戰うて克たず。

十歲　紹興十八年。郡庠に入學す。吳茂榮に知られ、其女婿と定めらる。

十一歲　紹興十九年。（西紀一一四九年。）　金主亶弑せらる。亮繼ぐ。第二十字軍終る。

十二歲　紹興二十年。　金主燕京に徙居し、大興府と爲し、中都と號す。

十三歲　紹興二十一年。宇宙の字義に因りて志を聖學に篤うす。　韓世忠卒す。

十四歲　紹興二十二年。初夏「講習豈無樂」の詩あり。

十六歲　紹興二十四年。靖康の事を聞き、弓馬を學ぶ。

十七歲　紹興二十五年。「大人詩」あり。　秦檜死す。沉該、万俟卨、湯思退、陳康伯、朱倬、相繼いで相と爲る。

十八歲　紹興二十六年。（後白河天皇保元元年。）　保元の亂。

二十一歲　紹興二十九年。（二條天皇平治元年。）　平治の亂。

二十二歲　紹興三十年。（二條天皇永曆元年。）　源頼朝伊豆に流さる。

二十三歲　紹興三十一年。　欽宗去年の冬を以て五國城に殂せるの凶聞至る。虞允文金を敗る。

二十四歲　紹興三十二年。十月二十七日父陸道卿卒す。秋試周禮を以て鄉舉す。金使來る、復和議を尋ぐ。夏六月高宗內禪し、太子孝宗立つ。

二十五歲　孝宗隆興元年。北征利あらず。

二十六歲　隆興二年。　張浚卒す。

二十九歲　乾道三年。（六條天皇仁安二年。）冬嘉禮を成し、吳愛卿始めて大歸す。　平清盛太政大臣と爲る。

三十三歲　乾道七年。秋試易經を以て再ひ鄉舉す。八月十七日子持之生る。

三十四歲　乾道八年。春試呂伯恭に知らる。夏五月廷對、進士出身を賜ふ。秋七月十六日家に歸る、遠近風を聞いて來りて親炙す。朱晦庵が通鑑綱目成る。

三十六歲　淳熙元年。三月部調官に赴く、四明を過り、會稽に遊ぶ。四月復都下に至る、廸公郎隆興府靖安縣主簿を授けらる。五月二十六日呂伯恭を衢に訪ふ。八月十二日子循之生る。　虞允文卒す。

三十七歲　淳熙二年。乙未歲（距今七百二十年。）呂伯恭象山と復齋とに約して朱晦庵等に鵝湖寺に會せしむ。

三十八歲　淳熙三年。　六月朱熹を召して秘書郎と爲す、至らず。

三十九歲　淳熙四年。正月十四日繼母鄧氏卒す。朱晦庵が論孟註成る。

四十一歳　淳熙六年。高倉天皇治承三年。服除かれて建寧府崇安縣主簿を授けらる。平重盛薨ず。

四十二歳　淳熙七年。高倉天皇治承四年。滋瀾に在り、九月二十九日季兄復齋卒す。張拭卒す。源頼朝兵を起す。

四十三歳　淳熙八年。安德天皇養和元年。二月朱晦庵を南康に訪ふ、白鹿洞書院に義利章を講ず。丞相少師史浩象山を薦む、赴かず。九月朱熹を以て浙東常平茶鹽に提舉す。十二月熹が社倉の法を諸路に下す。呂祖謙卒す。平清盛薨ず。

四十四歳　淳熙九年。復薦せられ、旨を得て職事官を與へ、國子正に除せらる。秋國學に赴く。九月明堂に享す、分獻官と爲る。

四十五歳　淳熙十年。國學に在り。冬勅令所刪定官に遷る。

四十六歳　淳熙十一年。勅局に在り。春祚德廟を祀る、獻官と爲る。殿輪對五劄子を上る。

四十七歳　淳熙十二年。安德天皇壽永四年。勅局に在り。安德天皇海に崩す、平氏亡ぶ。

四十八歳　淳熙十三年。後鳥羽天皇文治元年。勅局に在り。宣義郎に轉ず、將作監丞に除せらる。十一月二十九日台州の崇道觀を主管せしめらる。既に歸りて學者輻輳す。源頼朝總追捕使と爲る。

四十九歳　淳熙十四年。貴溪の天山に登りて學を講し、遂に精舍を建てて居り、明年象山と號す。十月仲兄子儀を葬る。秋初殤子を亡ふ。

五十歳　淳熙十五年。象山精舍に在り、學徒大に集る。

五十一歳　淳熙十六年。後鳥羽天皇文治五年。四紀一一八九年。象山方丈に在り。朱晦庵と贈答して太極を論ず。孝宗禪り、太子光宗立つ。藤原泰衡源義經を殺す。第三十字軍起る。

五十二歳　光宗紹熙元年。象山方丈に在り。

五十三歳　淳熙二年知荆門軍に除せられ、七月四日啓行す。九月三日荆門軍に至る。新城を築く。

五十四歳　南宋の光宗紹熙三年。後鳥羽天皇建久三年。四紀一一九二年。荆門に在り、閲武を爲す。十二月七日疾あり、十四日癸丑日中、陸九淵子靜卒す。源頼朝征夷大將軍と爲る。第三十字軍失敗に終ふ。

唐宋社會形勢の對比

第三　時代

支那當時思想の狀態は略〻序論に於いて之を叙せり。今や陸象山の生涯を觀るに先たちて、當時社會の情勢を瞥見するの要あるべし。

唐の太宗曠世の雄資を以て、諸胡を中夏の外に逐ひ、化を荒服の遠に及ぼし、六朝紛亂の後を承けて、一統承平の績を立て、無事一百餘年、史の表面多少の風波ありきと雖も、概ね内廷宮室の事に係りて、天下敢て動搖せず。貞觀開元を經て、驕陽赫燿たる明皇の治に及ひ、白日漸く傾いて、漁陽の鼙鼓一たび警を告ぐるや、霓裳羽衣乍ち破れて空宮唯落木を聞く。是に於いて邊疆復多事、諸胡漸く強く、藩鎮益〻重く、内豎制する能はすして、唐は終に以て滅ぶ。五代六十年、遂に小康を得ず。趙匡胤乃ち涿郡に起り、風雲に際會して終に周の恭宗の禪を受け、天下復太平を謳ふに至れり。

蓋し兩漢より以來、四百餘歲の擾亂を經て、治を謂ふ者爾來必ず唐宋を稱す。兩朝の名臣賢士、君を輔け民を恤み、治道を參贊して大に功あること、元凱以降未た曾て見さる所。然れとも唐は玄武門蹀血の當年より、宮室朝廷常に平靜なる能はず、宋は則ち君相雪夜の雅會より、水魚の關係常に厚うして、君臣共に民事に竭し、朝廷の平和内治の靜謐、殆と周昭以來希に覯る所なり。當時又女中の堯舜あり、事恒に非すと雖も、治化の洽厚實に支那の中世史を飾るに足る者ありき。之を要するに唐の初盛の治は外面的なり、中央穩ならずと雖も外方化を謳ふ。宋の前期の治は内面的なり、宮廷國内共に太平に樂しみて、而も强夷内漸の兆夙く既に見はる。曹彬卒して僅に五年、眞宗の景德元年、乃ち契丹の大擧入寇するあり。西遼漸く强く、契丹益〻大に。中夏は纔に彼に給するに財物を以てして、其名は夷狄を撫徇すと稱すと雖も、其實歲貢を献して漸く其來侵を免れしのみ。且夫れ道の存する所は無道の强も以て加ふる所ある能はす、宋の能く外患を免るるは、單に其内治を以てのみ、外勢既に熟して、内力の以て之を禦くに足る有るに非ざるなり。即ち宋の平和は唯不安定均齊のみ。是を以て其内治一たひ敗るゝや、其弊單に内に在るに止まらずして、外患浸入の勢は實に河を決するに似たる者ありき。

黨禍及ひ外釁

神宗の熙寧二年夏人大に入寇し、元豐四年宋師夏を伐ちて潰ゆ。哲宗の政和五年に至り、女眞の阿骨打立ちて帝と稱し、國を金と號す。熙寧元豐元祐の間、朝廷名臣猶

存せりと雖も、王安石の新法端なく政治的朋黨を啓きて、其禍浸潤播延、遂に朝廷の勢力即ち宋朝平和の根本的勢力を擧けて之を黨禍の蠹蝕に委し、歐陽修卒し（神宗熙寧五年）富弼卒し（同元豐六年）而して司馬光も亦卒し（哲宗元祐元年）て、元祐紹聖の間、其黨の追剝追復せらるゝ者十年にして六反あるに至る。而して、宋朝の祿命亦頽然として茲に老ゆ。

此時に當りて禁京の專權あり。姦黨碑立ち、九鼎鑄られ、道君皇帝出で、元宵賞せらる、而して星芒屢〻見はれ、地震ひ、河決し、怪異迭出す。宣和四年、金、遽に克ちて燕京を取り、其七年遂終に亡びて金乃ち入寇す。徽宋位を遜れ、欽宗繼き、靖康元年春正月金人遂に京師に抵る。武力を以て維持せられさる宋朝の治化は、是時に於いて一箭能く戎狄を膺ち荆舒を懲らすに足る者あるなく、种師道必勝の計を上り、大學生陳東等闕に伏して乞ふ所ありしも、以て李邦彥吳敏の主和說を破ること能はず、以て李綱の罷免を止むること能はず。金人京城を圍むこと三十三日、宋廷遂に割地の詔を與ふ。正に是れ城下の盟、師道、綱の如き少しく謀略あるの士は、要擊殲殺の策を建つと雖も遂に用ゐられず。而して一たび指を染めたる金人は、益〻宋の能く爲すなきを見るや、未た幾ならずして復至り、斡離不は東路よりし、粘罕は西路よりし、長驅して京師

を襲ふ。唐恪、耿南仲等諭安の小輩猶和を說いて軍氣を沮み、張叔夜の用兵亦甚た功ある能はず。十一月より圍を受くること凡そ四十日、皇帝既に捕はれ、上皇亦敵手に陷り、皇后太子親王帝姬皇族前後三千餘人、終に皆楚囚の人たり。其慘其辱實に幽王の犬戎に於けるに軼く。是より先京城危急の時に當りて、四方勤王の師の至れる者、皆詔して止まりて進まざらしめ、金人の退くに訖るまで、未だ曾て兵を交へず、一時空しく憤死する者甚だ衆く、宋帝北遷して宋朝南渡す、是れ實に宋に臣子たる者千秋の恥辱とする所たり。

高宋立ちて宋祀僅に絕えず、韓世忠、吳价、岳飛等善く兵を用ゐ、屢〻金人を敗ると雖も、內朝は則ち囚命の一佞堅威福を專にし、南南北北の主和論益〻跋扈して、忠武の將士漸く誅死し、而して梓宮終に歸らず、中原終に復せず。紹興八年、九淵生るゝの前年、胡銓、尹惇、李綱等の上疏して慷慨激切斬姦を論するあり、九年即ち象山生るゝの年、張浚五たび上書して經略を說き、岳飛亦上疏して報効の誠を致し、回復の策を講ず。皇帝臨安の僻宮に在り、六月皇后邢氏は五國城に崩し、七月丁亥王倫金に使して事を議す、正に是れ群陰長して一陽消するの時、陸子象山は乃ち此時を以て此國家に

洪水將に至らむとす

生れたる者なり。

剝復常理あり、物極まりて乃ち變ず。金人連勝、乃ち意滿ち志驕り、兵寖く弱く、迭に勝敗あるより漸みて數〻敗るゝに至り、趙宋心中の蟲たる秦檜も、亦紹興二十五年を以て死し、金に於いては則ち侵略進取の梟雄亮殂し、北方の小堯舜と稱せらるゝ平和の君主世宗雍立ち、宋の孝宗隆興乾道淳熙と相終始して、南北皆休息を得たり。象山の生時は正に此時に際せり。而も此休息は眞に是れ一時の事のみ、此時北邊既に奇渥温氏の漸く强大なるあり、凝血赤石の寧馨兒、氣略夙に東半球を呑む。趙宋の天下、內果して充實あるか、其治其化果して無道も以て加ふること能はざるの域に達せるか。吾人は象山の生涯に於いて、彼か如何に此際に處せるか、如何に世態の眞相を目せるかを觀むと欲す。

第四　生涯

長成

奇氣ある少年

偉人にして幼時平凡、一の觀るべき性行なく、中年以上にして始めて大に人を驚かすの事業あり、以て其名を不朽にする者あり。又幼少より衆人に絕するの資質を表し、長するに及びて益〻彰れ、生涯を擧げて殆と一の理想的人格の現化に似たる者あり。蓋し苗にして秀でざる者あり、秀でて實らざる者あり。思ふに陸象山の如きは偉人の乙種に屬し、能く秀で善く實り、以て世界の記傳の上に濶步高擧するの巨人となれる者か。

象山生れて異采あり、三歲にして已に戲弄せず、四歲にして靜重成人の如し。一日父賀に從うて行く、卒然として問うて曰はく、天地何くにか窮際する所ぞと、賀笑うて答へず。而して天地窮際の疑問は、幾年の間暫く其小なる胸裡の包藏に附せられたり。

五歲にして始めて入學讀書す。紙隅に捲摺なく、其履は弊することあるも壞るゝ

天地の窮際を解得す

ことなく、經夕衣を脱せず、其門に立つや行人望見して嘆賞せざるなし。甫めて六歲、曾て親に侍して嘉禮に會す、其衣の華好に過ぐるを以て却けて受けず、季兄九齡時に年十三、禮經を學げて以て告ぐ、廼ち之を受く。其書を讀むや外閑にして實は攷索甚だ力む、夜勉學深更を忘る、伯兄家務を總べ數〻之を見る。乃ち七歲にして夙に鄕譽あり。八歲の時論語學而篇を讀みて有子曰の一章に至り、乃ち其語義の支離を疑ふ。嘗て鼓聲の窓櫺を振ふを聞きて、亦轄然として覺る所あり。其事物に注意して進學に敏なる概ね此類なり。九歲にして既に能文の聞あり。

十歲轉して郡庠に入る。文雅雍容雞群一鶴の觀あり。敎授吳茂榮大に之を奇とす、一老儒あり謂うて曰はく、君平生愛女の爲に佳婿を求む、陸氏の子を措いて將た安にか求めむと、因りて以て嫺を爲す。是れ後年象山を輔けて行道成事の大なる生涯を全うせしめたる孺人吳氏なり。

學識行實日に益〻進み、隨うて讀み隨うて覺る。古書宇宙の字義を解して、四方上下爲宇、往古來今爲宙と謂ふを讀むに及ひて、忽ち大に省て曰はく、元來無窮、人與天地萬物皆在無窮之中者也と。年來胸間に來往せる天地窮際の大疑問は、是に於いて渙

感發弓馬を學ふ

然として氷解す。而も其得る所唯り此に止まらざるや、乃ち筆を援りて書して云はく、宇宙內事乃己分內事、己分內事乃宇宙內事と。又云はく、宇宙便是吾心、吾心即是宇宙。東海有聖人出焉、此心同也、此理同也。西海有聖人出焉、此心同也、此理同也。南海北海、有聖人出焉、此心同也、此理同也。千万世之上、至千万世之下、有聖人出焉、此心此理亦莫不同也と。噫誰か想はむ是れ實に十三歲の少年の筆に出でむとは、識見既に古今に絕し、氣宇既に天下を呑む、異日の到達寧ろ容易に料る可けむや。

翌年初夏、新樹綠を張らして青畝麥浪を漂はす處、長上に侍して郊行し、分韻偕字を得たり。乃ち歌うて曰はく、（全集卷三十二）

講習豈無樂、鑽磨未有涯。書非貴口誦、學必到心齋。酒可陶吾性、詩堪述所懷。誰言曾點志、吾得與之偕。

と。其高潔なる襟懷、其熱誠なる心志、其眞摯なる意向は、蔚然として語語句句の外に溢るゝを觀る。

紹興二十四年象山年十六、三國六朝の歷史を讀み、夷狄の華夏を紊ること日已に久しきを見、又長上か靖康の事を談するを聞くや、慨然として感發する所あり、乃ち

氣風の變化

指爪を剪去し弓馬を學ぶ。想ふに純一理想界に逍遙せし彼が襟懷は、茲に始めて浮世の波瀾を感知し、其熱心其摯意は、彼を驅りて投筆事戎軒の概を起さゝる能はざらしめしなり。而も彼は決して切切齷齪の小丈夫に非ず、綽綽たる胸間の餘裕は、未だ曾て彼をして所得を失了せしむるに至らざりき。當時其感發を直寫せる語あり、曰はく、吾人讀春秋、知中國夷狄之辨。二聖之書豈可不復。所欲有甚於生、所惡有甚於死。今吾人高居優游、亦爲可恥。乃懷安非懷義也と。象山後年の生活が、單に思辨の一面に傾了せずして能く實行を包括し、而も山林獨善に流れずして善く經國濟民に達したる所以の者、其端既に此に見はる。

此際に於いて彼が氣風は大なる變化を受けたり。平靜一碧湖面大鏡を開くが如き其想界は、今や淙淙湍激巖を嚙み溪に咽ぶの狀を呈せり。試に其十七歲の作なる大人詩を取りて一誦すれば、如何に其豪蕩卓犖なる胸懷が鬱勃として發するに處なかりしかを想見すべし。（全集卷二十五）

從來膽大胸膈寬。虎豹億萬虬龍千。從頭收拾一口吞。有時此輩未妥恬。
哮吼大嚙無毫全。朝飲渤澥水、暮宿崑崙巔。連山以爲琴、長河爲之絃。

万古不傳音、吾當爲君宣。

之を郊行分韻の詩に比較せよ。彼は眠れる天使の如く、此は戰へるアポロオンの如し。彼は新春の平蕪に似て、此は盛夏の驕陽に似たり。斯の如くにして書を讀み、斯の如くにして世變を觀し、斯の如くにして實務に當る、到る處其學問進捗の地に非ざるはなし。嘗て云はく、復齋家兄一日問曰、吾弟今在何處做工夫。某答曰、在人情事勢物理上做工夫。復齋應之而已。若知物價之低昂與夫辨物之善惡眞僞、則不可謂之不能。然吾之所謂做工夫者、非之謂也と。又云はく、吾家合族而食、每輪差子弟掌庫三年。某適當其事、所學大進と。皷聲窓震によりて夙く已に進む所ありし警敏は、今に於いて益〻其鋒鋩の銳利を露し來れり。而も其工夫に關する數語は、實に後年彼が晦庵の流派以外に出でて、超然として自ら樹立する所ありし所以の端にして輕輕に看過すべからざる者。

象山が長成の歷程略〻斯の如し、其生涯の大綱は粗〻此間に見はれ亦決せりと謂ふべきか。今や進みて其第二期に入らむとす。

講學

草莽の處士

父憂に丁る

紹興三十二年秋、象山時に二十四歳。始めて鄉試に應し、周禮に關する論文を草して合格す。當時秦檜死して既に七年。此年高宗位を皇太子に禪り、小康漸く將に復せむとす。而も主和媮安は殆と宋廷の痼疾を成し、金使復た來りて復た和議を尋ぎ、去年欽宗楚囚に殂せるの凶聞至り、明年北征の宋師連に利あらず、其翌宿將張浚卒して、有宋の祿命は正に是れ秋風落木の觀。象山利器を懷抱し熱眼を以て這般の光景に接す、而して能く用ゐらるゝことなき者十有三年。其中央政府の一斑に陞りて、天下の主腦に多少の刺戟を試むるを得るに至りしは、蓋し二十年の後に在り。此間彼が行事功業は、寧ろ講學に見はれて濟世に出づる能はざりき。彼將た如何なる心操を以て之に處せしか。始めて鄉舉せる年、その見舉送官啓の末に云はく、窮則與山林之士約六經之旨、使孔孟之言復聞於學者、達則與廟堂群公還五服之地、使堯舜之化純被於斯民と。其自ら任ぜる所の事全く孔子に在りしは、昭乎として見る可きなり、

是歳冬十月二十七日父の易簀に丁る。未だ志を當世に行ふを得ずと雖も、盤錯を裁理し綽綽として餘裕ある懷抱は既に已に成立せり、則ち道卿亦必ずしも太だ恨むなくして以て瞑せりとせむか。是より後五年、象山二十九歳、始めて孺人吳氏を娶る、即ち十歳の時淵を定めたる者なり。吳氏の人と爲りは、象山の門人楊敬仲が作れる墓誌善く之を示す。云はく、

婚娶

呂東萊と相知る

幼有異質、女工不學而能、詩書過目不忘。公吳公大奇之、一見先生象山謂可妻歸焉。先生爲國子正刪定勅局、居中五年、四方之賓滿門、旁無虛宇、併假於館、中饋百需、先生不一啓齒、孺人調度有方、擧無缺事。暨先生奉祠歸、囊蕭然、同僚共驚之、還里之明年、經理象山、孺人捐奩中物助之。

其內助の功の大なりしこと亦以て想ふべきなり。

既にして象山年三十三、冢子持之生る、時に八月十七日なり。此秋再び鄉試に應じ、易經を以て擧せらる。論旨精透、驗官をして驚嘆せしむ。翌年春行都の試に應じて、易卷及び天地之性人爲貴論を著す。驗官に呂東萊あり、之を讀みて嗚呼循頂至踵、皆父母之遺體、俯仰乎天地之間、惕然朝夕求寡乎愧作而懼弗能、儻以庶幾於孟子之塞乎天地、而與聞吾夫子人爲貴之說乎と云へるに至り、大に嘆賞して措かず。其後事を以て其職を去るに際し、亦其同僚に囑して陸子靜を遣すなからしむ。是れ象山東萊を知るの始にして、亦後年鵝湖の會の由緒たり。夏五月廷對す、而も甚だ慷慨して天下の

事を極言し、以て直名を售るを爲さず。乃ち進士出身を賜ふ。春より夏に至る、江都に在るの間、當時の諸賢從遊する者甚だ多く、朝夕應酬問答し、學者の踵まり至るが爲に寢を得ざること四十餘日に至り、自ら奉ずる所甚だ薄きも、精神益〻强く、其貌に接し其言を聽く者興起せざること希なり。六月二十九日を以て、程を發して富陽に赴き、七月九日舟に乘じて富陽を辭し、初秋七月十六日鄉家に歸る。遠近風を聞き來りて親炙を求む。

淳熙元年象山年三十六、三月四明を過り會稽に遊び、四月復都下に至り、五月二十六日呂東萊を訪ひ、相識益〻深し。

是に於いて吾人は象山が講學期に於いて、其生涯に於いて、宋學の歷史に於いて、亦儒學全躰の歷史に於いて、極めて著明重要なる鵞湖の會を叙するの機に際せり。象山東萊を京衢に訪へるの翌年、淳熙二年乙未、東萊、象山及び復齋に約して朱晦庵及び其從遊諸家と信州の鵞湖寺に會す。呂成公譜に據れば、乙未四月訪朱文公于信之鵞湖寺、陸子靜子壽劉子澄及江浙諸友皆會、留止旬日とあり。春光漸く老いて梢頭新綠を粧ふ時、迢迢たる湖畔の平蕪、肅肅たる高堂の會、一世に冠絶する學識を集めて互に其蘊積を吐露す、抑〻亦曠世の盛事。

鵞湖に到るの途上、象山復齋と學事を論ず、復齋極善と稱す。此夜復齋所感を賦して歌うて曰はく、

孩提知愛長知欽。古聖相傳只此心。大抵有基方築室、未聞無趾忽成岑。
留情傳註翻蓁塞、著意精微轉陸沉。珍重友朋相切琢、須知至樂在于今。

明旦相語る、象山曰はく第二句微有未安と。途上和韻を期す。既にして一行鵞湖に至る。東萊別後の工夫を問ふ、復齋前詩を誦して第四句に至る、晦庵曰はく、子壽早已上子靜船了也と。詩了りて晦庵辨を復齋に致す、象山乃ち和韻を誦す。詩に云はく、

墟墓興哀宗廟欽。斯人千古不磨心。涓流滴到滄溟水、拳石崇成泰華岑。

誦して此に到るや晦庵頗る色を變ず。象山猶句を繼いで云はく、

欲知自下升高處、眞僞先須辨古今。

豪邁跌宕の氣、直に自家の肺肝を攄し、披瀝憚らず、躍躍として人を襲ふ。晦庵太だ懌ばず。是に於いて各〻散して休息す。明日議論凡そ數十折、隨うて說き隨うて摧き、隨う

て辨じ隨うて破る。一上一下一虛一實、議論終に決せず。斯の如きもの連日。宋代の二鴻儒各〻其襟懷と識量とを悉して、斯道の精奥を發揚す。東萊甚だ虛心相聽くに意あり、而して晦庵則ち謂へらく、人各〻見る所あり、到底決を後世に俟つの他なし、辯すへきは既に辯し了る、今や更に辯を費すの要なしと。乃ち之を尼む。

斯の如くにして鵞湖の會は終れり。兩儒終に說に於いて合することを能はず。則ち合することを能はずと雖も、晦庵と象山と、互に相重じ互に相親みしは、亦實に驚くべく欽すべき者あり。後年象山山間に退くや、其與朱元晦書の如き、太極道體等について論難攻擊餘力を遺さずと雖も、或は其少娘の死を吊して懇切を極め、或は勸めて行縣之餘、或能撿校山房、一顧泉石、此尤區區之私願也と謂ふ、己の得る所を以て直に其樂を分たむを憶ふ、何ぞ其情の悃誠なる。英雄唯能く英雄を知る、千歲の下、人をして欽仰措く能はざらしむる所の者は、雷掣電擊の氣識に在らず、寧ろ光風霽月の襟懷に在り。

鵞湖の會を距ること三歲、晦庵乃ち前詩に和して象山に贈る。曰はく、

德業流風夙所欽。　別離三載更關心。　偶携黎杖出寒谷、　又枉藍輿度遠岑。

舊學商量加邃密、　新知培養轉深沉。　只愁說到無定處、　不信人間有古今。

後聯結句終に兩者の睽離を調和すべからずと雖も、起句前聯優に雙賢の相重を表彰するに足る。朱晦庵が復包顯道書に云ふ、南渡以來、八字著脚、理會實工夫者、惟某與陸子靜二人而已。某實敬其爲人、老兄未可以輕議之也と。蓋し鵞湖の會を以て陸朱學問の差大に彰はれ、朱享道書の如きは則ち鵞湖之會、論及教人、元晦之意、欲令人泛觀博覽而後歸之約、二陸之意欲先發明人之本心而後使之博覽、朱以陸之教人爲太簡、陸以朱之教人爲支離、此頗不合。先生更欲與元晦辯、以爲堯舜之前何書可讀、復齋止之、趙劉諸公拱聽而已と傳ふるに至る。兩家の末派乃ち自ら自家に篤うするを力めずして、他家を詆排するを以て事と爲す、是れ學派宗派の每に見る所、而も其祖師却りて相關知せざる者。巨人の襟懷、蓋し庸情を以て忖るべからざるなり。

其後三年、淳熙八年晦庵南康に守たるに及びて、象山往いて訪ふ、晦庵延いて其白鹿洞書院に至り、一場の講說を請ふ。象山乃ち論語の君子喩於義小人喩於利章を講じ、反覆明辨、當時學者の深弊に中る。晦庵再三曰はく、某在此不曾說到這裡、負愧何言と。終に之を書せむことを請ふ。乃ち附記して云はく、熹猶懼其久而或忘之、復請子靜

仕官

筆之於簡而受藏之と。時に象山年四十三、晦庵五十二。事は春二月に在り。一川漸く春を涵して鷗夢正に暖に、沚上の垂楊綠鮮にして軟風心目を怡ばす。晦庵乃ち舟を泛べて象山と與にし、興會悠悠雅趣盡きず。乃ち謂うて曰はく、自有宇宙以來、已有此溪山、還有此佳客否と。象山も亦歌うて云はく、（全集卷二十五。題して遊湖分韻得四字といふ。想ふに是れ當時の作。）

命駕不辭春逕泥。　小蓬高會帝城西。　書非我輩終無願、　物笑蒙莊只强齊。
天入湖光隨廣狹、　山藏雲氣互高低。　誰憐極目菱蒿裏、　隱隱蒼龍臥古堤。

と。兩賢の高風、溪山の春光と、實に山高水長の趣あり。此間の消息固に俗人の揣摩を容れず。

濟世の上

是より先淳熙元年三月象山年三十六、始めて部調官に赴く。四月都下に至りて廸公郎隆興府靖安縣主簿を授けらる、是れ象山が世務の位地を得たるの始なり。越えて三年繼母を哭し、更に二年服除かれて建寧府崇安縣主簿を授けらる、時に年四十一。凡そ是等の地位甚だ卑く、又其居る所地方の一邊陬に過ぎざるを以て、滿腔の經綸、一も天下の主腦に施して刺戟を全社會に及ぼすに足らず。居ること二年、亟相史

立朝

浩象山を薦む、薦辭當らざるを以て辭して赴かず。明年復た其薦むる所となり、職事官を與へ、國子正に除せらる、時に淳熙九年秋九月、象山年四十四にして始めて中央政府に位地を得たるなり。國學に在ること二年、勅令所刪定官に遷り、徙りて勅局に在ること三年。其遷るや、淳熙十一年春、殿輪對五劄子を上る。一に論して云はく、讐耻未復、願博求天下之俊傑、相與舉道經邦之職と。二に論して云はく、願致尊德樂道之誠と。三には知人之難を論し、四には事當馴致而不可驟を論し、五には人主不當親細事を論す。天子善と稱す、而して大に用ゐること能はず。

天下の形勢

此五年間は即ち象山が生涯に於ける立朝の時期なりき。此間彼果して大に其志を天下に行ふことを得たるか、如何なる志望を抱いて以て云爲する所ありしか。吾人は先つ當時の社會を一顧するを要す。

邊疆の事は幸に北方の小堯舜に遭逢して須臾く無事なるを得たり、而も靖康の大辱未だ曾て雪がず、孝宗は衰世の英主、頗る復讐に志ありと雖も、能く其志を輔くる者なく、陳康伯卒して後、唯虞允文陳俊卿の並に相たる時に在りて稍北方を經營するの議ありしも、俊卿の持重は允文と合はず、遂に効あると能はず。史浩の如き最

も用兵を主とせず、乃ち得る所の平和は亦自恃の平和に非ずして依他の平和たり。夫れ兵未だ輕々しく用ゐるべからず、但和の本は兵に在り、兵の本は民に在り、而して民の民たる所以は財の足ると俗の厚きとに在り。今天下兵を用ゐず、國本既に立てりと爲すか。象山詩を作りて句熙載が浙西の鹽局に赴くを送る。云はく、（全集卷二十五）

平分浙江流、東境浮海角。其民仰魚鹽、久已困征榷。麥禾與桑麻、耕鋤到磽确。往歲比不登、場圃幾濯濯。荒政勞廟謀、賑廩聞數數。飢羸不待飽、共感君澤渥。仁哉覆育恩、所惡吏齷齪。敎詔彌諄諄、聽受祗藐藐。何知國與民、足己肆貪濁。流離且未還、已復事椎剝。按察殊未曾、聖主獨先覺、重貽宵旰憂、顧盼求卓犖。（下卷）

然らは則ち民財決して豐ならざるなり、比年大に稔らざるなり、大君宵旰自ら安んぜずして、命を將ふの臣庶乃ち晏居するなり。是故に象山は致政に代りて姪樵之を祭る文に在りて、猶且風霜激厲の語を禁ずる能はず、吾平日見人臣而不恤君之民不任君之事者、每竊憤之、有盡瘁者、必喜而愛之。（全集卷二十六、三十）然らは則ち將來天下の運命を負擔して、匡濟の重寄を託せらるべき青年讀書生の狀態如何、今時士人讀書其志在

於學場屋之文、以取科第、安能有大志、其間好事者因書冊見前輩議論起爲學之志者、亦豈能專純、不專心致心、則所謂鄉學者、未免悠悠一出一入、（與傅克明書）彼等讀書の客、亦未だ以て國家の重事を荷ふに堪へざるなり。乃ち區區の小康に恬熙を愉みて、以て百年の計を得たりと爲す。象山が眼中天下の形勢實に百萬ありて一祥なかりしなり。

是に於いて大に獻替する所あらむと欲し、當時の朝廷、其失人主の不明に在らずして臣僚の非任に在るを察するや、乃ち其五劄子に於いて侃侃として知人の要を論ず。曰はく臣嘗謂事之至難、莫如知人、事之至大、亦莫如知人。人主誠能知人、則天下無餘事矣（全集卷十八、三左）と。其意に謂はく、天下未だ曾て人なきことあらず、唯用ゐられざるのみ。人主自ら人主の事あり、人臣自ら人臣の事あり。人主の務は善く人を知り善く人を用ゐるに在り、苟くも知りて而して人を用ゐば、天下治まらざるを患へず、國本立たざるを患へず。大厦の將に覆らむとするや、一木竟に能く支へず。象山實に之を知る、乃ち自個の力を以て直に之を事に施すの不利なるを省み、此力を以て人主を刺戟し、以て漸く頹るゝの天祿を恢復せむとせるなり。

時なるかな命なるかな天子終に大に用ゐること能はず。淳熙十三年象山時四十

八にして乃ち勅局を出で、宣義郎に轉じ、將作監丞に除せらる。給事王信といふ者あり、上疏論駁して象山を短す。群陰、一陽を壓す、固に是れ千秋の恨事、初冬十一月二十九日、霜風淅瀝として寒林に咽ぶ時、象山君を懷ふの涙を飲みて臺州崇道觀を主管せしむるの上旨を擁し、蕭然として都門を辭す。時に人に語りて曰はく、王給事謂、吾將白其爲首相爪牙者、故惶懼爲此、亦可憐也と。蓋し是より先親朋象山に謂ふ、先生久次宜しく退を求むべしと。象山曰はく、往時面對、粗陳大義、明主不以爲非、思欲再望清光、少自竭盡、以致臣子之義、然而不遂則天也と。對班を距ること僅に五日、監丞に除するの事あり、而して奇禍乃ち至る。吾人は象山當日の胸膈を想ふ毎に、未た曾て革命議の著者三善清行に謝せし我菅公の情懷を回想せずんばあらず。都を辭するに臨み楊廷秀の行を送るあるや、和して歌うて曰はく、

學植知方恥爲人。　敢崇文貌蝕誠眞。　義難阿世非忘世、　志不謀身豈誤身。
逐遇寬恩猶得餘、　歸衝朦雪自生春。　君詩正似清風快、　及我征帆故起賓。
去年今夜侍清涼。　秋思詩篇獨斷腸。　恩賜御衣猶在此、　捧持每日拜餘香。

と。嗚呼東西處を異にし、上下時を別にす、其揆は則ち一なり。借問す象山亦實に這般悲絶愴絶の遭逢を經驗せるか、吾人をして進みてその教育時期を窺はしめよ

象山精舍

教育

既に歸る、學者象山が門に輻輳す。鄉曲の長老亦首を俯して誨を聽く。其城邑に詣るや、環坐する者率ね二三百人、或は容るゝ能はざるに至る、既にして寺觀に徙る、縣官爲に講席を學宮に設く、聽者貴賤となく老少となく途巷に充塞す、從遊の盛なること未だ其比を見ずと傳ふ。

淳熙十四年年四十九、貴溪の天山に登りて學を講す、是れ門人彭世昌の偶〻得たる所。山に登りて遊覽す、陵高く谷邃く、林茂りて泉清し。乃ち山麓の張氏と謀り、廬を結ひて其先生を迎ふ。象山登りて之を樂み、乃ち精舍を建てて居る。當時王謙仲に與ふる書、其景致を詳にす、

（上略）某去夏拜書後、不旬日即有仲兄子儀之喪、秋初又哭一殤子、乃將爲先兄子壽後者、薄德淺祐如此。舊有拙疾、哀苦中大作、幾至於斃、朦月頓癒、今頑健如去春時矣。鄉人彭世昌、新得一山、在信之貴溪、西境距敝廬兩舍而近。唐僧有所爲馬祖者、廬于其陰、鄉人因呼禪師山。元豐中有僧瑩者、爲寺其陽、名曰應天寺、廢久矣。屋

盧毀撤無餘、故趾埋於荆榛、其田清池沒於茅葦。彭子竭力開闢、結一盧以相延。去冬嘗一登山、見其隘復建一草堂于其東。山間亦粗有田可耕。社日後携二息、偕數友朋登山、盤旋數日、盡發茲山之秘。要領之處、眼界勝絕、乃向來僧輩所未識也。去冬之堂在寺故趾、未愜人意、方於勝處爲方丈、以居顧視山形、宛然鉅象、遂名以象山。草堂則扁曰象山精舍。鄉人蓋素恨此山之名辱於異教、今皆翕然以象山爲稱。故侍郎張南仲之居、實在山下、南仲諱運、其諸子鄙徙居鄱陽、其諸姪咸在故里、皆尊尙儒術、舊亦多從遊者。彭世昌極貧、開山之役、諸張實皆助之。其經營之初、亦張爲之地、今張氏子弟、咸來相從、一家結盧於東塢之上、比方丈爲少高、名之曰儲雲。茲山常出雲、雲之自出、常在其高、故也。一家結盧於前山之右、石澗飛瀑縈紆帶其側、因名曰佩玉。相繼而來結盧者未已、未及名也。方丈簷間層巒疊嶂奔騰飛動、近者數十里、遠者數百里、爭奇競秀、朝暮雨暘、雲煙出沒之變、千狀万態、不可名摸。兩山廻合其前、如兩臂環拱、臂間之田不下百畝、沿流而下、懸注數里、因取賦形、小者如線、大者如練。蒼林陰翳、巨石錯落、盛夏不知有暑、挾冊其間可以終日。東山之崖有繙經石、可憩十許人。西山之崖有歇石、可坐五六人、皆有蒼松蟠覆其上、其下壁立万仞。山之陰有澄湖在其巔、天成一池、泓然如鑑、大旱不竭、可以結盧居之。自澄湖而北、數山之外、有馬祖庵、其處亦勝。有風洞、有浸月池、有東隴、有樺木隴、有東西塢、有第一峯。凡此皆舊名嘉者。此山大勢南來、折而東、又折而南、其高在西北。堂之西最高、九峰聯絡如屏、名曰翠屏、其上皆林木也。北降之高者、如蓋可以登望。南望群山益遠、溪谷原野畢露、東望靈山、特起凌霄、縹緲如畫。山形端方廉利、吳越所未見有也。下見龜峰昂首躬背、形狀逼眞。玉山之水蓋四百里而出於龜峰之下、就貴溪以經茲山之左。西望貌姑石琵琶諸峰、嵽崒逼人、從天而下、溪之深於光澤者、間見山麓如青玉版。北視清仙巖臺山、僅如培塿、東西二溪、窈窕如帶、二溪合處百里而近、然地勢卑下夷曠、非甚清徹、嘗沒於蒼茫煙靄矣。（下略）

然らば則ち象山の四圍は、少くとも菅公が蕭條落寞の境地に於ける都府樓纔看瓦色、觀音寺唯聞鐘聲。朝暮膓を斷つの悽楚なく、山わかれとびゆく雲のかへり來るかけ見るときぞなほたのまるゝ綿綿として究まらざるの哀怨なく、

あめのまたかわける程のなければや着てしぬれ衣ひるよしのなき

洗ひ難く雪き難きの苦寃なかりしなり。唯彼が玉芝を執りて歌ひたる

靈華分英英。芝質分蘭形。瓊葩分瑤實、氷葉分雪莖。石室分宛宛、苔菌分菁菁。蔭長松之偃蹇、帶飛瀑之琮琤。實青端而黃表、眇中藏而不矜。匪自昭其明德、羌無愧分疇能。

は、乃ち是れ筑海の濤聲万里の秋、寶山の月色三分の夜、

海ならずたゞよふ水のそこまでもきよきこゝろはつきぞてらさむ

の幽懷を寓するに足る。抑〻象山志を得ずして丘山に歸臥するも、郡縣禮樂の士時に相謁訪して其化に接するを喜び、四方の學徒大に集まりて、彼をして二十五年前の舊識を充たさしむ。所謂窮則與山林之士約、六經之旨、使孔孟之言復聞於學者なる者、今や實に其遭逢となり、彼をして大に其長を發揚するを得せしめたるなり。乃ち從容として道を講し、歌詠舒暢時に發して

百喙吟春不暫停。長疑春意未丁寧。數聲綠樹黃鸝曉、始笑從前著意聽。

の清音となり、悠悠として終焉の意ある者に似たり。

象山常に方丈に在り、毎旦精舍の皷を鳴らすや、乃ち山轎に乘して至り、會揖して講座に陞る。容色粹然、神氣爽然、山間氣清き處、高朗の音吐、理を論し道を說く、條理明晰、意正しく義足る。肅然たる講堂、先生の音吐益〻冴えて眉宇少しく軒る時、滿堂の聽者翕然として感動興起せざるなし。

其平居、或は書を觀、或は琴を撫し、天氣晴朗山色笑ふが如きときは、則ち方丈を出でて徐歩し、淙淙に隨うて懸瀑を尋ね、雍容自適す。但其衣冠自ら持する、盛暑と雖も必ず整肅、之を望むに神の如し。而して其平日の吟誦多く是れ楚詞と傳ふ、豈

已矣哉、國無人莫我知分、又何懷乎故都。既莫足與爲美政分、吾將從彭咸之所居。　離騷亂曰

の苦衷に感通する所ありしか。

斯の如き者四年、象山年已に五十三。時運は復たひ彼をして泉石を棄てて駑途に趨らしむるを致せり。彼が朝飲渤澥水、暮宿崑崙巔の氣概は、機の到るに於いて、晏然として山間精舍の靜閑に惓惓たる能はざる者なり。

濟世の下

手に唾して起つ

荆門の守備

南宋の光宗紹熙二年、金主雍一昨年を以て殂し、蒙古の酋長奇渥温氏威勢漸く強大にして、二十年來東亞の小康は將に再び破れむとす。而して宋の朝廷久しく恬熙に狃れ、嘗て確然一定の對外策あるを見ず。祿命漸く蹙まりて人心日に非なり。象山時に山間方丈に在り、夏再ひ起されて知荆門軍に除せらる。彼乃ち命に赴けり。噫既に知命を過ぎ、既に泉石終焉の情を催し、彼は、半夜一たび荒雞を聽くや、復た手に唾して軍國の事に赴けり。乃ち七月四日を以て啓行し、九月三日荆門軍に至る。實に象山か事に濟世に從へるの第二回なり。

荆門素城壁なし。象山以爲へらく、荆門は是れ古來戰爭の場、今乃ち此の如し。其地は則ち江漢の間に在りて四集の地たり。南江陵を捍ぎ、北襄陽を援ひ、東は隋郢の脇を護り、西は光化夷陵の衝に當る。荆門固ければ四鄰恃む所あり、否れば背脇腹心の虞あり。是に於いて事に當るの初、先つ經費を審計し、義勇を召集して、躬自ら董督す。役者は役に趨るを樂み、力を竭し功は倍し、二旬ならずして功を竣る。經費豫算二十万緡、而して實費は僅に五千に過ぎず。更に砌を成すこと三重、角臺を置き、二小門を增し、敵樓、衝天渠、荷葉渠、護險牆を置き、百度畢く備はりて、而も費す所は三萬に過

施政

ぎず、而して守備茲に堅し。

此役や獨り其直接の目的を成せるのみならず、亦大なる間接の功果を收め得たり。其初や習俗偷惰、人々役務を執るを恥ち、庶吏唯衣裳を美にして閑視を常とす、是に至りて時風一變し、僚屬諸役より雜隷に至る、相勉むるに義を以てし、長官專ら威を以て下に臨むの要なきに至れり。尋いで郡學貢院客館官舍等、衆役並に興り、積極政策を厲行して、而かも人情晏然、郡中恬として事役無なきに異ならず。

乃ち稅務の弊を革め、銅錢納稅の禁を紓へ、州郡胥吏の私利を遏め、訴を平にし、朔望及ひ暇日には諸學に就いて學生を敎誨し、一郡翕然として化に向ふ。

民訴ふる者あるときは、早暮となく嘗庭に詣るを得せしめ、期して其狀を審にし、情を酌みて之を決し、多くは勸釋す。殊に其人倫に涉る者は、自ら其狀を毀らしめ、以て風俗を厚うし、唯訓ふ可からざるに於いて始めて之を法に寘く。其境內官吏の貪廉、民俗の習尙善惡は、皆之を諳知す。其商稅の害を覩るや、即日揭示して直に務に至るを得せしむ。復た正稅を減す、是日稅入立に增す。行旅皆風を聞いて翕然として荆門に由る。蓋し象山の治道に於ける、刑財の二點に於いて尤も意を致す。故に施措尤も

敏捷通達、期日にして釐革の觀るべき者ありしなり。

百制既に緒に就く、乃ち翌年正月十三日、吏民を會して洪範皇極の一章を講ず。讀書に習はざる一般士民をして、遍く其旨に通せしめんが爲に、象數圖表の作あり。春大に武を閲して軍氣益〻奮ふ。

象山當時人に語りて曰はく、比來訟牒益寡、終月計之不過二三紙。此間平時多盜、今乃絶無と。其邑里の爲に雨を祈るや、沛然として甘雨の至らざることなしと云ふ。

蓋し象山既に廟堂の上に立ちて經綸を天下に施すこと能はず、卷いて之を懷にし乃ち悠然として溪山に歸臥す。而も漸く多事なるの時運、彼は實に晏居に堪へず、是に於いてか復たび出で、是に於いてか牛刀僅に雛鷄を割く、其功程の獨り群を出づるを恠まず。象山蓋し亦其活氣活識を洩らすの處を得たるに聊爾す。哀しいかな、天數夙く盡きて叢蘭香を長うすること能はず、今や吾人は此巨人に訣するの止むを得ざるに際せり。

終焉

紹熙三年冬十二月七日、象山疾あり。是より先十一月下浣、一日卒然として家人に語りて曰はく、吾將に死なんとすと。家人曰はく、安にか此不祥の語を得る、將た骨肉を奈何にせむと。象山唯亦自然の三語を與へて其他を曰はず。又僚屬に告げて曰はく、某將に告終と。蓋し血疾は彼の持病。病作りて三日、氣分稍佳なり、乃ち僚屬に接見し、與に政理を論ずること平時の如し。寢息靜居、命して灑掃し香を焚かしむ。家事は毫も齒に掛けず。偶〻雪降る。命して浴を具せしめ、浴罷みて盡く新衣に更め、端坐平靜、家人藥を進むれども却けて用ゐず、是より全く語言を絶す。

南宋の高宗紹熙三年十二月十四日癸丑日中、陸象山子靜奄然として簀を荆門軍の任地に易ふ、年齒五十四。今を距ること正に七百五年。

第五　死後

葬葬

象山既に逝く、而も彼と世界との關鍵は決して茲に斷絶せず。

紹熙四年癸丑春正月、二孤先人の柩を護して故山に歸る。沿道吊哭致祭する者甚た衆し。三月家に至る。十一月九日壬申柩を奉して延福鄉朱陂の下に葬る、妣孺人饒氏の墓を距ること近し。門人の奔哭會葬する者數千。是より先金谿の宰王有大、復齋象山の祠を建つ、十一月邑僚を率ゐて來り祭る、輓詩に云はく、

遺文を編す

篤學光前哲、知言衆所迷。學問顏氏好、功與孟軻齊。獻替心彌切、藩維政可誓。儒宮儼遺像、垂範自江西。

歿後十二年、開禧元年六月、長子持之伯微始めて象山の遺文を編して二十八卷及ひ外集六卷と爲す。同三年九月庚子撫州の守括蒼高商老、象山文集を郡庠に刊す。爾後嘉定五年、歿後二十八年八月には張衍季悅、九月には袁燮、紹定四年十月歿後三十九年には袁甫、皆文集編纂の擧あり。其語錄は則ち歿後四十五年、理宗の嘉熙元年七月既望、陳埴の刊する所に係る。

祠堂を建つ

慶元二年歿後四年貴溪の宰劉啓晦建翁祠堂を象山方丈の趾に建つ、劉は朱晦庵の門人。

諡號を賜ふ

寧宗嘉定八年乙亥歿後三十三年冬十月二十九日、皇帝諡を賜ふの詔旨あり。是に於いて九年丙子春三月十七日宣敎郎太常博士孔煒旨を奉して諡議し、同年冬十二年十三日朝請大夫考功員外郎丁端祖覆議し、同十年丁丑春三月二十八日諡を文安と賜ふ。撫州州學敎授林恢祠堂に賜諡文を告す。

義門を旌す

理宗の淳祐二年壬寅秋、九月歿後四十八年勅して陸氏の義門を旌す。皇帝制して曰はく、

青田陸氏、代有名儒、載在諡典。聚食踰千指、合爨二百年。一門翕然、十世仁讓、惟爾睦族之道、副朕理國之懷。宜特褒異、勅旌爾門光於閭里、以勵風化。欽哉。

子孫を錄す

象山の歿時を距ること三百三十年、隔世の知己王陽明、其子孫を錄するの擧あり。謂へらく、象山孔門の正傳を得、而して其の學術久しく抑へて彰れず、文廟尙配享の典を缺き、子孫未た褒崇の澤に沾はずと。乃ち撫州府金谿縣の官吏に牌行し、陸氏嫡派の子孫を將て、各處聖賢子孫の例に倣ひ、其差役を免し、俊秀なる子弟あるときは、名を提學道に具し、學に送り業を肄はしむ。陽明當時江西に巡撫たり、時に明の武宗

無窮なる生活

正德十六年。

文集編せられ、語錄成り、諡號を賜ひ、旌表を制す、抑も亦布衣の極なり。是れ象山が死後有形界の生活のみ。其无窮なる心靈界の生活に至りては、則ち之を次篇に觀む。

欲達輪廻之途。而不能成經世之業者、佛氏之妄也。欲成經世之業、而不能達輪廻之途者、俗士之陋也。已達輪廻之途、又成經世之業、楠公中將是已。

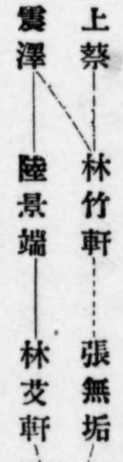
山田方谷

教學

第一　遡源

學問の系圖

陸象山が學問の系圖は正に左の如し。



二林張陸四氏の如きは皆象山が學の前茅たり。上蔡震澤二家に於いては象山の淵源頗る見るべき者あり、而も此二家共に二程に出つ。然らば則ち象山正に晦庵と其源を同しうするか。然りと雖も學問若し傳授に止まり、單に先覺の言說到達を取りて之を後進に讓るに止まらば、學者は一個心靈界の驛傳に過ぎざるべし。進歩は決して望むべからず。唯それ人は自個の靈識を有す、乃ち師の弟子に於ける、決して模型と印刷物とにして已まざるなり。然らば則ち象山將た何の處より其發明の資料を

悠遠なる淵源

將來せる。暫く彼が自ら語る所を聽かむか。

彼每に曰はく、夫子既沒、其傳乃不在子貢、顧在曾子（全集卷一、七右、十二左、與胡季隨書。卷二、十八左、與朱元晦書二。卷十九、十四左、經德堂記。其他諸處に散見す）と。而して語を次いで曰はく、曾子得之以魯、子貢失之以達（全集卷一）。十二左）と。噫これ唯り以て象山が學統の遡源を表白するのみならず、亦其敎學の性質を蔽ふ所の語句たるなり。彼何を以て斯く斷するか、其意に曰はく、顏子問仁之後、夫子許多事業、皆分付顏子了。故曰、用之則行、舍之則藏、惟我與爾有是。顏子沒、夫子哭之曰、天喪予。蓋夫子事業、自是無傳矣。曾子雖能傳其脉、然參也魯、豈能望顏子之素蓄。幸曾子傳之子思、子思傳之孟子。夫子之道、至孟子而一光。然夫子所分付顏子事業、亦竟不復傳也（語錄、門人傳子雲錄、全集卷三十四、四右）と。其與李省軒書には則ち云はく、自曾子傳之子思、子思傳之孟子、乃得其傳者、外此則不可以言道（全集卷一、二十一右）と。十子の中子夏子游の學の如き、之を後世に傳へて尤も害あることは、亦屢〻之を言ふ（全集卷三十四語錄上、二十右、五十三左）。

自負自期

是を以て彼が敎學は固より凡べての儒徒と同じく孔子の遺意を傳ふるに在り。而して孔子の遺意は顏氏と共に滅びたれども、其猶存する者は、曾子子思を經て孟子に在りと爲す。則ち彼は少くとも直に孟子を繼ぐを以て自ら期せざるべからず。而して象山實に自ら其所期に負かずと爲すなり。與路彥彬書に云ふ、區區之學、自謂孟子之後至是而始一明也（全集卷十七、七左）と。彼實に始一明也と謂ふ、その眼中孟子以來眞の儒學を絕せしを見るべし。而も所謂儒學は一たひ漢時に興り、二たひ唐朝に繼ぎ、三たび宋代に競うて、所謂宋學の盛昌、彼が當時に在りて、有史以來未た見さる所たりしに非ずや。思ふに象山何に據りて此隆興の學術を以て儒學の正統と認めざりしか。之を知らむと欲せば、須らく先つ當時の學風が如何に彼が眼底に映ぜしかを觀ざるべからず。

第二　組織

支那に於ける古今學風變遷の大綱は、既に序論に於いて之を觀たり。象山當時の學を觀るや、實に其弊に勝へざる者あるを發見す。弊とは何ぞや、彼が與詹子南書に云はく、古人皆實學、後人未免議論辭說之累（全集卷一七、十左）と。智者術之源論に云はく、實亡莫甚於名之尊、道弊莫甚於說之詳（全集卷三十、三右）と。其陳君舉に與ふる書には更に痛切に之を論ぜり。以學自命者、又復錮於私見、蔽於私見、却鍼拒砭、厚自黨與、假先訓封形似、以自附益、顧不知其實背馳久矣。天以是理卑之、而舉世莫任其責、則人極殆不立矣。永思及此、益切悼懼、忘其駑蹇、以自效竭。此某所不敢不勉著大公以滅私、昭至信以熄僞、非尊兄尙望誰。老矣之論未敢聞也（全集九、十四左）彼が當時の學風に憤發する所ありて、自ら勵まし他を勵ませる所以の情意、歷歷として觀るべきなり。

蓋し當時の弊、辯說益〻繁にして道義愈〻頹れ、學理益〻精しうして實事愈〻疎きに在り。象山が蓋後世學者之病、多好事無益之言（全集卷十、十二左與邵叔誼書）といひ、古之學者以養心、今之學者以病心。古之學者以成事、今之學者以敗事（中略）如房琯之車戰、荆公之均輸者、可

勝慨乎（全集卷十二、九左、與陳正己書）と歎し、而して又、學所以開人之蔽、而致其知、學而不知其方、則以滋其蔽。諸子百家往往以仁義道德爲說、然而卒爲異端、而畔於皇極者、以其不能無蔽焉耳（全集卷十一、四右、送楊通老序）と說ける所以の者、未だ必ずしも激軼を以て目すべからざるなり。之を要するに當時の學弊は約して左の諸項と爲すを得べし。

第一、空疎なる議論多くして着實なる勤行少き事。

第二、學說叢脞繁衍にして講學容易ならざる事。

第三、學問の目的は山林獨善を以て足れりと爲し、遂に天下生民の實務に及ばざる事。

是れ象山の眼底に映ぜし流俗學風の概觀なり。彼が意見に據れば、是れ實に第一、生民國家ありてより以來、人生本有の問題に解答を與へたる儒學の本旨を失へる者なり。

第二、彼等が生活する社會の危急は到底斯の如き學風によりて救濟せらるべき者に非さるなり。

是に於いて彼乃ち如何なる見識を以て其學問を組織せしか。整齊なる一定の躰系

は、東洋諸哲人の言説に於いて毎に見る能はざる所なれば、之を組織するは吾人後輩の任たるべきも、象山の綱領は則ち左の諸項に之を要約するを得可しとす。

第一、學問即ち儒學の目的は、自個を進捗し天下を進捗するに在り、而して終に天地の化育に參贊するは其位に在る者當然の務なりとす。

第二、當時南宋の社會の特殊なる事情は、殊に正眞の面目に於ける儒學を要すること切なり。

第三、然るに滔滔たる流俗の爲す所は、實に儒學の眞相を失へること前述三項の如し、故に之が救濟として象山が主として主張すべき者左の六項と爲す、

第四、空疎なる議論を去りて着實なる勤行を重んずべし。

第五、學問は萬人公共普通の事なり、其要は固より簡易に在らざる可からず。學問を以て繁瑣困難なる者とし、其門戸を狹隘にするの陋風は之を排斥するを切要す。

第六、自個の素養既に成り、乃ち立つ所あらば、進みて天下を救濟せざる可からず。

第七、方今天下の勢、殊に這般の英氣を要す。學者は決して空學死學に陷るべからず。

第八、乃ち刑法財利の末と雖も、亦決して之を度外視し、超然として其運用問題の外に高蹈すべからず。

第九、若し夫れ天下進みて施すの地位なくんば、則ち退いて篤志の後進と相與に切磋し、以て時と處と位との可なるを竢つべし。

而して、其自我の進捗、衆我の進捗、更に進みては天地宇宙の進捗が、如何なる根據より成り得べき者なるか、如何にせば成るべきか、如何なるを成すべきかを講究して、以て活動飛躍の素養を成し、既に立ち既に惑はざるに至るの過程を約して、左の七項と爲す、

第一、大極を辨して個我衆我宇宙を覺る。

第二、之を解して理となし、其の吾人が取扱ひ得べき者なるを覺る。

第三、之を心に約して彼等を覺るの即ち自ら覺るに在るを覺る。

第四、個我の進捗し得べき所以を本つけて性を覺る。

第五、進捗の程度の千差万別を本つけて習を覺る。

第六、工夫を以て進捗の實現を覺る。

第七、實踐を以て既に立ち既に惑はざるを覺る。

陸象山が教學の大綱組織正に斯の如し。今や進みて其細說を聽かむとす。

第三　哲學

太極

朱陸二家の太極

陸象山の哲學を敘述する、先つ太極より始むるを可とす。然れども是に先たちて一言せざるべからざることあり。周濂溪、朱晦庵等が哲學に於ける太極說の地位と、陸象山が哲學に於ける太極說の地位との差これなり。彼に在りては太極の研覈攷究とれ問學の第一着歩にして、而も哲學の以て立つ所、即ち哲學上の第一義亦此に在り。象山に在りても亦哲學上の第一義は實に此に在りとするも、是れ決して學問上第一の重要あるに非ず、其放把は未だ必ずしも太た重要ならざる者、甲はヘェゲルの存在、釋氏の眞如に似て、乙は科學者の原子の如き者なり。甲は太極を以て論理上にも學問上にも第一義と爲し、乙は以て論理上の第一義と爲せども、以て學問上の第一義と爲さず。學問上の第一義は、更に後節に敘述する理心性等の上に在りて存す。中庸性道教の三者を立して未だ曾て太極を立せず、象山の哲學亦甚だ太極を重視せず。然らば太極とは如何なる者ぞ。

象山既に太極を以て學問の主點と爲さずして、之を論理上の後件と爲し、寧ろ哲學の餘論と爲すの傾あり。故に全集を翻して大に其敍述あるを見るは、多く彼が晩年の著述に在り。陶贊仲に與ふる書（卷十五、一右）に無極太極の辨あり、兄梭山の說の要を擧げて之に贊す。大學春秋講義（卷二十、三、十左）に亦之に關する隻語あり。然れども其尤もよく自家の說を顯現せるは、彼が山間方丈に在りて晦庵と應酬せし數書に在りとす。與林叔虎書（卷九、十三右）に云はく、復晦翁第二書、多是提此學之綱、非獨爲辯無極之說而已。と。又云はく、與晦翁往復之書、因得發明其平生學問之病。近得盡朋友之義、遠則破後學之疑爲後世之益（十三左）と。是故に吾人は論理的に象山が敎學を顯現するに當りて、先つ太極說を以て其哲學を啓くと雖も、其重要は寧ろ其の直に陸朱の根本的差離を表明するに在りて存するを知らむことを要す。

陸朱二氏が太極說に關する往復は凡べて七書あり。第一は梭山が晦庵に與ふる者、第二は晦庵が梭山に復せる者、第三以下は則ち象山と晦庵との交互に應酬せる者にして、象山三書晦庵二書なり。就中象山が最後の書は唯結末を附したるに過ぎず、最も重要なるは其第一書及び第二書なりとす。此二書共に朱陸を併觀するの便あり、今其至要の段を抄出して、爭議の面目を明にす。

尊兄（朱を謂ふ）向與梭山書云、不言無極則太極同於一物而不足爲萬化根本、不言太極則無極淪於空寂而不能爲萬化根本。（是れ晦庵の言、象山が如何に之を駁せるかを看よ）夫太極者、實有此理、聖人從而發明之耳。（此二句是れ象山太極說の眞髓）非以空言立論、使後人簸弄於頰舌紙筆之間也。其爲萬化根本、固自素定、其足不足能不能、豈以人言不言之故耶。易大傳曰、易有太極。聖人言有、今乃言無何也。作太傳時、不言無極、太極何嘗同於一物、而不足爲萬化根本耶。（中略）太極固自若也。（卷二、十一左）

語氣の漸く烈しく、文章異采を生するを看よ。象山が太極に附せる重要、其論理的後件を以て目する所、昭昭として見るべきなり。次いで更に一歩を進めて、太極圖說の後に成れる通書に無極を謂ふことなきを以て、周氏蓋し亦中ころ之が謬を悟れりと爲し、以て晦庵が同じく磊磊として其過を改むるに憚るなからむことを望めり。乃ち更に曰はく、

後書（朱の書）又謂、無極即是無形、太極即是有理。周先生恐學者錯認太極別爲一物、故著無極二字以明之。（以上朱が謂ふ）易之大傳曰、形而上者謂之道。又曰、一陰一陽之謂

道。一陰一陽已是形而上者、況太極乎。曉文義者舉知之矣。自大傳至今幾年、未聞錯認太極別爲一物者、設有愚謬在此、奚宜不能以三隅反、何足煩老先生特地於太極上加無極二字以曉乎。（卷二、十二左）

晦庵乃ち復書に於いて之に答へて曰はく、伏義作易自一畫以下、文王演易自乾元以下、皆未嘗言太極、而孔子言之。孔子贊易自太極以下、未嘗言無極也、而周子言之。夫先聖、後聖、豈不同條而共貫哉と議論漸く枝葉に入れり。象山晦庵是に於いて釋氏の哲學に所謂文證を提出して以て相爭はむとする者に似たり、是れ到底共に有力の議論と爲す可からず。象山更に敵背に出でて衝擊を試む、曰はく、

且極字亦不可形字釋之。蓋極者中也、言無極則是猶言無中也、是奚可哉。若懼學者泥於形器而申釋之、宜如詩言上天之載而於下贊之曰無聲無臭可也、豈以無極字加於太極之上。（卷二、十二右）

誠に象山が言の如し、周氏の意未だ必ずしも朱氏執る所の如く輕からざるなり。其中といへるに對して晦庵乃ち曰はく、諸儒雖有解爲中者、蓋以此物之極在此物之中、非指極字而訓之中也。極者至極而已。是れ或は之を得たり。象山更に語を繼いで直に敵の喉を扼す。朱子發謂、濂溪得太極圖於穆伯長、伯長之傳出於陳希夷、其必有攷、希夷之學老氏之學也。無極二字出於老子知雄章、吾聖人之書所無有也。（卷二、十二右）其說の當否は暫く之を措き、這般を以て攻擊の要を得たりと爲すは、支那印度學者の通弊なり。其第二書に於いて更に此意を敷衍して云はく、

老氏以無爲天地之始、以有爲万物之母、以常無觀妙、以常有觀竅。直將無字搭在上面、正是老氏之學、豈可諱也。惟其所藏在此、故其流爲任術數、爲無忌憚。此理乃宇宙之所固有、豈可言無。直に中軍を麾いて他に迫る若以爲無則君不君、臣不臣、父不父、子不子矣。（卷二、十九左）

百尺竿頭更に一歩を進む

何ぞ其筆鋒の鋭利なる。乃ち復部伍を整へて進む。曰はく、

極亦此理也、中亦此理也。五居九疇之中而曰皇極、豈非以其中而命之乎。民受天地之中以生、而詩言立我烝民、莫匪爾極、豈非以其中命之乎。中庸曰、中也者天下之大本也、和也者天下之達道也、致中和天地位焉、萬物育焉。此理至矣、外此豈更復太極哉。（卷二、十九左）

初二句及び終二句を以て、象山が太極に對する考說は悉く。彼乃ち百尺竿頭更に一

歩を進めて曰はく、

以極爲中、則爲不明理。以極爲形、乃爲明理乎。（中略）充塞宇宙無非此理、豈容以字義拘之乎。

朱陸の別茲に截然たり。朱は則ち陸の理に對して曰ふ、

吾之所謂理者、或但出于一己之私見、則恐其所取舍未足以爲群言之折衷、況理既未明、則于人之言恐亦未免有未盡其意者、又安可以遽絀古書爲不足信、而直任胸臆之所裁乎。

二家の見、雙雙相對して、其由りて岐るゝ處是に於いて益〻見るべし。象山終に二程言論文字至多、亦未嘗一及無極字（卷二、十三第一書）と論し、而して朱晦庵獨り之を說くは何ぞやと詰り、第二書に於いてはまた今亦欲得尊兄進取一步、莫作孟子以下學術、省得氣力爲、無極二字分疏、亦更脫灑磊落、古人質實、不尙智巧、言論未詳、事實先著、云々と說いて、戰に先たちて敵胆を挫くの兵法を用ゐたり。朱晦庵が復書亦十數條を列擧して以て爭ふ所あるも、大意は略〻上述を以て明なり。

「常に謂へらく、朱陸二氏の太極爭議は、實に岳鵬擧が上疏、文文山が正氣歌と共に、

宋代文學の三傑作と數ふべき者なりと。蓋し其內容の性質は各〻異なりと雖も、人の英靈が充分なる光彩を爛發せるに於いては則ち一なり。二家の議論、其識見の精緻なる、其筆鋒の縱橫百出天馬の空を行くに似たる、殆と後人をして眩惑して應接に遑あらざらしむ。然りと雖も今試に之を剖析すれば、大概左の如き者とするを得むか、

第一、議論の一面は無極而太極說が聖學の遺意なりや否やに在り、是れ今暫く重視を要せさる所。

第二、晦庵の太極と象山の太極とが、其性質地位に於いて太差あること。是れ議論の他の一面にして、今討究を要する所の者。

而も其面目は既に略〻兩氏自家の語に見はれたれば、今唯之を要約して列擧すること左の如し。

第一、朱は曰はく極は至極なりと、陸は曰はく極は中なり理なりと。

朱の以て至極と爲すは、即ち其極めて理學的なる所以にして、亦無極を以て太極に冠するも、毫も撞着に陷るの虞なく、却りて其顯現に資する所以なり。莊子の無始、老

子の無名は即ち是れにして、列子の無始は宙即ち時間の上より其一面を考察命名せる者に過ぎず。吾を以て見れば是れ聖學の意にあらず、但其然ると否とは太だ重要ならざるのみ。陸の極は即ち中なり、即ち理なり。所謂中は中庸の中なり。蓋し中は儒學の根抵たり。堯曰咨爾舜、天之曆數在爾躬、允執其中、四海困窮、天祿永終といへる、即ち是れにして、孔子の仁といふも亦此に外ならず。儒學の本體論の究竟も亦此より以上に抽象概括を及ぼすことあらず、是れ即ち儒學的第一義にして、哲理的第一義に非ず。宋學に至りて其極をいへるは、則ち甲を逸脱して乙に至れる者なり。象山之を古に復さむとす、故に無極と謂ふは、彼の眼底には著明なる自家撞着として映せしなり。易の大傳に於ける太極も、吾は以て中を表せる者と爲せども、多くの學者は以て哲理的第一義を表すとなす。而して象山亦或は此點に於いて流俗に溺れたるに非ざるか。大學春秋講義に云はく、太極判而爲陰陽、陰陽播而爲五行（中略）塞宇宙之間何往而非五行（卷二十三、十左）と、彼亦朱晦庵が有形世界の理學的説明を取らむとするか。則ち分明なる自家撞着に陷りたる者。而も吾寧ろ之を彼が理科的思想の未だ到らざるに歸して、その眞意を晦庵との辨難に取らむとす。是を以て

第二、朱の大極は實地的即ち儒學的旨義を有せずして、陸の太極は之に反す。固より朱儒は以て儒學的大旨義と爲すべきを主張すれども、經驗上より來るにも非ず、實地の豫件として必要なるにも非ざる其太極は以て哲理的實は理學的第一義と爲すの他なきなり。象山の太極に至りては則ち然らず、今日の用語を籍りて謂ふときは、是れ倫理的政治的審美的の原理なり、既に這般の意義を有すとせば、是れ實に儒學的第一義にして、復混同し易き太極の名辭を用ゐるを便とせず。而して之を用ゐたるは唯易の大傳に謂ふ所に依據せしのみ、故に最後の究竟の結果、

第三、象山の太極といふ名辭は單に論理的の第一義を表示する者にして學問上の第一義は更に別に名辭を有す。

彼は一層學問上の第一義に近き者として、之を如何なる名辭の下に現したるか。即ち理是れなり。

道及ひ理

道理より以下心を説き性を説き乃至工夫に至る、象山の哲學に於いては當に一氣直下なるべき者。今大概に節を分ちて之を叙すと雖も、固より以て截然たる殊別

を表するに非ず。與趙詠道書に云ふ。

塞宇宙一理耳。學者之所以學欲明此理耳。此理之大、豈有限量。程明道所謂有憾

於天地則大於天地者矣、謂此理也。三極皆同此理、而天爲尊。（中畧）今學者能盡心知性則是知天。存心養性則是事天。人乃天之所生、性乃天之所命。自理而言、而曰大於天地、猶之可也。自人而言、則豈可言大於天地。（卷十二、八右）

是れ象山が理心性を言ふ所以の綱領なり。理に關しては彼蓋し屢〻之を言ふ。理の天地に充塞して、其人に於ける者亦此一理に外ならざるを謂ふなり。與朱濟道書に云はく、此理在宇宙間、未嘗有所隱遁、天地之所以爲天地者、順此理而無私焉耳。人與天地並立而爲三極、安得自私而不順此理哉。（卷十一、一左）と。與吳子嗣書に云はく、此理充塞宇宙、天地鬼神且不能違異、況於人乎。誠知此理者、當無彼己之私。善之在人猶在己也。故人之有善、若己有之。人之彥聖、其心好之（卷十一、七右）と。更に其易を贊するの語に於いて其所謂理を詳にするを得。塞宇宙一理耳。上古聖人先覺此理、故其王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文與地之宜、近取諸身、遠取諸物。於是始作八卦以通神明之德、以類萬物之情。（中畧）非眞知此理者不能爲此言也。（卷十五、十四左 與吳南斗書）といへる即ち是れ。

是に由りて觀れば、象山が所謂理は正に三項の意義を有す。

第一。萬象は恒常なり、之を名つけて理と謂ふ。

第二。理は宇宙に遍滿なり、人も亦固より免れず。

第三。宇宙事物の運行秩然として序あるが如く、人の行爲も亦一定の行ふべき所爲すべき所に適ふを要す、

而して之を名つけて道と謂ふ。理は主に說明の方面より名つけ、道は主に標準の方面より名つく。理は較〻抽象的なり、道は較〻具體的なり。理は屬性的にして、道は本體的なり。理既に宇宙に遍滿し、人に普通なり、道亦然らざるべからず。天地の節序も此道なり、聖人の家國を治むるも亦此道なり。與董康年書に云はく、此道充塞宇宙、天地順此而動、故日月不過、而四時不忒、聖人順此而動、故刑罰清而民服（卷十五右）と。與趙監書に云はく、道外無事、事外無道と、以て其中庸の道也者不可須臾離也、可離非道也と謂へるに同しきを見るべく、亦以て其易の一陰一陽之謂道といへるに同しく、宇宙萬象の現する其儘に就いて、直に道と謂ひ理と謂ふ所の者を認めて、必すしも抽象超絕乃ち以て之を得たりと爲すに非ざるを見るべし。

道と理との關係

今更に理に起り道に到る、彼が構說の首尾を代表すべき二語を揭けて、以て此節を終らむとす。則以學文と題する小品に云ふ、宇宙之間、典常之昭然、倫類之燦然、果何適而無其理也（卷三十二、九左）と。與趙監書には則ち云はく、道塞宇宙、非有所隱遁（中略）愚不省者不及焉、則蔽於物欲而失其本心、賢者智者過之、則蔽於意見而失其本心（卷一、十三左）と。道と云ひ理と云ふ頗る空邈捉雲底の事、而して象山敢て這般の言說を爲す其意端微に玆に露はる。但暫く促急することなくして徐に吾が觀察を序述せむか。

理の備はる所

心

理や道や、宇宙に遍滿通在する所以は、既に之を聞くことを得たり。唯問ふ、吾人は如何にして之を得べきか。曰はく既に之を有す、安んぞ之を得るを要せむ、唯それ之を明にせば玆に可なり。故に云はく、孟子曰其爲人也寡欲、雖有不存焉者寡矣。其爲人也多欲、雖有存焉者寡矣。只存一字、自可使人明得此理。此理本天所以與我、非由外鑠。明得此理、即是主宰、眞能爲主、則外物不能移、邪說不能惑（卷一、五左與曾宅之書、全卷、一左與邵叔誼書）と。此理既に我に備はる、乃ち其備はる所を名つけて心と爲す。而して所謂仁、所謂良知良能、亦是れ心の理に他なることなきなり。

心即理

心一理也、理一理也、至當歸一、精義無二。此心此理實不容有二（中略）仁即此心也、此理也（與曾宅之書、卷一、六右）。

孟子曰、所不慮而知者其良知也、所不學而能者其良能也。此、天之所與我者、我固有之、非由外鑠我也（全上、七左）。

爲仁由己、而由人乎哉。奮拔植立、豈不在我（與李成之書、卷十、一右）。

道理無奇特、乃人心所固有、天下所共由、豈難知哉（與包敏道書、卷十四、三右）。

明理の要

而して是れ又大學の所謂明德、故に云はく明德在我、何必求他（卷二十、十二左贈劉季蒙序）と。

夫れ此心既に此理の託する所なり、躰よりいへば則ち心にして、質よりいへば則ち理なり。是故に心即理なり。而して理は宇宙を通して一なり、故に象山は是に於いて更に一歩を進めて曰はく、萬物皆備於我、只要明理（語錄門人李伯敏所錄、卷三、十五、十四左）と。是を以て人苟くも心に於いて明にする所あれば、即ち萬物の理を明にせるなり。自我是に於いて明なり、衆我亦明なり、乃至天地宇宙も亦玆に明なりとす。

問うて曰はく、此理既に此心に在りと謂ふ、何故に更に之を明にすと謂ふか。曰はく、心に本心あり、私心あり、私心を去りて本心に就く、之を理を明にすと謂ひ、明德を

明にすと謂ひ、仁に里すと謂ひ、良知を致すと謂ふなり。所謂私心とは何ぞや、所謂己私者、非必如常人所見之過惡而後爲己私、己之未克、雖自命以仁義道德、自期可以至聖賢之地者、皆其私也。（卷一、十一右 與胡季隨書）是故に獨り凡俗學を知らざる者私心あるに非ず。則ち彼の學者と稱する者と雖も、亦實に免れむこと難し。蓋し學者大病在於師心自用、師心自用則不能克己、不能聽言。（卷三、五左 與張輔之書）是れ皆私心の弊なり。吾人は其弊により て其體を知了せざるべからず。

然らば則ち所謂本心とは何ぞや。孟子曰、人之所以異於禽獸者幾希。庶民去之、君子存之。去之者去此心也、故曰此之謂失其本心。存之者存此心也、故曰大人者不失其赤子之心。四端者即此心也。天之所以與我者即此心也。人皆有是心、心皆具是理、心即理也。故曰理義之悅我心猶芻豢之悅我口。（卷十一、十左 與李宰書）是れ即ち人の本心なり。自我や衆我や天地宇宙や、擴して之を充し、以て能く其事を成して違はず敢れざる所以の者は、即ち此本心のみ。故に云はく、古之人自其身達之家國天下而無愧焉者、不失其本心而已。（卷二、十一左 敬齋記）又云はく、彝倫在、維天所命。良知之端、形於愛敬。擴而充之、聖哲之所以爲聖哲也。（卷二、十七右 武陵縣學記）と。人皆本心あらざるなし、唯擴充發成すると否とは即ち庸と達と

の岐るゝ所。蓋し狂聖之相去遠矣、而罔念克念之端、頃刻而分。人心之危、豈不其可畏哉。（卷十二、一左 與趙然道）乃ち象山が邵中孚に與へて其進歩を責むるの語も、亦實に今吾友既得其本心矣、纖此能養之而無害、則誰得而禦之。（卷七、三右）を出づる能はざりき。

或は人心の時に非理に出つるあるを見て、即ち心や理や時ありてか滅すと爲す者あり、是に於いてか無心を以て善と爲すの說起る。然りと雖も是れ大に非なり、象山既に本心の恒常と私心の時發とを主張す、無心を以て脩養改善の方と爲す浮屠氏一流の說は、其大に反對する所。乃ち云はく、故心當論邪正、不可無也。以爲吾無心、此即邪說矣。（卷十一、十一左 與李宰書）と。更に其持說を擧して云はく、義理所在、人心同然、縱有蒙蔽移奪、豈能終泯。（卷二十一、十二左 贈劉季蒙序）と。乃ち又求むれば則ち得べき所以を論じて曰はく、良心之在人、雖或有所陷溺、亦未始泯然而盡亡也。（中略）所求者在我、則未有求而不得者也。求則得之、孟子所以言也。（卷三、十二、八左）と。

人間生活に明暗の兩面ある所以は既に略見るを得たらむか。而も明を本つけて本心と謂ひ、暗を歸して私心と爲す、此兩者何處よりか起れる。更に之を說き明さずんば、暗を去りて明に就く所以、即ち謂ふ所の明理に於いて未だ全しとすべからず。

性善說の淵源由來

是に於いてか習性の說あり。

性

湯庚に云はく、惟上帝降衷下民と。是れ支那に於ける性善說の始原にして、儒學の人を目する亦恒に此主義に由りしなり。中庸は則ち先つ天命之謂性と擧し、而して直に之を承けて率性之謂道といふ、亦其性善說を顯現す。孔子は則ち性相近也習相遠也と說きて、又、苟志於仁矣無惡也といふ、亦實に性善を含みしを見る。孟子に至りては則ち明に性善を論ず、性善の辯是に至りて大に詳なり。乃ち荀子の人之性惡、其善者僞也と說けるも、亦未だ必ずしも直徑的に反對せず。楊雄が人之性也善惡混、脩其善則爲善人、脩其惡則爲惡人（楊子法言修身篇）と說くに至りて、議論漸く巧緻なりと雖も、聖人の意を距ることは則ち漸く遠し。抑も人皆人に忍ひざるの心あり、所謂惻隱之心仁之端也、羞惡之心義之端也、辭讓之心禮之端也、是非之心智之端也、四端既に生なからにして我に具はる、吾人は唯之を擴充發達するを要するのみ。聖人の敎といふ亦此に外ならず、中庸が性道を承けて、やがて脩道之謂敎といへる所以なり。是れ實に儒學の敎育の直截簡易、多くの宗敎に在りても罕に見る所にして、象山が易に於ける聖人の事を贊して、後世言易者以爲、易道至幽至深、學者皆不敢輕言。然聖人贊易則曰、乾以易知、坤以簡能。易則易知、簡則易從。易知則有親、易從則有功。有親則可久、有功則可大。可久則賢人之德、可大則賢人之業。簡易而天下之理得矣（卷一、五右與曾宅之書）といへる所以なり。

象山の性善說

象山蓋し亦性善說を取る者。以爲へらく、本心は理なり不善あること莫し、而して本心は即ち是れ赤子の心、赤子の心は人の生なからにして有する所にして、即ち性なりと。故にその與王順伯書に云ふ、蓋人受天地之中以生、其本心無有不善、吾未嘗不以其本心望之（卷十一、十七左）と。其與包敏道書に云ふ、人之生也本直、豈不快哉、豈不樂哉（卷十四、二左）と。又嘗て曰はく、見到孟子性善處、方是見得盡（語錄門人傅子雲錄卷三十四、廿三右）と。以て彼が性善說を見るべし。

氣稟の差等

但象山は性を以て善なりとせるも、此善に隨うて之を長成發達し得る所以の能力に至りては、決して萬人均等に之を享有すと爲せるに非ず。與董元錫書に云はく、然俗人中氣質、又有厚薄輕重大小（卷十、九左）と。是れなり、則ち厚薄輕重大小ありと雖も、性既に善なり、宜しく時日と共に暢發して、以て、遂に完成の域に達すべきなり。然るに

蚩蚩たる衆人、終に溝中の瘠にして止む者多きは抑も亦實に憫む可からずや。是れ抑〻何處よりか來る。乃ち習欲の辨を要す。

習及ひ欲

象山乃ち迎へて此疑問を解いて曰はく、氣有所蒙、物有所蔽、勢有所遷、習有所移、往而不返、迷而不解、於是爲愚、爲不肖、彝倫於是而斁、天命於是而悖（卷十九、武陵縣學記）と。又曰はく、人之所以病道者、一資廩、二漸習（語錄包顯道錄卷三十六、二十六左）と。所謂私心とは斯くして成れる者の謂なり。（茲に所謂資廩とは、上に所謂氣質の輕重なり。）

彼曩に私心に於いて無學の私心と有學の私心との二類を立せしが如く、今習欲に於いて亦無學の蒙蔽と學者の蒙蔽とを立せり。甲は當時學者の皆說ける所なれども、乙は則ち象山が特に當時學術の流弊に感發して擧せる所の者。而して其學術の弊を破するの言說、淺薄なる頭腦の爲には、誤りて學術其者を蔑する者とせられ、是に於いて擬するに禪を以てせらるゝの寃あるに至れり。則ち寃と雖も、到底象山を如何ともする能はず。彼乃ち侃侃として主張すらく、

此心之良、人所均有。自耳目之官、不思而蔽於物、流溟展轉戕賊陷溺之端、不可勝窮。最大害事名爲講學、其實乃物欲之大者。所謂邪說誣民充塞仁義者（卷五、九左、與徐子宣書）安於所習、而絕意於古、固君子之所患也。以其所知而妄意於古、尤君子之所大患也（卷三十二、十五右、讀書何始於漢）

其森嚴なる筆法を以て、昂然自個の所信を述ぶる所、英氣躍躍直に人の肺腑に迫る。

抑〻蒙蔽と非蒙蔽と、何に準據して之を區別すべき。本心と私心との區別の標準は如何。大凡そ人の蔽はれ易き所の者、欲に若く者なし。欲とは何ぞ。利に向ふの意志即ち是れなり。而して欲に反對する者を名つけて義と爲す。是に於いてか義利の辨あり。謂へらく、義理之在人心、實天之所與、而不可泯滅者也。彼其受蔽於物、而至悖理違義、蓋亦弗思焉耳、誠能反而思之、則是非取舍、蓋有隱然而動、判然而明、決然而無疑者矣（卷三十二、七右、思則得之）と。又謂へらく、義者人之所固有也、果人之所固有、則夫人而喻焉可也。然而喻之者少、則是必有以奪之、而所志所習之不在乎此也（卷三十二、七右、君子喻於義）と。斯の如く義利の際に愼み、能く反り能く思うて以て懈ることなく、則ち明なることあらむと欲す。蓋し人共生乎天地之間、無非同氣。扶其善而沮其惡、義所當然、安得有彼我之意、又安得有自爲之意（語錄傅子雲錄卷三十四、九右）是れ實に思を著くべき所、而して知此理即乾、行此理即

坤、全上十右 此事實に太易太簡なり。而も其到達する所は則ち蔽解惑去、此心此理、我固有之、所謂萬物皆備於我卷一、十九左興姪孫濬書に至る、吾人は實に力めざるを得ざるなり。

蓋し道は實に遠に在らず。孔子曰はく、仁遠乎哉、我欲仁斯仁至矣と。孟子曰はく、夫道如大路然、豈難知哉と。而して猶能く之を得る者甚た多からざる所以の者は、孔子曰はく未之思也、夫何遠之有、以て充分なる解答と爲すべし。夫れ仁は即ち至道なり、而も俗學者の思惟するが如く難深幽遠なる者に非ず。象山曰はく、凡棄人絶物之心皆不仁也、比吉也、比輔也、此乃仁也、人道也卷十四、十三左興姪孫濬書と。彼常に謂へらく、道理只是眼前道理、雖見到聖人田地、亦只是眼前道理語錄傅子雲錄卷三十四、一左と。而して當時の學術多くは、繁衍支離、事益繁にして功愈少し、是を以て象山乃ち憤發する所あり、

夫子曰、知之爲知之、不知爲不知、是知也。後世恥一物之不知者、亦恥非其恥矣。人情物理之變、何可勝窮、若其標末、雖古聖人不能盡知也。（中略）學未知至、自用其私者、凡至於亂、原委之倫、顛蒙之序、新年卒歲、靡所底麗、猶焦焦然思以易天下、豈不謬哉卷一、三興邵叔誼書

と。道は近きに在り、而して之を遠きに求む。古今を絶し、東西に通じ、弊端の發する所

往往にして其揆を一にする者あり。

上來四節、理を說き、心に得、本心と私心とを辨して、之を性と習とに本つけ、在近の道、易簡の敎乃ち立てり。蓋し聖人之言、有若不待辯而明、自後世言之、則有不可不辨者。卷三十二、一左好學近乎知是故に象山亦隨うて發明啓示すること斯の如し。但上來はこれ知の部分なり、行の部分亦多少の辯すべきなしとするか、之有り、以て進學を容易にするを得む。今や進みて之を觀むか。

學

凡そ人の進捗を致す所以の事を名つけて學と謂ふ。之が基となる者は志なり。是故に象山は其論語說を著すや、亦特に苟志於仁矣無惡矣、及ひ志於道、據於德、依於仁、游於藝の二章に於いて筆を著けて云はく、士之於道、由己之學。然無志則不能學、不學則不知道。故所以致道者在乎學、所以爲學者在乎志卷二十二、十左と。而して學の大旨は實に本心を得るに在り、心の理を明にするに在り。而して之に到るの要は私欲の蒙蔽を去ると私執の蒙蔽を去るとに在り。即ち曰はく、卷十二、六左與趙詠道

爲學有講明有踐履。大學致知格物、中庸博學審問愼思明辨、孟子始條理者智之

事、是講明也。大學脩身正心、中庸篤行之、孟子終條理者聖之事、是踐履也。

象山の知行論未た餘姚の合一說に到らさりしは、是等の言說を以て明に之を見るべし。蓋し講明あり踐履あるは固より學者の異論なき所、而も其如何なる點に就いて講明を致すべきかに關しては、象山實に當時朱學の一派に慊焉たる所あり、故に語を次いで曰はく、自大學言之、固先乎講明矣。(中略)必一意實學、不事空言、然後可以謂之講明。若謂口耳之學爲講明、則又非聖人之徒矣。(上)と。蓋し空言の實學を蝕するの大なるは、象山が對症の藥として時流に其說を供せし所以の大綱にして、實に學者に於いて頃刻も忍ぶべからざる深毒と爲しゝ所。或は實亡莫甚於名之尊、道弊莫甚於說之詳者(卷三十、三右智術之原論)と論し、或は此道與溺於利欲之人言猶易、與溺於意見之人言却難(語錄傳子雲錄卷三十四、六左)と激し、而して或は

而後世乃有疲精神勞思慮、皓首窮年、以求通經學、古而內無益於身、外無益於人、敗事之誚、空言坐談之譏、皆歸之者。庸非不通於理而惟書之信、其取之者不精而致然耶。(卷三十二、十四右取二三善而已矣)

と說く、是れ實に象山一世立言の動機なりと謂ふべきなり。是故に其所謂講明は力めて簡易直截を旨とす、而して唯之を立せむが爲に理心性習本私義利の辯を費せり。這般既に立す、學といひ講明といふ亦他事なきのみ。

學無二事、無二道。根本苟立、保養不替、自然日新、所謂可久可大者、不出簡易而已。(卷五、五右與高應朝書)

故正理在人心、乃所謂固有。易而易知、簡而易從、初非甚高難行之事。然自失正者言之、必由正學以克其私、而後可言也。此心未正、此理未明、而曰平心。(平心といふは莊子よりの出)不知所平者何心也。大學言、欲正其心者先誠其意、欲誠其意者先致其知、致知在格物、物果已格、則知自至、所知既至則意自誠、意誠則心自正、必然之勢、非強致也。(卷十一、與李宰書)

其自といひ必然といふに注意するを要す。此道固太た簡易、而して所貴乎學者、爲其欲窮此理、盡此心也。(上)故に學亦本來太た簡易なり。然りと雖も學は既に人事なり、學の講ぜざるは其責終に人に在らざるを得ず。故に云はく、道之行不行固天也、命也。至於講明則不可謂命也。知言者亦何必俟其効之著而知其所到哉。此心本靈、此理本明、至其氣禀所蔽、習尙所梏、俗論邪說所蔽、則非加剖剝磨切、則靈且明者曾無驗矣。(卷十、十一左與劉志

書甫と。是故に人は學ばざるべからず、既に學に志す、是れ實に學の强半を成就せるなり。

然りと雖も、究竟の到達に至る、亦多少の捷徑と注意とをなくんばあらず、之を名つけて工夫と謂ふ。

工夫

疑に始まる

工夫の動機は疑に在り。與胡季隨書に云はく、學問之初、切磋之次、必有自疑之兆。及其至也、必有自克之實。此古人物格知至之功也。と。學問は自疑に始まり、自克に終る。其過程の方法を工夫と名つけ、効果を物格知至と名つく。

工夫の事多多擧するに勝ふべからずと雖も、之を約して四類と爲すことを得べし。即ち左の如し。

省察

第一、省察なり。謂へらく、夫子七十而從心、吾曹學者省察之功其可已乎（卷五、六右、與楊敬仲書）と。蓋し省察は自覺を致す所以にして、自覺は即ち觀心なり、觀心茲に明理を致す。且夫れ進歩は斷續あらず、二種の私心隨うて生すれば隨うて去る。是れ省察の功なり。故に省察を以て工夫の第一程と爲す。

第二、細近なり。省察何の點に於いて最も力を用ゐるべき、大體既に得て志斯に立つ、工夫は則ち此より以上の事たり、乃ち更に細近の上に於いて工夫を用ゐるを要す。謂へらく、要在於不厭詳復、不忽卑近、相與就實以講求至理、研覈其實、毋遽以大意粗說蓋之、則至理可明、詖說可破（卷五、十一右、與徐子宜）と。又謂へらく、庸言之必信、庸行之必謹、是知所以成己矣（卷三、十、左）と。蓋し洶湧澎湃堤を決し丘を崩すの江水は、山間溪泉の涓涓より來り、宇內を震し乾坤を盪かすの雄圖は、寂寞たる幽窓の呻吟より出つるを思はば、細近の工夫は吾人の決して怠る可からざる所。故に象山常に曰はく、人莫先於自知、不在大綱上、須是細膩求、（語錄、門人周廉夫、四左）と。名工畫伯の製作に於ける、雄將英帥の用兵に於ける、皆一般の注意と用心とを以てするに外ならず。故に細近を以て工夫の第二程と爲す。

第三、知恥なり。吾人の心力は弓を張るに似たり、時時張りて之を新にすることなくんば、動機終に全く銷せむ、而して之を張る所以は恥を知るに若くは莫し。蓋し不善之不可爲、非有所甚難知也。人亦未必不知、而至於甘爲不善、而不之改者、是無耻也。（卷三、十二、六右、人不可以無耻）思ふに恥は歐西諸家の敎學に於いて太た觀ること罕なる所、而して儒

學の工夫に於いては古來甚だ重んじて之を尙ひ、我國在來の武士道の如きは殆と知耻を以て道義の根底と爲すの觀なきに非ず。夫れ仁義禮智は德の四面なり、孟子義の端を名つけて羞惡之心と爲す、羞惡之心は即ち恥を知ることなり。孔子曰はく、道之以政、齊之以刑、民免而無恥。道之以德、齊之以禮、有恥且格と。民をして恥有らしむるは即ち儒學敎民の大旨なり。歐西の風俗政刑を尙ひ、而して民に羞恥鮮し、之を所謂法治主義の流弊と爲す。故に知恥を以て工夫の第三程と爲す。

第四、餘裕なり。上來三程既に積極的の工夫を擧し了る、而も玆に一種消極的の工夫あり、即ち是れ無工夫の工夫なり。曰はく、學者不可用心太緊、深山有寶、無心於寶者得之（語錄、傳子雲錄、卷三十四、二十二左）と。懷を大空に遊はしめ、思を九霄に放つ、人須是閑時大綱思量、宇宙之間如此廣濶、吾身立於其中、須大做一箇人（語錄、李伯敏錄、卷三十五、十二左）是れ亦之を致す所以の一法なり。凡そ餘裕を養ふは務めて心思をして無用に勞せさらしむるに在り。善く步行する者必ずしも程頓を貪らず、唯道路の曲折に當りては最徑を行き、傾斜に當りては最坦を行く、此の如きのみ。古人精神不閑用、不做則已、一做便不徒然、所以做得事成。須要一切蕩滌、莫留一些、方得（語錄、包顯道錄、卷十五、五十三左）と、即ち是れなり。故に餘裕を

以て工夫の第五程と爲す

吾人は滔滔たる流俗に循うて、象山の學を以て本質上佛說を加味せりと爲さずと雖も、其工夫に至りては則ち頗る彼に負ふ所あるを認めざるを得ず。此第一と第三とは儒學の常に相傳せる所なりと雖も、第二と第四とは則ち明に彼より來れる者。須是細膩求といふが如き、用語の既に其痕跡を止むるを看ずや。第四擧する所の如きは、實に髣髴として禪家の面相の認むべきあるを看ずや。而も此等必ずしも儒學と相衝突する者に非ず、乃ち相和して以て儒學の目的に達すべき者。餘姚が致良知の敎は則ち這般の佛臭なくして、積極の方面より此効果に到る者なり。則ち佛臭の譏を免れずと雖も、人若し眞に這般の到達なくんば、其擔當、其襟度、到底以て大事に當り逆境に處するに足らず。孟子が浩然之氣を點出せる、蓋し亦其義を一にす。由來英邁卓犖の士、齷齪として陳篇零紙の裏に一生を沒了することを能はざる者は、毎に這般の工夫を要とす。乃ち之が爲に象山を目して儒學の敵と罵るが如きは是れ眼孔豆の如き小人儒の事のみ。

實踐

空論を排す

理何が爲にか明にし、學何が爲にか講じ、工夫何が爲にか費す。亦唯實踐に資せむが爲のみ。蓋し人の一生は行爲の連續なり、行爲之を如何にすべき、是れ儒學の本有問題、而して學者往往之を忘れて空に趨る、古今爲學者の通弊なり、性理の說の盛に行はれし象山の時代は、殊に其著きを見る。彼乃ち曰ふ、

獨以爲、古之性說約、而性之存焉者類多。後之性說費、而性之存焉者類寡。(中略)若夫未有篤敬之心、踐履之實、而遽爲之廣性命之說、愚切以爲病而已耳。(卷三十、二右)

蓋し昔在道の將に廢れむとするや、孟子辭して之を闢く、告子湍水の論、荀卿性惡の說、皆孟子と相反するの甚しきもの、而も倘心を動かさざるの告子あり、必ず禮に由るの荀卿あり。道の衰ふること其實未だ甚しからざりき。象山の時代は則ち大に之に異なり。是を以て象山次いで擧せるの言、實に銳絕壯絕、颯爽として人を襲ひ、躍躍として人に迫る。吾人は反復を厭ふに遑あらず。

嗚呼循項至踵、皆父母之遺骸。俯仰乎天地之間、惕然朝夕求寡乎愧作而懼弗能。儻以庶幾於孟子之塞乎天地、而與聞吾夫子人爲貴之說乎。

洵に儒夫をして起たしめ貪夫をして廉ならしむる者、而して所謂誠は庶幾すべき

なり。謂へらく、誠者自誠也、而道自道也。君子以自昭明德(語錄門人嚴松年錄、卷三十四、四十八右)と。唯此感念凝りて誠となる。誠とは何ぞや(卷十一、七右、與吳子嗣書)

誠者非自成己而已也、所以成物也。成己仁也。成物智也。性之德也。合內外之道也。

然らば則ち誠得て而して儒學の能事終れりと謂ふべし。

是故に象山が學の要訣は、實に一の實字に止まる。彼常に曰はく、千虛不博一實、吾平生學問無他、只是一實(語錄傳子雲錄、卷三十四、七右)と。唯此實あり、故に其用は即ち活なり。實學は即ち活學なり。曰はく、論古之是非得失、而不及今之施設措置、吾未見其爲果知古也。然則古亦豈可以易言乎哉。(卷三十一、七左、問晦澤)と。其學風以て知るべきなり。是れ吾人が象山の教學を敍するに方りて、到底筆を其哲學に絕する能はざる所以、而して又彼を以て儒學の眞相に於いて得たる所有りと爲す所以なり。

上來象山の哲學を其本綱に於いて敍し了る。今之より出づる諸般の敎條を敍するに先だち、暫く此哲學と所謂異學との關係を觀、又其理學的餘說を窺うて、以て更に彼が哲學に關する敍述を完うせむか。

異學の論

釋氏を論す

已に正面より陸象山が哲學を看了る。今其異學に對する考說を聽きて以て、反面より其見地を窺はむとす。

異學の中、釋氏は彼が最も嫌疑を被れる者、而も彼自らは如何なる見解を以て之に對せしか。王順伯といふ者あり、佛を奉じ、象山に勸むるに自家の信奉を以てす。象山書を以て之に復す。彼が佛敎に關する智識は、某雖不曾看釋藏經敎、然而楞嚴圓覺維摩等經、則嘗見之（卷六、六左）といへるを以て見れば、當時泛泛たる儒流に比して、頗る著實なる智識を有せしを察すべく、而して其眼底の佛敎が、必ずしも卑くして而も近き小乘說に限らざりしを見るべし。彼果して如何なる批判を下したるか。

某嘗以義利二字判儒釋。（中略）惟義惟公、故經世。惟利惟私、故出世。儒者雖至於無聲無臭無方無體、皆主於經世、釋氏雖盡未來際、普度之、皆主於出世。（中略）故釋氏之所憐憫者、吾儒之聖賢無之、吾儒之所病者、釋氏之聖賢則有之。試使釋氏之聖賢、而繩以春秋之法、童子知其不免矣。（卷二、一乃至四）

釋氏を拘引し來りて春秋の法庭に裁判を試みむとす、何ぞ其酷なる。蓋し象山が此批判は、道德に不變の實相と不定の形躰とあるを沒却せる者、又徒に釋氏の出世を攻めて其何故に出世を說くかを顧ず、出世を說くは即ち是れ彼が經世を說く所以の意と半ば相契合するを顧ざる者なり。而も此般の沒却は是れ實に滔滔たる俗流の通弊にして、夫の釋氏の徒、宗敎信奉の流輩亦且免れざる所たり。則ち實際の効果如何を以て批判の標準と爲したる象山の宣告の斯の如くなりしは、亦未だ必ずしも恠む可からず。出世と經世とは實に佛儒の差別なり。義利を以て二家を判ずるは或は當らず。昔謝上蔡曾て之を言ふ。儒の義は固より異なし、佛の利は義に對する利には非ず乃ち義利を超絕するの利に非ざるか。而も此見は象山の尤も固執する所たるや、彼は屢〻之を謂へり。某嘗謂儒爲大中、釋爲大偏。以釋與其他百家論、則百家爲不及、釋爲過之。原其始要其終、則私與利而已。（卷二、六左、與王順伯書）その一なり。釋氏謂此一物非他物故也、然與吾儒不同。吾儒無不該備、無不受攝、釋氏了此一身、皆無餘事。公私義利於此而分矣。（語錄、卷三十五、六十一右）その二なり。是れ到底彼が偏見たるを免れざるべし。但其儒學の見を觀るに於いて這般は甚だ興味ある引證にして、亦以て象山が如何に空を厭ひ實を尙びしかを見るべきなり。

異端に對する見地

然く偏見なりと雖も、彼は決して滔滔たる俗流を趁うて、叨に異端を攻め以て自

家に忠を衒ふ小輩に非りしなり。凡そ彼が釋老其他異端に對する見地は、其策問（卷二十四）を讀みて窺ふべし。謂へらく、老子は孔子以前に在り、而も孔子は之を闢かず。孟子は老子の流末たる楊朱を闢くと雖も、亦終に老子に及ばず。楊雄に至りて始めて老子槌提仁義、絶滅禮樂、吾無取焉耳と言ふも、猶その道德を言ふを取れり。韓退之の原道に至りて、始めて之を力排せりと。世以儒者爲無用、仁義爲空言、不深究其實、則無用之譏、空言之誚、殆未可以苟逃也。（八左）實學を力めずして徒に異端の攻排に矗矗する、の事を害するを謂ふなり。其與陶贊仲書（卷十四右三）亦之を言ひ、與薛象先書には則ち云はく、夫子之惡鄉原、論孟中皆見之、獨未見其排老氏、則所謂異端者、非指佛老明矣（卷十三、九左）と。佛老を一束して之を品價せるは二句之れを示す。曰はく、佛老高一世、人只是道偏不是（語錄包顯道錄、卷三十五、五十一左）と。

佛の中、禪に對する象山の意見は特に之を揭ぐるを要す、是れ彼が嫌疑の點なればなり。謂はく、釋氏立教本欲脫離生死、惟主於成其私耳、此其病根也。且如世界如此、忽然生一箇謂之禪、已自是無風起浪、平地起土堆了（語錄傅子雲錄、八左）と、其病根の說は既に屢之を聞く、其禪に對する冷語は實に論理的に痛快なる批判と謂ふべし。而も是れ

禪を論す

唯、論理的短評のみ、品價は別に自ら在るなり。曰はく、今之談禪者、雖爲艱難之說、其實反可寄託其意見。吾於万衆人前開口見胆（全上十九左）と、以て彼が他の那邊に昇降せしかを見るべし。

象山既に朱晦庵と太極を論するに於いて、凡そ事の老子に淵源する者を斥けて以て儒學と觀合せずと爲せり。而も其純ら老子を論じて其論の出つる亦實に當年の俗學に其因を歸せるは時處位の精見正に群流を拔くこと一等。

老氏者得其一不得其二、而聖學之異端也。故幸夫私術之失、因欲申己之學、而其言則曰、絶聖棄智、又曰、以智治國、國之賊、是直泛舉智而排之。世之君子常病其汚吾道、而不知其皆售私術者之過也。使術之說破、則爲老氏者將失其口實、而奔走吾門牆之不暇、其又何汚焉。（卷三十、八右）

老子なる者夫れ亦千秋の知己を得たるに破顏せむか、彼未だ遺篇の文字を以て品隲し易からざるなり。

老を論す

大凡象山が異學に對する意見は此の如し。彼既に儒と稱する者の中に於いて、繁衍叢脞なる學說の日に益興るを見て其弊に堪へず、猶何ぞ異學に就いて强ひて屑

合成主義

屑の批判を費さむや。彼が釋老二家に於ける辨說は寧ろ其合成主義を表す。所謂攻異端是害而已矣、象山蓋し之を得たり。彼が學問の本義然らざるを得されば(エクレクティスムス)なり。

餘說

或は吾人か象山の哲學を敘述するに於いて、其純正哲學に該當する部分なきを怪む者あらむ。是れ吾人の粗漏なるに非ず、象山の學然るなり。亦是れ象山の粗虞に非ず、儒學の眞相然るなり。蓋し儒學は自我衆我及び天地宇宙を如何にすべきかといへる、其本有問題に關連する以外に出でて、經驗の必至に非ざる範域に於いて、強ひて空理の構說を試みざるを以て其主義と爲せばなり。

支那の學術に於いて大に此點を發達せしめたるは實に宋學に在りとす。俗流往往易を以て高遠なる理說の寄寓となせども、易の道亦唯易簡のみ、實を離れて易なきなり。吾人は易陰陽五行等の說に於いて、象山の理學に似たる者を見る。吾決して其理學の未熟なるを咎めざるべし、而も彼や往往此點に於いて甚だ頭腦の混雜を來し、時として易簡直截なる其本領を逸脫せるの觀なきに非ず。支那二千年學術の流弊と謂ふと雖も、抑亦象山に惜む所なり。

其易說に云ふ、不明此理而泥於爻畫名言之末、豈可與言易哉。陽貴陰賤、剛明柔暗之說、有時而不可泥也。（卷二十二、一右）又云ふ、吾嘗言、天下有不易之理、是理有不窮之變、誠得其理、則變之不窮者、皆理之不易者也。（仝上三右）又嘗て曰はく、數即理也、人不明理、如何明數（語錄顧道錄卷三十五、四十八左）と。是れ象山の本領宜しく然るべきの言、吾人はその識見の優に高きを見る。惜いかな彼は言說を玆に止めず、乃ち强ひて海圖洛書等の數を說明し、一二三を以て三の尊を說き、一二三四五を以て五行に充て、以て五の尊を說けり。（卷二十二、七及び八）曰はく、蓋三者變之始也と、是れ可なり、曰はく、蓋五者變之終也、參五以變、而天地之數不能外乎此矣。天地既位、人居其中とあるに至りては、其流俗陰陽象數者流と同しく沒義に陷らざるかを疑はざるを得ず。

而も彼が易の組織を解く、亦一二の觀るべきなきに非ず。一二三を解するや則ち曰はく、有一物必有上下有左右有前後有首尾有背面有內外有表裏、故有一必有二、故曰一生二。有上下左右首尾前後表裏、則必有中、中與兩端則爲三矣、故曰二生三。故太極不判爲兩儀、兩儀之分、天地既位、則人在其中矣。三極之道、豈作易者所能自爲之哉。（卷二十二、六右）と。上半は則ち吾人の見解に幾し。其結句は則ち彼が眞相を披いて躍如たり。その

四象生八卦を解くや、則ち謂へらく、

老陽唯一躰　四四四　乾
老陰唯一躰　八八八　坤
少陽凡三躰　四八八　震
　　八四八　坎
　　八八四　艮
少陰凡三躰　八四四　巽
　　四八四　離
　　四四八　兌

四象生八卦亦可見於此（卷二十二四左より）といふ、未だ太だ尊ふに足らずと雖も、亦吾人を教ふる者なしとせず。象山又揲蓍の法を論じて曰はく、今世所傳揲蓍之法、皆襲楊子雲之謬。（中略）子雲之太玄、錯亂著卦、乖逆陰陽、所謂君不君子不子、（中略）而世之儒者猶依彼以言易、重可嘆也（卷十五、十四右　與吳斗南書）と。彼既に流俗沒義の渦流に陷れり。揲蓍は卜筮の一法のみ、易理に於て何の輕重する所ぞ、而して君不君子不子を以て之を呼び、重ねて

又甚可嘆也といふ、借問すこれ彼が稱道する所の實學に對して、果して何の關係する所ぞ。而して沒義の渦流の中心は實に其の荆門軍廳に書經皇極章を講じたる時に於いて彼を襲へり。彼は講し了りて衆人に示すに左の圖を以てせり、

其說に曰はく、曩に講せる所は士人に教ふる者、今讀書を爲さゞる一般人民の通曉に資せむが爲に、特に此圖を作ると。吾人は寧ろ其意を料るに苦む。

象山の易觀を記述するに方りて看過すべからざる者あり、彼曰はく、如周禮雖未可盡信、如筮人言三易、其經卦皆八、其別皆六十有四、龜筮協從、亦見於虞書、必非僞說。如此則卦之重久矣。蓋伏羲既畫八卦、即從而重之、然後能通神明之德、類万物之情、而扶持天下之理。文王蓋因其繇辭、而加詳、以盡其變爾（繫語傳子雲繫卷三十四、十三左）と。是れ易の作成に關

陰陽論

天文曆法
醫藥論

する象山の見解なり、吾人は茲に格別の評論を加へず、是れ一個の史的問題、拙著易論已に之を詳述す

門人嚴松年が記する所の語錄に據れば、象山は又洪範以下の陰陽說によりて多少の辯を費せることあり。而も其天文曆數等の事は、支那在來の學術の既に傳ふる所に係り、象山の自說と見るべき者なし。

彼土の學術、天文曆法の事は直接に民命に關するの大なるを以て、夙に大に開けしは事實なり。周公洛陽の司天臺に於いて、既に赤道黃道の角度の變動、即ち歲差の移動に注意せしが如き、其著名なる例なりとす。醫藥の事も亦多少の發達なきに非ざりしも、猶未だ甚だ幼稚を免れず。抑〻事の科學に關する者は、人生の實際に大關係ありと雖も、純正哲學の如き、宇宙論の如き又靈魂論の如きは、則ち然らず。象山之を欠き、儒學之を欠く、吾之を怪まず。

以上陸象山の哲學を觀了る、而も彼が敎學は茲に悉きず。

教及び學

第四　敎育

主義

自立の要は心の理を明にするに在り、心の理を明にするの要は敎と學とに在り。學は以て士に期する所、敎は以て民に期する所。謂へらく民之於道、係乎上之敎、士之於道、由乎已之學（卷二十二、十左、論語說）と。然りと雖も所謂民、所謂士は、是れ理想上の語のみ、天下純然たる士民あることなし。此故に學と敎とは如何なる人に在りても多少の比例を以て兩存せさるべからず、此兩者の和は即ち中庸の所謂修道之謂敎なる者なり。是故に象山が與邵中孚書に云ふ、

居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道、乃吾分內事耳。若不親師友、沮沒於流俗、驅而納諸罟獲陷穽之中、而莫之知辟、豈可不憐哉。（卷七、三左）

と。即ち何人も理想的極致に達せさるよりは、師友の要あるなり。而して師友の事は即ち敎育なり。

象山既に位に當りて大に志を當世に得す、終に敎育家として其材能を役するの

境遇に至れり。其敎育主義既に上來叙述せる生涯と哲學とを以て想像すべしと雖も、更に直接の語言に聽く、亦一層親切の感あらむとす。

自立自重主義

象山か敎育の第一義は、直に人の性即ち心內心中の理に訴へて、自重自立の氣象を發揮せしむるに在り。山間方丈より朱晦庵に與ふる第二書に云はく、人能宏道、非道宏人（卷二、十六左）と。是れ彼が平生自ら任し亦人に期せし所。嘗て曰はく、敎小兒須發其自重之意（語錄包顯道錄、卷三十五、四十右）と。小兒且然り、況んや大人をや。故に曰はく、自立自重不可隨人脚跟學人言語（仝上四十三左）と。自ら立たす自ら重んぜざる者は、他の役と爲る者なり。

實主義

曰はく、君子役物、小人役於物。夫權皆在我、若在物即爲物役矣（仝上四十七左）と。象山が敎育の自重を主とする概ね此に類す。是れその心即理、萬物皆備於我說の必然後件なり。

其第二義は實を重んじ空を去ることなり。是れ彼が畢生學問の主義固より然るべき所。彼が晦庵に與ふる亦之を謂へり。今亦欲得尊兄進取一步、莫作孟子以下學術、省得氣力、爲無極二字分疏、亦更脫灑磊落。古人質實、不尙智巧、言論未詳、事實先著と、是れ第二書中の語なり。別紙所謂我日斯邁、而月斯征、各尊所聞、各行所知亦可矣。無復其必用也。不謂尊兄遽作此語、甚非所望（卷二、二十四左）と、是れ第三書中の語なり。

義利辨別主義

其第三義は義利の辨を審にするに在り。陳正己問うて曰はく、陸先生敎人何先、對曰、辨志正己。復問曰、何辨、對曰、義利之辨（語錄傳子雲錄、卷三十四、六右）と。その傳克明に與ふるや曰はく、今時士人讀書、其志在於學場屋之文以取科第、安能有大志（卷十七右）と。その嘗て此道與溺於利欲之人言猶易、與溺意見之人言却難（語錄上仝六左）と曰へるが如き、私利と私見とは當時學者の二大弊として熱心之が匡濟に竭力せし所、白鹿洞書院の講義、朱晦庵をして席を離れて熹當與諸生共守以無忘陸先生之訓と言はしめし所以なり。

切近主義

其第四義は切近優遊なり。是れ其講學の注意として與ふる所。與吳顯仲書に云ふ、爲學固不可迫切、亦當有窮究處、乃有長進（卷二、二十四右）。是れ之を裏面より說ける者。思之爲道貴切近而優遊。切近則不失己、優遊則不滯物（卷三、二右與劉深甫書）。是れ之を正面より說ける者。更に之を詳にして云ふ、事無大小、道無淺深、皆不可强探力索、人患無志、而世乃有志不如無志者、往往皆强探力索之病也（卷四、十八右與符復仲書）。然らば則ち是れ亦敎育主義の一諦たること明なり、而して正に工夫の第二及ひ第四に應ず。

斯の如き主義に由りて象山は敎育を施せり。其人に應し機に臨みて、之を運用するの妙訣、吾人は將に次節に於いて其一斑を窺はむとす。

知人の要訣

實地

象山が實地教育の眞相を知らむと欲せば、先つ其人を見るの秘訣を得むことを要す。銖銖而稱之、至石必繆、寸寸而度之、至丈必差。石稱丈量、徑而寡失。後世人君、亦未嘗不欲辨君子小人、然卒以君子爲小人、以小人爲君子者、寸寸而度、銖銖而稱之過也。以銖稱寸量之法、繩古聖賢、則皆有不可勝誅之罪、況今人乎（卷十七、九左、與致政兄書）と。是れ主として人君が臣下を知るの要より說けりと雖も、亦以て彼が知人の要訣を窺ふに足らむか。

應人與講

又嘗て曰はく、念慮之不正者、頃刻而知之、即可以正。念慮之正者、頃刻而失之、即爲不正。有可以形迹觀者有不可以形迹觀者。必以形迹觀人、則不足以知人。必以形迹繩人、則不足以救人（語錄）と。烱烱たる眼孔善く人を見、其長短によりて之を救ふ所以を講ず。孔子教育法の要亦實に之を出でざりき。

象山の人を訓ふる、諄諄として倦まざるは固より之有りしを疑はず、而も其最長は直に人の病根に入り直に人の肺腑に據るに在り。其時に臨み人に應して語氣を强弱にし議論を緩急にする所以を注意せば、如何に教育の此第一要訣に於いて、彼が優に長所を專にせるを知らむとす。

元氣と血氣

孟子曰、仁義忠信、樂善不倦、此天爵也。公卿大夫此人爵也。孟子之時、求人爵者尙必修其天爵。後世之求人爵、蓋無所事於天爵矣。捨此而從事於彼、何啻養一指而失其肩背。況又求之有道、得之有命、非人力所可必致者、而反營營汲汲於其間、以得喪爲欣慼、惑亦甚矣。（卷三、一右）

これ象山が童伯虞に與へて其祿位に屑屑たるを戒めたる語なり。何ぞ其深切精到なる、大愚と雖も亦能く悟る有らむとす。而して其吳仲詩に與ふるや則ち云はく、大抵天下事、須是無場屋之累、無富貴之念、而實是平居要研覈天下治亂、古今得失底人、方說得來有筋力（卷十六、二左）と。更に其與趙然道書を看れば則ち云はく、富貴利達之不足慕、此非難知者。（中略）知道之士自不溺於此耳。初未嘗斷棄也。（中略）夫子曰、富與貴是人之所欲也、不以其道得之不處也。然則以其道而得焉、君子處之矣、曷嘗斷棄之哉。（卷十二、二右）（中略）所欲有甚於生、所惡有甚於死、死生大矣、而不足以易此、況富貴乎。富貴之足慕、不足慕、豈足多較於學者之前哉（全上）と。均しく是れ利祿富貴の辨なり、而して其形相を多樣にし、其緊緩を多種にせること斯の如し。彼が教育上の敏腕は粗、以て窮知するを得むか。

常に自重自立を說く、青年血氣の人之が爲に弊を流すことあり。則ち說いて曰は

く、凡有血氣皆有爭心苟有所長必自介恃當其蔽時雖甚不足道者猶將挾以傲人豈可望其以能問於不能以多問於寡也。（卷三、十三左）これ曹立之に與ふる者。學者大病在於師心自用師心自用則不能克己不能聽言。（卷三五左）これ張輔之に與ふる者。說いて青年學生、而も頗る志を有する者の深弊に中ると謂ふべし。

その他空を排し實を揭けて、所謂講學者、以空言滋習豈唯無益其害又大矣（卷十二、四左與趙道書）といひ、細近を勸めて君子所不可及者其唯人之所不見乎（卷二十一、九右贈陳晉卿序）といひ、貧士を勵まして無常產而有常心者惟士爲能（卷二十一、一左送毛元善序）といふが如き、皆實地の達を見る。

象山諸生に臨むや、常に嚴正を以て自ら持す。嘗て曰はく不可戲謔不可作鄉談人欲起不肯破敗意必先此二者發之（語錄包顯道錄卷三十五、五十三右）と。以て想見すべし。

身を以て儀表と爲す

凡そ上來擧する所は、大概是れ警誡訓誨の例。其大綱の包容は既に其哲學に於いて見るべし。彼が敎育は眞に身を以て儀表と爲し、所信を揭けて之を皷吹するのみ、求むるに今世の所謂敎育學系を以てす可きに非ず。且夫れ敎育の實効は寧ろ此に存して、所謂敎育學系は唯形式の完備に過ぎざるかの疑は、近時益〻其度を高むるに非ずや。事に敎育に從ふ人士の靜思を乞ふ。

讀書及ひ文藝

蓋し讀書及ひ文藝は、當時の學徒が學程の日課なり。象山の敎育主義は、此點に於いて亦大に發表せられざる可からず。

彼が讀書法を要約すれば、字に於いて目を以て讀むことなかれ、心を以て理に於いて讀め、の一項に歸す。開卷讀書時、整冠肅容、平心定氣、詁訓章句、苟能從容勿迫而諷詠之、其理當自有彰彰者、縱有滯礙、凡心未充未明、猶有所滯而然耳。姑舍之、以俟他日可也。（卷三、三左與劉深甫）これ既に彼が讀書法の大綱を看るに足る。若し夫れ（語錄傳子雲錄卷三十四、二十左）讀書切戒在荒忙。涵泳工夫興味長。未曉莫妨權放過、切身須要急思量。自家主宰常精健、逐外精神徒損傷。寄語同遊二三子、莫將言語壞天常。

讀書法

に至りては、抑〻亦何等實用の韻語ぞ。書を讀みて書の役となるは、其最も深く戒めし所。而も幼時より讀書外閒實攷索甚力といふ、詩の第四句能く之を表すと謂ふべし。故に又曰はく、書亦不必遽爾多讀、讀書最以精熟爲貴（卷十四、六右與晉必克書）と。是れ朱子の晚年と正に同意見。而して精熟の工夫は則ち讀古書且當於文義分明處誦習觀省、毋忽其

爲易曉、毋恃其爲己曉、則久久當有得實益（卷十與邵叔誼）に在り、吾人は尤も思はざるべからず。

象山が詩文に關する意見は諸處に散見すれども、其大意は其傳聖謨に與へて作文特吾人餘事（卷六、七左）といひ、鄭溥之に與へて文藻特溥之餘事（卷十一右）といひしを以て觀るべし。文藝に重を置かず。是れ儒學の本旨に於いて當然なり。孔子四程を述べて最後に遊於藝を言ひ、行而有餘力則以學文と曰ふ、亦此意のみ。而も象山が所謂詩文は、頗る範圍の廣大なるを了せざるべからず。國風雅頌固已本於道、風之變也、亦皆發乎情、止乎禮樂、此所以與後世異、若乃後世之詩、則亦有當代之英氣禀識趣不同、凡流、故其摸寫物態、陶冶情性、或清或壯、或婉或嚴、品類不一、而皆條然各成一家、不可與衆作渾亂（卷十七）といひ、其與程帥書亦大に詩風の變遷を論するによりて見れば、詩文固より敎育の範疇を出でざれども、其間自ら倫理的美的史的等各種の特性を包藏し顯揚する者有るを要するなり。

彼主義により、彼實地を以て、加ふるに此讀書文藝を以てし、而して象山が敎育は成る。其効果は則ち晦庵をして陸子靜專以尊德性誨人、故游其門者多踐履之士、然於道問學處欠了。某敎人豈不是道問學處多了些子、故游某之門者、踐履多不及之（卷三十四、七右）と飽稱せしめたる者、豈偶然ならむや。

第五　政治

凡そ一個の政治の見解を問はむと要せば、先づ其國家の起源に關する意見を聽くべし。象山謂はく、（卷三十二、十五左）

民生不能無群、群不能無爭、爭則亂、亂則生不可以保。王者之作、蓋天生聰明使之統理人群息其爭治其亂而保其生者也。（中略）保民而王、信乎其莫之能禦也。

と。國家は爭鬪の社會より起り、先覺者たる君主茲に立ちて民を敎へ民を導くより成立す。當時眉山の蘇老亦切に之を論し、歐西の諸家亦多く之を唱ふ、蓋し純ら勢の上より論定せる者、人間の群集する、其性必ず爭鬪を好むと謂ふに非ず。唯私欲私見の蒙蔽既に衆人に免れず、則ち其群棲の爭鬪を生ずる亦實に免れ難きの勢なりと謂ふのみ、性や理や必然なる者有りて此の如しと謂ふに非ざるなり。是れ矛盾に陷るの嫌を避けて國家の爭鬪起原說を執るに必至の論結なりとす。若し夫れ家族起原の國家に於ける君民の關係は、更に大に道理心性の自然に愜ふ者あり。君臣の義を以て父子の親と同一程度に必然なる者と爲すを得可きは、唯這般の國に於いて

之有るのみ。是れ忠孝一致の唯我國を然りと爲す所以にして、受命放伐の論常に支那の學者間に絕えざる所由なりとす。象山謂へらく、國家の成るは勢なり、國家の繼在運進する所以亦勢に由ることなくんばあらず、而して此勢を制して理に向はしむるは即ち先覺者たる君の事即ち政治なりと。乃ち曾て一般に理勢を解して曰はく、

理勢二字、當辨賓主。天下何嘗無勢、勢出於理、則理爲之主、勢爲之賓。天下如此則爲有道之世、國如此則爲有道之國、家如此則爲有道之家、人如此則爲有道之人。反是則爲無道。（卷十二、十八左、與劉伯協書）

と。理は理想なり、勢は見在なり、見在や理想や之を活動の意味に用ゐるに於いて理勢となる。國家の運移にして若し單に勢に由らしむ可くんば則ち何の處にか人力を着けむ、唯それ理主と爲らずんは世は有道となること能はず、是れ政治の由りて起る所なり。

政治の大義安にか在る、亦唯共同生活の社會に道の行はるゝを期するのみ。魯使樂正子爲政、孟子曰、吾聞之喜而不寐。孟子所喜亦曰君將樂其益、民將被其澤、道將行於

王安石を論評す

時而已。（卷十七、二左、與張監書）其期する所既に道の行はるゝに在れば、其發する所亦道に在らざるべからず、則ち政治の極意は亦哲學に在らざるを得ず。象山が荆國王文公祠堂記に云はく、古之所謂憲章法度典則者、皆此理也。公之所謂法度者、豈其然乎。獻納未幾、裕陵出諫院疏、與公詳之、至簡易之說、曰、今未可爲簡易、脩立法度、乃所以簡易也。熙寧之政、粹於是矣。釋此弗論、尙何以費辭於其建置之末哉。爲政在人、取人以身、修道以仁。仁人心也、人者政之本也、身者人之本也、心者身之本也。不造其本而從事其末、末不可得而治矣。（卷二十右）と。政治の原繩亦必ず之を心に本づく、心とは何ぞや、即ち是れ理なり、萬物皆備はれる者なり。則ち彼が政治學は亦直に彼が哲學の上に立たざる可からず。道といひ仁といひ、而して心といふ、是れ實に孔子爲政の義に適うて、大學三綱六目の旨に同しき者なり。象山が政治の原理は茲に備はれりと謂ふべし。

哲學上に於いて象山の學說が朱晦庵との交渉によりて大に發揮せられたるが如く、政治法律經濟等濟世の實務に關する意見は、彼が王安石を批評せる諸篇によりて亦頗る其眞相を觀るべき者あり。今少しく之を記述すべし。象山の王安石を視るは朱晦庵を視るに異なり。彼に在りては心之を重んじて辭極めて之と爭ひ、此に在りては心之を惜みて辭亦甚だ激せず。祠堂記に云はく、公曰、君臣相與各欲致其義耳。爲君則欲自盡君道、爲臣則欲自盡臣道、非相爲賜也。秦漢而下、當塗之士、亦嘗有知斯義者乎。（卷二十、八左）と。而も其病を視るや、亦直に其深患に中る、乃ち語を繼いで云はく、惜哉公之學不足以遂斯志、而卒以負斯志、不足以究斯義、而卒以蔽斯義也。（上）と。云はく、公方恥斯世不爲唐虞、其肯安於是乎。蔽於其末而不究其義、世之君子未始不與公同、而犯害則異者、彼依違其間、而公取必焉故也。（上）と。眞個に千古を睥睨し表裏に洞徹するの識見。又嘗て薛象先に與ふる書に云ふ、荆公之學、未得其正、而才宏志篤、適足以敗天下。（卷十三、右）と。才宏志篤の四語、介甫亦それ地下に微笑せむか、而して象山の面目亦自ら此四句に躍如たらずんばあらず。撫州の守、錢伯同、介甫が爲に祠堂を建てむと欲して、記文の起稿を象山に依囑す、象山喜ひて之に應ず。乃ち復書して云ふ、故荆公、一指爲流俗、於是排者蜂起、極訾之言、不復折之以至理、既不足以解荆公之蔽、反堅用之心。故新法之行、當時詆排之人、當與荆公共分其罪。荆公英才蓋世、平日所學、未嘗不以堯舜爲標的。及遭逢神廟、君臣議論、未嘗不以堯舜相期。獨其學不造本原、而悉精畢力於其末、故至於敗。去古既遠、雖當世君子、往々不免安常習故之患。此學不明、至今吠聲

者日以益衆、是奚以足病荆公哉（卷九、六左）と。蓋し當時の學者司馬君實の徒を除くの他は、概ね高遠に趁りて實務に疎く、經國濟民の要事、介甫が新策の如きは、到底其得失を辨ずること能はず、乃ち囂囂として爭ふ、蓋し亦暗中の群兒のみ。是故に新法に反對し始終渝らざりしは、唯君實一人。象山蓋し朋黨偏執の迷蒙を超脱す。故に其評論斯の如し、而して其精到的確は則ち彼が實學の到達に由らずんばあらず。因りて竊に謂ふ、陸の最も善き知己は朱にして王の最も善き知己は陸なりと。

禮樂刑政論

君主の官能

或は事有輕重本末、當知所先後、禮文隳闕、其來久矣（卷十一、三右 與吳子嗣）と說き、或は風俗之由來非一日也、或覩其壞而欲齊諸其末、禁諸其外、此後世政刑之所以益弊（卷二十、十五右 貴縣重修縣學記）と論するに至りては、則ち孔子政刑禮樂の語、宛然として筆端に響くを聽く、是れ實に象山が眞面目の暴露なり。其君民の官能關係を說くを聽かば、則ち彼が理想的國家は髣髴として吾人の眼前に現ぜむとす。

君の官能に關しては、上來政治の大義を敘するの間自ら既に明なる者あらむ。曰はく、曠安宅而弗居、舍正路而弗由、豈得罪彼民哉（卷二十、六左 宜章縣學記）と。曰はく、民之於道係乎上之敎（卷二十二、十左 論語說）と。君たる者の官能甚た重きを見るべし。君民の關係に關しては則ち云ふ、無君子莫治野人、無野人莫養君子（卷八、十五右 與蘇宰書）と。國家は君の爲に存すとせる專制的主義にも非ず、亦國家は民の爲に存すとせる民主的主義にも非ざるを觀るべし。

斯く君の官能を重大にせるは、本來民の甚た幼弱なるに基つく。故に云はく、民不可使知吾道之義、而可使亨吾道之宜。使道而不宜於天下、則聖人亦烏取乎道哉（中略）若道之義、則彼民之愚、蓋所不能知也（卷二十九、七右、程文）と。又易大傳の所謂、天地設位、聖人成能、人謀鬼謀、百姓與能について論して曰ふ、雖百姓之愚且賤、亦不謂其不能而與之焉、則聖人有待於天下者亦云衆矣。然成能之功、卒歸之聖人、此聖人之所以爲不可及也。然則恃一己之智能、而謂莫己如者、豈可與論天地聖人之事哉（卷二十九、十左 二程文）と。是に由りて觀れば、象山の眼中なる民は極めて愚蒙幼弱にして、猶慈親が赤子を目するに似たる者あるなり、而も猶其意志見取を沒却するの聖人の道に非ざるを論定す。蓋し既に民を安んじ民を達せしむるを以て君の事と爲し、而も猶民の人格を認めずんば、則ち安んぞ其安と達とに在らむや、是れ明なる撞着と謂はざるべからず。猶且世の自稱英雄の一派と、歐西の偏癖固陋なる學者とは、東洋普通の政躰を以て專制政躰と目

官吏及ひ政府

し、乙は之を說明し甲は之を濫用す。末段三句、象山豈十九世紀の末葉に逆睹する所ありしか。彼が民の智愚を計量せる眞相は、次の一節の語に見はる、曰はく、夫民合而聽之則神、離而聽之則愚、故天下萬世自有公論（語錄傳子雲錄卷三十四、七左）と。其輿論政治に對する意見亦粗忖度するを得むか。

夫れ君事は彼の如く重大なり、而も君は到底大小百般の能力を具有せず、是に於いて人を用ゐるの要起る。人を用ゐるは人を知るに在り。故に象山孝宗に奏して曰はく、臣嘗謂事之至難莫如知人、事之美亦莫如知人。人主誠能知人、則天下無餘事矣（卷十八、三左剛定官輪對劄子三）と。其與李成之書には則ち云はく、任賢勿貳、去邪勿疑、豈獨爲國而然、爲家爲身、蓋一理也と、即ち是れなり。斯くして用ゐらるゝ人は即ち吏にして、吏の一系は即ち所謂政府を生す。象山の國家に於ける君民官吏及ひ政府の位地性質、是に於いて明なりと謂ふべし。

然らば則ち吏は何をか務め何をか事とすべき。曰はく、明天子之望於賢牧守者、所謂有變通之利、而無矯激之難者也（卷四、五右得解見通判）曰はく、子產曰、君子有四時、朝以聽政、晝以訪問、夕以修令、夜以安身、所以節宣其氣而勿使壅閉湫底以露其體（卷四、八左與諸葛誠之書二）と、

儒學本來の政治學

是れ吏の當に務むべき所なり。是故に象山勅局に在るの日、人の先生如見用以何藥方醫國と問ひしや、答へて曰はく、吾有四物湯、亦謂之四君子湯。或問、如何。曰、任賢、使能、賞功、罰罪と。而して吏の事とすべき所は則ち法律經濟の事たり。將に次章に於いて說く所あらむとす。

以上は象山が政治見解の要なり、吾人は正に其全く儒學の傳說を承けたるを認めずんばあらず。書經堯典に所謂、克明峻德、以親九族。九族既睦、平章百姓。百姓昭明、協和萬邦。黎民於變時雍は、正に彼が政治の大義の淵源に非ずや。舜典に所謂、帝曰、格汝舜、詢事考察、乃言底可績。三載、汝陟帝位。舜讓于德弗嗣は、正に彼が國家の起原の說明の淵源に非ずや。大禹謨の所謂、曰、后克艱厥后、臣克艱厥臣、政乃乂、黎民敏德は、正に彼が君民官吏政府の關係の淵源に非ずや。洪範に云はく、五、皇極。皇建其有極、時五福用敎、錫厥庶民。惟時厥庶民于汝極、錫汝保極と。湯誥に云はく、王曰、嗟爾萬方有衆、明聽予一人誥。惟皇上帝、降衷于下民。若有恒性、克綏厥猷后と。泰誓上に云はく、惟天地萬物父母、惟人萬物之靈、亶聰明、作元后、元后作民父母と。凡そ斯の如きは是れ皆儒學の政治見解なり。而して此精神は象山が見解に透徹せるを見る。蓋し道を以て敎を以て、上の

受命放伐論

事とし、治者の務とし、政治の根基亦教道に在らざる可からずとするは、儒學の骨髄と謂ふべき者、象山の深く之を得たるは、王介甫を評論するに於いて最も明に見るべきなり。若し夫れ受命放伐は則ち二帝三王の既に顯明なる實例を與へたる所にして、書の大半亦其辯疏に非ざるはなし。孔子泰伯を稱し、諸夏之亡を取る、微意亦見るべからずとせず。而も之に向うて大なる擧揚を爲しゝは孟子一夫之紂說に始まる。韓昌黎乃ち曾て大に伯夷を頌して其適義を稱す。象山此點に於いて未た大に辨する所あらず。儒學に於ける受命放伐の說は決して輕輕に論斷すべからざる者なり。抑放伐は變なり、變を以て常と爲すに至れるは國體然るなり。儒學を究むる者須らく其常變の際に愼まざるべからず。

禮樂道義及び法律功利

刑法の起原

第六　法律

見在は理想に似ず。何れの人か弱點なからむ、何れの世にか害惡なからむ。之を未だ發せざるに防ぐ所以の者は、則ち曰はく道義なり、禮樂なり。之を既に發せるに塞ぐ所以の者は、則ち曰はく功利なり、法律なり。是故に法律功利は其効禁遏に止まり、而して禮樂道義は其果亦勸奬に止まる。勸奬固より禁遏より高しと雖も、其用は則ち各特長あり。乃ち法律之書詳、而望之以禮樂則缺功。功利之意篤、而槩之以道義則疎

（卷三十、三有房杜謀斷如何論）

といへるは其卑高に就いて論せる者にして、君子固欲人之善而天下不能無不善者以害吾之善。固欲人之仁而天下不能無不仁者以害吾之仁。有不仁不善爲吾之害而不有以禁之治之去之則善者不可以伸、仁者不可以遂。是其去不仁乃所以爲仁、去不善乃所以爲善也。故曰、爲國者見惡如農夫之務去草焉、芟夷薀崇之、絕其本根、勿使能殖、則善者信矣。夫五刑五用、古人豈樂施此於人哉。天討有罪、不得不然耳

（卷五十五有興辛幼安書）

といへるは其特用に就いて說ける者なり。刑法の起原實に茲に存す、亦實に教道を實現するの一法にして、共和國篇の著者プラトオンが、後終に法律篇を著さゝ

迂儒の見を排す

る、を得ざりし所以亦茲に存す。故に曰はく、

古所謂賞罰者、亦非ㇾ爲ㇾ人趨ㇾ事赴ㇾ功而設也。天命有德、五服五章哉。天討有罪、五刑五用哉。其賞罰皆天理、所ㇾ以納ㇾ斯民於大中躋ㇾ斯世於大和也。此與後世功利之習燕越異ㇾ鄉矣。（卷十一、六右 與朱濟道書）

と。若し象山に向うて社會刑罰權の原由の説明を求めば、彼は温和なる純正主義を以て答と爲しいならむ。而して世漸く降り、本輕く末重く、所謂法治の主義漸く輕薄なる人心に浸潤して、天下を擧げて刻薄慘敝なる文法の社會と爲さむとす、是れ象山の辯ある所以なり。

而して一方に於いては所謂學者の世務に疎き者、或は刑法を擧げて先王の遺意に非ずと爲し、之を廢絶して乃ち道を致すべしと爲す。是れ大道廢有ㇾ仁義の前提より絶ㇾ仁棄ㇾ義、民復ㇾ孝慈を演繹する迂濶論の類のみ。象山乃ち辯して曰はく、嘗謂古先帝王未ㇾ嘗廢ㇾ刑、刑亦賊不ㇾ可ㇾ廢於天下、特其非ㇾ君之心非ㇾ政之本焉耳。夫惟於ㇾ用刑之際而見ㇾ寛仁之心。此則古先帝王之所ㇾ以爲ㇾ政者也（卷三十、二十右、政之寛猛熟先論）と。象山の見極めて穩當なりとす。舜典に云はく、象以典刑、流宥五刑。鞭作ㇾ宮刑、朴作ㇾ敎刑、金作ㇾ贖刑、眚災肆赦、怙

用刑懲獄

法治主義を排す

終ㇾ賊刑。欽哉、欽哉、惟刑之恤哉と。又云はく、帝曰、契、百姓不ㇾ親、五品不ㇾ遜。汝作ㇾ司徒、敬敷ㇾ五敎ㇾ在ㇾ寛と。二帝三王夙く已に刑あり、唯用刑の意に於いて後世俗吏と全然其撰を異にするのみ。然らば則ち用刑の注意は如何。

用刑亦これ一種の天資なり、到底文法屑屑の徒と談す可からず。象山之を解して云ふ、

不ㇾ論ㇾ其本而論ㇾ其末、不ㇾ觀ㇾ其心而遽議ㇾ其行事、不ㇾ足ㇾ以論ㇾ人。（卷八、九左 與趙推書 大に司法の事を論ず）

訟獄惟得ㇾ情爲ㇾ難。（卷八、十右、仝上）

必無訟之道、當ㇾ於ㇾ聽訟之間見ㇾ之矣。（卷九、十右 與楊守書）

用刑訟獄の事斯の如くそれ難し。之を爲すこと如何、亦唯自家胸裡の明鑑をして塵埃の蔽ふ所と爲らしめず、以て能く外界を照得せしむるに在るのみ。抑〻象山必無訟の道を解して聽訟の間に在りと爲す、言甚だ過激に失するが如しと雖も、當時豪奸相結び、風紀頽敗、正に一大刷新を要するの形勢、彼故に此に及ぶ。蓋し亦其實務に當り世事を濟するの資有りしを證す。

吾人は今復象山が他を批評するの語によりて、反面より彼が法律に關する意見

を窺ふべし。商鞅を評して云はく、商君說孝公以帝道王道、與今人言禮義相似、其實是講貫得一項必不可行之說耳（卷四、二十左、興周廉夫書）と。王安石を評して云はく、讀介甫書見其凡事歸之法度、此是介甫敗壞天下處、堯舜三代雖有法度、亦何嘗專恃（語錄李敏錄卷三十五、十六左）と、その本末輕重の辨を失するを非とするなり。抑、從來法を謂ふ者、多く唯刑法について云云するのみ。而も象山介甫を評するに於いて、乃ち一般法律に關して論する所あり。其法治主義の絕對なる反對者なるは、其哲學を知る者の固より既に豫想する所、而して這般の言說更に一層之を明確にす。彼は啻に法治主義に反對せしのみならず、亦實に繁禮虛儀に反對す、商君を評する言即ち之を證示す。但彼の反對は繁と虛とに止まり、決して實を存する禮儀其者に及ばざりしは、呂伯恭に與へて、その憂に居りて徒に授くるを諫むる書によりて見るべしと爲す。

第七　經濟

經濟問題學問上の地位

夫の政治に於けるが如く、夫の法律に於けるが如く、吾人が象山の經濟意見を觀察する、決して之に於いてアダムスミスヲグチルの體系を要むるを須ゐず、唯象山が凡そ這般の實際問題に關して、如何なる熱眼を以て之を看しかを見れば足れり。乃ち先づ其經濟問題の學問上の地位に關して、如何に流俗學者と其見を異にせしかを見むか。彼曰はく、

王安石の新法を論ず

世儒恥及簿書。獨不思伯禹作貢成賦、周公制國用、孔子會計當、洪範八政首食貨、孟子言王政亦制民產正經界、果皆可恥乎。（卷五、十三右　與趙子直）

噫何ぞ其辯の快にして其理の明なる、眞個に人をして一言を贊するを得さらしむる者。蓋し無識の學者、往往財利を談し實務を語るを恥ち、金穀を知らず實事に關せざるを以て自ら高しと爲す、儒生迂濶の譏固に之に職由す。象山又王安石が新法を評して曰はく、

（上畧）惟韓魏公論青苗法云、將欲利民反以害民、甚切當。或言、介甫不當言利。夫周

經濟上の劃策

官、一書、理財者、居半、宰冢制國用、理財正辭。古人何嘗不理會利。但恐三司等事、非古人所謂利耳。不論此、而以言利遇之、彼豈無辭。語錄

と。吾曩に象山を以て介甫の知己なりと爲せり、今に於いて益其然るを知る。彼實に當時天下の形勢を觀、而して文章經術の士が、年來畢竟何の書をか讀むの疑なき能はず。乃ち其激發するや、石子重を輓するの詞中に在りて猶且卷二十五

關征且損數、孰謂儒術迂。

憤悱斯の如きの句あるを致す。

然らば則ち其實行は如何。彼不幸にして志を當世に得ず、其經綸を行ふこと僅に一地方に於いてすること能はずして逝けり。而も猶時務經濟の策に於いて、大に心目を傾倒せるは、歷歷として之を其遺文に徵すべし。與陳倅書二篇卷七、與張春卿書、與宋漕書卷八は、共に民の弊れて而して吏の姦なるを痛論し、與陳敎授書卷八は社倉を廢して平糴一倉を置くの議を建て、與蘇宰書卷八は屯田の弊、賣田の漸を論じて、異時有錢以買者、必兼并豪植之家也。奪良農固有熟耕之田、以資兼并豪植之家、而使之流離困窮、銜冤茹痛、相枕籍而爲溝中瘠、此何策也卷八、十五右と說き、與趙子直書卷五及ひ與辛幼安書上卷は大に文書の濫、姦吏の贓瀆虐民を論じ、與陶贊仲書卷十五には當時工藝の漸く精しからずして、眩鬻の惡風次第に增すを嘆し、上の之を坐視すべからざるを說きて、百工之事皆聖人作也、然聖人初尙此、其能之也、每以敎之、不以加之卷十三左五と論し、與薛象先書二篇卷十五は大に當時經濟社會紊亂の狀、人民の疾苦を叙して、救濟の道を講じ、銅錢納稅を禁し兌換によりて州郡の胥吏が其利を壟斷するを慨し、與章德茂書五篇卷十六の如き悉く是れ經濟の談、轉運の民產に及ぼす得失、糴糶平倉の事業利弊を詳論し、與張元善書二篇上は吏の奸と訟の得失とを論じ、與豐叔實書、與鄧範書は時事、民財の究困を叙して、之に對する策を講せり。以上は唯その一斑のみ、象山の經濟に於ける見解は實にその著述の主なる一部を成せる者なり。

平倉設置の意見

象山が經濟上の劃策の尤も著しき者の一は、平倉設置の意見なり。與黃監書及ひ與陳敎授書によりて其梗概を窺ふことを得べし。蓋し當時郡に社會の設ありと雖も、其收納單に一定人爲の常額に制限せられしを以て、運用の實際は頗る膠柱的結果を免れざりき。象山乃ち策を建てゝ曰はく、

愚見以爲、莫若平糴一倉以輔之、乃可長久。平糴則可獨行也。社倉施於常熟鄉、乃

可、久田不常熟則歉歲之後無賑卹。(一遇歉歲則有散而無斂來歲缺種種時乃無以賑之。卷八、五右與陳教授書)平糴則豐時可以受農民之粟無價賤傷農之患。歉時以摧富民閑廩騰價之計(中畧)析所糴爲二、每存其一以備歉歲代社倉之置。卷九、十一與黃監書

と。想ふに當時交運の不便なる、河內凶なれば則ち其民を河北に移す底の國勢に在りては、屯倉の設は極めて切要なる制度たり。而して象山乃ち意を玆に致して、其制度に改良を加ふ、烱眼敏腕を以て稱せざる可からず。

其理財を論ずるや、亦其政治法律を論ずると同しく、毎に根本に遡らむことを要とす。今時農民率多窮困、農業利薄、其來久矣。卷十、四右與張元鼎書と說き、賑濟之策、前人之迹可求也。然無得乎其本、而惟末之求、則其策有時而窮。卷二十一、五右問賑濟と論ず、亦其哲學の自然後件たるべし。

之を要するに象山が經濟意見は、

第一、干涉政策を取れり、是れ上の務たりとするなり。

第二、平均政策を取れり、大農資產家の跋扈は其最も厭忌せる所。

第三、消極的勤儉政策と同時に、積極的生產政策を取れり。彼が種種の劃策は之が

爲に出でたり。

第四、匡濟政策は力めて其弊の本源に遡らむことを要せり。故に吏の姦を惡むこと甚たしく、亦王安石の財政策を以て猶形象算數の末に趁る者と爲せり。

象山が經濟意見は粗、此四綱に節するを得むか。的に是れ醇乎たる社會政策。

陸象山の哲學既に彼が如く、敎育既に彼が如く、而して其政治法律經濟に對する見解亦此の如し。孰か之を目して實務に疎なりといふ、孰か之を呼ひて空禪に僻すと爲す。吾人は往往所謂儒者に於いて、空疎浮華寧ろ大に聖人の事聖人の道に遠き者有るを見る。吾人は象山に於いて、寧ろ其儒學の眞相を得たる、流俗學者を拔くこと數等なるを見る。夫れ哲學以て自我を如何にすべきかを覺り、敎育政治法律經濟以て衆我を如何にすべきかを覺る、而して其極致は即ち天地の化育に參贊する所以なり。吾人は既に陸象山が敎學の大綱を看たり、今や其歷程を尋繹して、以て彼が上下千載の知己を歷訪せむか。

大丈夫當究大塊所有之學以立大塊所無之言　佐久間象山

吾不飲酒、不廢業、不廢業、德斯進矣。吾不飲酒、不驕奢、不驕奢、德斯進矣。吾不飲酒、慢心不生、淫心不生、不慢不淫、德斯進矣。噫、嘻日月逾邁、玩愒廢弛、驕奢日長、慢淫日生、與腐草同澌盡泯滅、吾焉得爲人耶。則吾甘酒、而業不加脩、德不加進、不得以爲人焉。夫酒之失德如此。吾不飲酒、則德進矣、業修矣、吾庶幾得以爲人也夫。書以自警。戊戌孟春、襄時年二十又八。　春日潛庵

明堯舜孔子之道盡西洋器械之術　横井小楠

歴程

第一　先驅

改革者とは何ぞや

英邁卓犖の士は、一生の樹立必ず千載に特視す。彼は時勢の見に非すして、乃ち時勢の母なり。能く理想し、能く實現す、則ち見在が其理想に適應せざるに會ふや、其胸邊に燃ゆる情、其腔裡を溢るゝ力は、到底彼をして晏如として生涯を了し、甘んじて見在に殉することを能はざらしむ。乃ち其肝胆を披き其心血を瀝ぎ、或は雲蒸龍變の偉觀となり、或は南風東陽の和育となり、言を立て功を立て、而して德を立て、到底自個の方寸より湧出する理想を實現せずんば休まざるなり。若し夫れ時利あらず雖逝かず、大起風りて雲飛揚するの好運に際會する能ずんば、彼は寧ろ窮途に斃るゝあらむのみ、安んぞ能く皓皓の白を以て世俗の汝汝を蒙らむや。後人乃ち成敗の跡に眩して、甲を目して改革者と爲し、乙を目して革命家と爲す。若し勢力に顯潛の別

あり、而も猶兩ながら仕事を爲すの能たるを失はざるを知らば、革命家の改革者と同しく是れ徒に生れ徒に死する者に非ざるを了せむ。彼は到底人間の歴史に於いて乃至宇宙の記錄に於いて自個の地位を占め得たる者なり。彼は千万世を閲して而も遂に死せざるなり。

朱晦庵は千古の偉人なり、吾之を認む。陸象山は千古の偉人なり、吾之を認む。王陽明も亦千古の偉人なり、吾亦之を認めざるを得ず。而も陸を以て朱に反抗せむが爲に起れりと爲し、王を以て陸を紹述せむが爲に出でたりと爲す可ならむや。世の歴史的攷察を唱道する者、往往人を以て人に隷し、人の自由を沒却して、以て科學の本旨に副へりと爲す、墮なりと謂ふべし。蓋し獨立は孤立に異なり。人は生まる、則ち既に孤立すべからざる運命を有す。宇宙や彼は其間に實在すれば、過去や世界や一切の實在は皆能く彼か師友たるべき者、即ち此點に於いて彼等の間に沒すべからさる關係あるを知る。此關係は各人の外面的關係なり、而して是れ即ち吾の名つけて歴程といふ所の者なり。

宋代の獨立なる一個の巨人陸象山が性行事業及ひ懷抱の大體は、上來の叙述略、之を明にするを得たり。內面的關係より彼を顯現することは是に於いてか足る。而も充分に彼を識らむと欲せば、亦併せて其外面的關係を觀察せむことを要とす。之を別ちて三區と爲す、彼に先だてる時代其一なり、彼と共なる時代其二なり、彼に次げる時代其三なり。第一は則ち先驅の諸家を覽るを要し、第二は則ち紫陽を彼と比較的に考察するを要し、第三は則ち彼の門下世を隔てたる餘姚國を異にせる日東の諸家に就いて、其彼との關係を觀るを要す。是故に歴程と題して陸象山が外面的關係を識らむと要する本篇は自ら五章に分るゝなり。

頭を回らせば宋代儒學の特質たる批評的抽象的思辨は、發して周濂溪の大極說と爲り、邵康節の先天數理となり、張橫渠の一大淸虛と爲り、異采奕奕、燦爛として眼を奪ふ者ありと雖も思辨の高尙逸絕なる、時として聖學の傍徑に奔逸して、稍〻實學に遠さかるの憾なき能はす。則ち思想界の一大現象として優に後人の討究的精神を皷舞すと雖も、所謂斯問題の解釋に至りては、或は主客地を易へたるの虞なきと能はざりき。是時に當り、溫潤玉の如き質、和薫春の如き風を以て、端然藹然本末輕重の別を明にし、漸く流れむとするの運を制して正に復歸せしめむと勉めしは、實に

程明道及ひ程伊川

河南の程明道其人なり。

全祖望曰はく、大程子之學、先儒謂其近于顏子、蓋天生之完器、然哉、然哉。故世有疑小程子之言、若傷我者、而獨無所加于大程子（宋元學案十三、一左）と。黃百家も亦曰はく、顧二程子雖同受學濂溪、而大程德性寬宏、規模濶廣、以光風霽月爲懷。小程氣質剛方、文理密察、以峭壁孤峯爲體。其道雖同、而造德自各有殊也（全上四右）と。蓋し明道伊川同しく宋學抽象的思辨の旺盛なる時代に出て、同しく學び同しく處し、其學遂に大差あるに至らず、從うて遊ぶ者も亦兩子を兼ねさる者少かりしも、學風の支流は往往其言說に因せずして其氣風に由ること、儒學の本質上殊に其傾向の大なるを見る。則ち二子氣質風尙の別異は、頗る宋代の學史に於て重要なる効果を有せずんばあらず。吾人は今明道を識り、伊川に參して、其後代の二大派朱陸二氏に及ぼせる影響を觀むとす。

明道の小傳

明道性溫厚、從遊數十年に亘りし者と雖も、未だ嘗て其面色の變を見ず。出でて守たるや、民を視ること子の如く、民の事を以て縣に至る者あるときは、必ず孝悌忠信を以て之に敎誨す。入りて朝に立つや、日官正午を報じて始めて退く。中人相謂うて曰はく、御史不知上未食邪と、時に太子中允監察御史に官す。乃ち務めて誠意を以て人主を感動す、曰はく人主當防未萌之欲と、神宗俯身拱手して曰はく、當爲卿戒之と、其誠心を以て重んぜられしを觀るべし。當時王安石亦朝に立てり、彼本明道と善し。一日事を論じて激怒色厲。明道即ち平氣溫言して曰はく、天下事非一家私儀、願平氣以聽と、安石終に媿ちて屈す。明道曰はく、興利之臣日進、尙德之風浸衰と、安石是に於いて遂に合はずと雖も、猶其忠信を敬して深く怒らず。其風采洵に想ふべし。神宗の元豐八年六月十五日、五十四齡を以て卒す。

明道の敎學

吾人は今明道の敎學を窺ふに際して、直に其口より聞くの近易を見る。明道の學は理氣抽象の說少くして心性行實の論多く、定性を致すに誠敬の要を說き、其根基唯徧滿普關の天理を豫設するに止まること、頗る所謂宋學常徑の外に出づ。乃ち曰はく、詩書中凡有一箇主宰的意思、皆言帝。有一箇包涵徧覆的意思、則言天。有一箇公共無私的意思、則言王。上下千百歲中、若合符契。言天之自然、謂之天道。言天之賦予万物者、謂之天命（宋元學案十三、十四左）と。是れ明道が世界觀に於ける唯一の原理のみ。天は則ち一切の恒常の源なり、或は帝と謂ひ、或は王と謂ひ、天道と名つけ、天命と呼ぶ、皆この恒常的原理の發現のみ。而もこれ實に人の爲に設論せる者、乃ち直に人事の上に進み

て論じて曰はく、問心有善惡。曰、在天爲命、在義爲理、在人爲性、主于身爲心、其實一也。心本善、發于思慮則有善有不善。若既發則可謂之情、不可謂之心。（全上十七左）と。又曰はく、只心便是天、盡之便知性。知性便知天、當處便認、不可外求。（全上十七右）と。彼實に儒學の固有なる性善說を明擧して以て道の根據と爲す、其果は盡心便知性の直截簡易に到らざるを得ず、而して其一轉些動を爲すや、便ち心即理に到る者なり。羅欽順は困知記に於いて論じて曰はく、程子言性即理也、象山言心即理也（卷二、十八右）と、乃ち繫辭性命の說を引いて前說の可を論じ、洗心易心說心を揭げて後說の不可を說き、孟子の理義之悅我心、猶芻豢之悅我口と言へるを擧げて以て象山を駁せり。而も象山に在りて其本心私心の辨、性習の別に關する見解を視、明道に在りて其識仁定性の二篇が如何に進學の工夫を說けるかを了せば、羅欽順か一偏の見は直に知らるべし。定性書の要に云はく、（宋元學案卷十一、十二、左右）

所謂定者、動亦定、靜亦定。無將迎。（中略）夫天地之常、以其心普万物而無心。聖人之常、以其情順万物而無情。故君子之學、莫若廓然而大公、物來而順應。（中略）人之情、各有所蔽、故不能適通。大率患在于自私而用智。（中略）今以惡外物之心而求照無

物之地、是反鑑而索照也。（中略）孟氏亦曰、所惡于智者爲其鑿也。與其非外而是內、不若內外之兩忘也。兩忘則澄然無事矣。無事則定、定則明、尙何應物之爲累哉。

若し夫れ識仁篇は則ち其全文を揭げざるべからず。（全上五左）

學者須先識仁。仁者渾然與物同體、義禮智信皆仁也。識得此理、以誠敬存之而已。不須防檢、不須窮索。若心懈則有防心、苟不懈何防之有。理有未得、故須窮索、存久自明、安待窮索。此道與物無對、大不足以明之。天地之用皆我之用。孟子言萬物皆備于我。須反身而誠、乃爲大樂。若反身未誠、則猶是二物有對、以己合彼、終未有之、又安得樂。訂頑意思、乃備言此體、以此意存之、更有何事。必有事焉、而勿正心、勿忘、勿助長。未嘗致纖毫之力、此其存之之道、若存得、便合有得。蓋良知良能元不喪失、以昔日習心未除却、須習存此心。久則可奪舊習。此理至約、惟患不能守。既能體之而樂、亦不患不能守也。

是に因りて觀れば、明道の學と象山との關係は多言を須たずして明なり。明道曾て性善に就いて複雜なる解說を試たることありしも、其歸は到底孟子以上の說に在らずんばあらず。是れ彼が敎學大綱の一なり。反身而誠といひ、此理至約といふ、防檢

窮索を須ゐす、唯勿懈と說く、其二なり。定靜にして內外を絕せることと、其三なり。吾人は晦庵の評語を儆りて、更に明道象山及ひ晦庵の關係を詳にすることを得べし。曰はく、蓋把持之存終是人爲、誠敬之存乃爲天理、(中畧)存正是防檢克己是也、存正是窮索擇善是也。若泥不須防檢窮索、則誠敬存之、當在何處、未免滋高明之惑。子靜專言此意、固有本哉(全上六右)と。黃宗羲は更に此評語を評して曰はく朱子得力于伊川、故于明道之學未必盡其傳也と。吾人は是に於いて明道の陸學に於ける地位を明にするを得たりと謂ふべし。

其他或は聖賢千言萬語、只是欲人將己放忘約之、使反復入身來(全上二十一右)といひ、或は人心莫不有知、唯蔽于人欲則亡天德也(全上二十四左)といへるは、象山の習欲說の面影を留め。或は學者不必遠求近取諸身、只明人理、敬而已矣、便是約處(全上二十三左)といひ、或は良知良能、皆無所由、乃出于天、不繫于人といひ、更に進みて浩然之氣乃吾氣也、養而無害則塞于天地、一爲私意所蔽、則欿然而餒、知其小也(全上二十三右)といへるは、羅欽順の見解に於ける性即理が漸く心即理に近つけるを證すべく、萬物皆備于我、不獨人耳、物皆然、都自這裏出去、只是物不能推、人則能推之(全上二十七左)と曰ふに至りては、則ち實に陸を軼して遙に王が凡理說を憶はしむる者あり。若し夫れ明道が陳治法十事は、神宗遂に用ゐる能はざりしも、彼が君子儒としての資格の優なるを見るべくして、正に象山の五劄子と相對すべき者。

伊川と晦庵

伊川に至りては光芒銳利、剖析更に精を加ふ。而も明道に比して(一)氣を以て善不善ありと爲し、及ひ(二)格物を以て幾分か歸納的に理を究むる所以と爲す。此二點に於いて漸く朱に近つけるを見る。乃ち曰はく、氣有善不善、性則無不善也。人之所以不善者、氣昏而塞之耳(宋元學案卷十五、十左)と。曰はく性無不善、而有不善者才也。性即是理。(中略)才稟于氣、氣有清濁(全上)と。これ以て第一項を知るべし。曰はく、窮理亦多端、或讀書講明義理、或論古今人物別其是非、或應接事物而處其當然、皆窮理也。(中畧)若只格一物便通衆理、雖顏子亦不能如此。道須是今日格一件、明日格一件。積習既多、然後脫然有貫通處(十八左)と。是れ明に歸納的傾向を表言せる者にして、朱晦庵が所謂格物に至りて其極に達せる者なり。而も伊川の所謂格物は其實窮理なり。曰はく格猶窮也、物猶理也。猶曰窮其理而已矣。(中畧)物格者適道之始、與欲思格物則固已近道矣。是何也、以收其心而不放也(卷十五、十八左)と。是故に黃宗羲は曰はく、收其心而不放、即是敬。朱子掇敬于格物之前、已

失伊川之旨と。蓋し伊川已に一人之心即天地之心、一物之理即萬物之理といふ、然らは則ち心も亦物なり、故に心を窮むる亦是れ究理格物の一法ならざるべからず。是故に伊川の所謂格物は、晦庵の所謂格物の如く、全然歸納的の者に非さるに似たり。君子之學將以反躬而已矣。反躬在致知、致知在格物と曰ひ、致知在格物、非由外鑠我也、我固有之也。因物而遷、迷而不悟、則天理滅矣。故聖人欲格之十八左といふ、以て見るべきなり。況んやその聞見之知、非德性之知也。物交物則知之非內也。今之所謂博物多能者、是也、德性之知不假見聞左十四といふに至りては、明に彼が直覺を重んじて道の根據を之に求めたるを見る。顧ふに曩の所謂歸納的傾向は必ずしも此に撞着する者に非ず、先天の賦性を直覺するは則ち發程の點根據の地を與へ、後天の經驗より歸納するは則ち行程經路を示す。甲に偏して乙を棄つる者は禪なり。象山の學尤も甲を重んず、而も乙は全く之を棄つる者に非ず。伊川の說甲を重んずるは則ちこれありと雖も、亦漸く乙を重んず。而して其極端は則ち朱なり。全く乙に偏して甲を顧ざる者は歐西の倫理學に往往見る所。要するに伊川が此等の點に於いて明道よりも陸に近づかずして朱に近づけるは明確なりとす。

伊川の性說

伊川の知行合一說

伊川固より性善說を取る者、而も本來の善より微分的の變遷を以て漸く惡に至るを說くこと、彼に於いて詳細となれり。季明問、雜說中以赤子之心爲已發、是否。曰、已發而去道未遠也。曰、大人不失赤子之心、若何。曰、取其純一近道也。曰、赤子之心與聖人之心若何。曰、聖人之心如明鏡止水。七左又嘗て曰はく、性相近也、習相遠也。性一也、何以言相近也。曰、此只言氣質之性也二十四右と、以て見るべし。其性善を說くや則ち曰はく、稱性之善謂之道、道與性一也。以性之善如此、故謂之性善。性之本謂之命。性之自然者謂之天。性之有形者謂之心。性之有動者謂之情。凡此數者皆一也。聖人因事以制名、故不同若之而後之學者隨文析義、求奇異之說、而去聖人之意遠矣二十三左と。大程亦これと同一の語あり。心即理は性善說の必然後件にして、性即理と心即理との區別は已に拘泥に失すること亦以て見るべきなり。

明道に於いて餘姚の凡理說の萌芽を發見せるが如く、伊川に於いて既に知行合一說の搖藍を見る。如眼前諸人、要特立獨行、悠不難得、只是要一個知見。難人只被知見不通透。謂要力行、亦只是淺近語。人既能知見、豈有不能行。一切事皆所當爲、不待著意做、纔著意便箇私心、這一點意氣、能得幾時了左十六と。黃宗羲評して曰はく、伊川先生已有

知行合一之言矣と、蓋し、これ亦性善心即理の說中に豫想せらるれども、明明白白地に之を表言せること、夙く既に晦庵以前の宋儒に在りしは、亦注目を値すと謂ふべし。

伊川の氣風は大に明道と異なり。年十八にして闕下に上書し、仁宗に勸めて世俗の論を黜け王道を以て心と爲さむことを請ふ。英邁俊烈なる風相以て想見すべし。徽宗の大觀元年九月庚午卒す、年七十五、明道に後るゝこと二十二年。

明道の門下に謝上蔡あり、黃宗羲は以て程門の第一と爲す。之を楊龜山に比すれは、謝は剛にして踔厲風發、楊は柔にして優容平緩。而して其學風は一は陸に赴き、他は朱に赴く。晦庵その語錄に跋して曰はく、先生學于程門、篤志力行、于諸公間、所見最爲超越（宋元學案卷二十四、十六右）と。上蔡曰はく、所謂有知識、須是窮物理。（中略）所謂格物窮理、須是認得天理始得。所謂天理者自然底道理、無毫髮杜撰。今人乍見孺子將入于井、皆有怵惕惻隱之心、方乍見時、其心怵惕即所謂天理也（全上三左）と。曰はく仁者何也、心是已と。曰はく仁者天之理也と。曰はく天理者人之理也、循理則與天爲一、我非我也、理也、理非理也、天也と。而して其工夫を說くや則ち曰はく、聖門學者、大要以克己爲本、克己復禮無私心

則天矣（公上三左）と。彼が漸く明道の敎學に於ける簡易直截なる實踐的方面を發達し來りて、以て後年陸氏の學の素地を作せるの狀、頗る玆に見はる。是故に黃宗羲は曰はく、上蔡在程門中英明果決、其論仁以覺以生意、論誠以實理、論敬以常惺惺、論窮理以求、是皆其所獨得以發明師說者也と。而して晦庵は更に曰はく、上蔡說孝弟非仁也、孔門只說爲仁、上蔡却說知仁、只要見得此心便以爲仁。上蔡之說一轉而爲張子韶、子韶一轉而爲陸子靜（十六左）と。晦庵の所見既に一偏を以て正鵠を失すと雖も、上蔡が學問の趨向亦以て見るべし。

伊川龜山の門下に王震澤あり。乃ち更に一歩を進めて曰はく、致知之要宜近思且體究。喜怒哀樂未發謂之中（宋元學案卷十九、三左）と。曰はく、心上一毫不留、若有所樂則有所倚（全上二）と。是れ明に明道が定性書の意を承けて、象山の工夫の端を啓ける者。曰はく、己之心無聖人之心、萬善皆備。故欲傳堯舜以來之道、擴充是心焉耳（全上二）と。看よ是に至りて性善說は一轉して心善說と爲り了せるを、性即理や心即理や由來氷炭の關係ある者にあらず、吾人は決して震澤が奇矯を怪しむを須ゐさるなり。若し夫れ彼が人の仁人心也、而又曰以仁存心、何也と問へるに答へて、觀書不可梏于文義、以仁存心、但言能

體仁耳といへるに至りては、實に象山の音容に髣髴たるを認めずんばあらず。蓋し震澤業を龜山に受くと雖も、其志氣雄邁蠹魚と角逐する腐儒の類にあらず。高宗親征して蹕を平江に駐むるや、進謁して曰はく、臣謂帝王之學當與世儒之學異。世儒之學、往往于經世大法莫之察也。帝王之學、在措諸事業。此其所以異也（上一句）と。高宗輔臣に語りて曰はく、蘋起草茅而議論若素宦于朝者。此通儒也と。乃ち進士出身を賜ふ。彼蓋し弱冠既に儒風の衰弊に着目す。世の泛泛たる者空文詞章の間に彷徨して、儒學本來の道に遠さかるを匡救するの任漸く託有るを見るなり。

震澤より再傳して林艾軒あり。生涯書を著さず、唯學者に口授し、心通理解せしむ。嘗て曰はく、道之本體全于太虛。六經既發明之。後世註解已涉支離。若復增加。道愈遠矣と。又曰はく日用是根株、言語文字是注脚と。彼固より碩儒に非ず、其說く所寧ろ偏固の感なき能はず、而も謝王以來の流を汲みて、世塵の汚濁を之に洗ふの一人なることは明なり。其自喻の詩の如き殊に趣の長きを覺ゆ。曰はく、

修水佳人白玉蘭。　花前何似妾容顏。　從來未省傷春意、　猶自樓頭畫遠山。
莫恠騷人太頡頏。　曾聞阿母語劉郎。　神仙本是無言說、　尸解由來最下方。

而して之に次いで起れるを金谿陸氏の家學と爲す。全祖望曰はく、三陸氏之學、梭山啓之、復齋昌之、象山成之と。梭山これ樸直質實の人、其言皆日用に補あるを期す。著す所居家正本、居家制用あり、又朱晦庵に與へて太極を論じ、太極圖說の通書に類せざるを論ずる書あり。居家正本は世人子孫を愛して義理を談せず、還りて名利を說くの弊を極論し、場屋科舉は人に在りて得難く、孝悌忠信の己に在りて得易きに若かざるを痛說す。居家制用には經濟四疇居家の七病を擧ぐ、皆日用の事項なり。此日用行事の實地上より進學の端を啓くの風は、陸學の當時に特色ありし所以の一にして、復齋に至りて更に精密なる表言を得るに至れり。復齋の傅子淵に答ふる書に曰はく、近來學者多自私欲速之說、又惑于釋氏一超直入之談、往往棄日用而論心、遺倫理而語道と。張敬夫に與ふる書には則ち曰はく、聲氣容色、應對進退、乃致知力行之原。不若是而從事于箋註訓詁之間言語議論之末、無乃與古之講學者異與と。章彥節に與へては則ち曰はく、離形色而言性、離視聽而言仁、非知性者と。蓋し訓詁の弊あるや、性理の說起り、性理空虛に趨るや、常事實行の論出づ。陸氏の學は正に此境に在る者なり。而して實行と性理とを統合して、一方には大に簡易直截なる心理を說き、一方に

復齋の人物

は日常切實の行事に當てたる者は象山なり。而して其完全なる公式を得たるは則ち餘姚の知行論なりとす。黄東發曰はく、復齋之學、大抵與象山相上下。象山以自己之精神爲主宰、復齋就天賦之形色爲躬行。皆以講不傳之學爲己任。皆謂當今之世舍我其誰。掀動一時、聽者多靡。所不同者象山多怒罵、復齋覺和平耳と。全祖望は曰はく、東萊謂復齋家庭講學、和而不同、則固有不盡諧于象山と、これ固より當然の事のみ。

蓋し陸氏の家學、兄弟互に師友となり、休暇には子弟と共に場圃に適きて射を習ふ。復齋曰はく是固男子之事也と。而して里中の士、始めて弓矢を鄙みて武夫の末藝と爲すの陋風を絶す。又父の事を繼ぎ、先志を繹ねて禮儀を修明し、一家友弟の風、鄉社に被り、天下に聞ゆ。其屬纊の日、晨に興きて牀土に坐し兄弟と語る、猶天下の學術人才を以て念と爲す。少らくにして襟を正し、端臥して逝く。呂東萊其墓に志して云はく、先生勇于求道之時、憤悱直前、蓋有不由階序者。然其所志者大有所據者、實公聰並觀、却立四顧、弗造于至平至粹之地弗措也と。平生貧に安んじ命を知るを以て心術の鍊磨と爲す。柴必勝に與へて曰はく、貧者士之常、吾友能安之、則尊幼無不安者。吾心微有不可安、則過自此起矣。天命固不可損益、但自失其本心耳と。劉潙叟に與へて曰はく、

不知命無以爲君子、此意不可不先講習、習到臨利害得失無憂懼心、平時胸泰然無計較心則眞知命矣と。彼が學は實に大丈夫を以て期せし者、象山義利の辯の鋭甚なる亦これと同根。故に又用を目的とす、則ち沈叔晦に與へて曰はく、有終日談虛空語性命而不知踐履之實、欣然自以爲有得、而卒歸于無所用、此惑于異端者也と。彼が金溪の宰に與へて兵戰營寨糧食等の事を論じ、策問に於いて漏刻を詳說するが如き、皆用を重ずるに出づ。是故に其主義亦大に俗儒と撰を異にす。道者古今之正權者道之用也。權之所在即道之所在、又焉有不正者といふに至りては、活潑潑地直に世事の活劇に躍らむと欲する者學是に至りて始めて活用を庶幾すべきなり。乃ち竊不自揆、使天欲平治天下、當今之世舍我其誰。苟不用于今、則成就人才、傳之學者。（與士順書）當日の雄志施すに所なく、鵬翼終に伸ぶるを得さりきと雖も、意氣千秋言言風霜を挾み、今に於いて直に人を壓するの慨あり。彼亦大に恨む所なかるべきか。

人の思想は獨立ならざるべからず。改革家とは自家獨立の思想を披瀝して之を行實に施せる者の謂のみ。我陸子靜の如き即ち其人なりとす。吾每に英雄を執り來りて悉く是れ時勢の權化なりと爲す者を陋とす。人にして勢に殉ずるか、何ぞその

人たるに在らむや。若し一切の豫言を以て歴史によりて爲さるべき者なりと爲さば、豫言者の尊重は果して那邊に在りとするか。然りと雖も獨立は孤立と區別あり、彼亦强ひて孤立するを要せざる可し。明道伊川より上蔡震澤艾軒を經、而して梭山復齋に至る、一方に於いて楊龜山羅從彦李侗を經て遂に朱晦庵に至るに對し、次第に儒學の一生面を發揮し來たるの狀、粗〻上來を以て窺ふべしとせむか。象山出でて始めて陸學あり、晦庵出でて始めて朱學あり。彼等は人なり、各個獨立の理想を有す、而して其創始の點偶〻多少の衝擊を免れず。其雲蒸龍變、巖を嚙み溪に咽ふの偉觀は則ち之を次章に顯現せむか。

第二　紫陽

朱陸異同の細目

朱陸の異同を叙するに於いて、吾人は先つ其細目を列擧し、而して後其本源由來を究遡せむとす。

太極の見解

第一。太極の見解　朱の太極が學問上の第一義にして、陸の太極は單に論理的の第一義なる事。甲は實地的即ち儒學的旨義を有せずして、乙は之に反する事。無極而太極說に關しては、朱は以て聖學の遺意なりとし、陸は之に反する事。凡そこれ既に教學篇の第三章第一節に詳說せる所、今再述を要せず。太極に關する見解の差違は亦皇極に關する見解の差違を生ぜり。則ち陸は漢儒以來傳ふる所に隨うて皇極を以て大中と爲し、而して朱は則ち曰はく、皇者君之稱也、極者至極之義、標準之名、皇建其有極云者、言、人君以其一身而立至極之標準於天下也（學蔀通辨卷下十三左）と。是れ各其見る所の太極の極を以て皇極の極を解せる者なり。

理の見解

第二。理の見解　象山が理を說く、其太極と同しく、大旨は空邈捉雲底の幽玄に在らずして、單に學問上の構說に向うて論理的の根據を與ふるに在り。紫陽の理に至

りては則ち大に之に異なり、無極而太極は彼が第一義とする所、其分れて兩儀となるや、無形の本躰は即ち理にして、有形の現象は即ち氣なり、理氣以て天地を成し、以て人を成し、乃ち以て世界を成す。理は普遍的なり、平等的なり、統一的なり。氣は特殊的なり。差別的なり。是故に吾人は個個の事物に於いて氣を見るべく、萬象の倚係を約して理を知るべし。則ち彼が答陸子靜書に曰ふ、道理雖極精微、然初不在耳目聞見之外、是非黑白只在面前。此而不察、乃欲別求玄妙於意慮之表、亦已誤矣と。事物は氣の寓する所、氣を離れて存せざる理は、亦事物を離れて存する能はずといふの意なり。之を要するに象山の理は道の屬性なり、紫陽の理は氣の本體なり。本體對現象の觀念は紫陽に於いて始めて見る所にして、象山に於いては唯主格對屬性の觀念あるのみ。既に氣を離れて理なしと爲すと雖も、所謂理氣合一の見解は到底之を紫陽の學說に求む可からず、彼が哲學は到底一系の二元論たるを免れず。紫陽や象山や心性の說明は其根據を理の見解の上に置くは則ち一なり。是を以て紫陽の這般二元的見解は直に亦其心性の二元的見解を生ず。

第三。心性の見解　晦庵乃ち心を說いて曰はく、心含理與氣。理形而上、氣形而下、心也者形而上下之間と。蓋し宇宙の既に理氣の成す所たるが如く、人亦理氣の成す所、心亦理氣の成す所。謂へらく、吾人は人に於いて亦心に於いて、理氣の剖析を爲すを得べしと。乃ち心を剖析して道心人心と爲し、人を剖析して德性と精神とをなす。今上來太極の見解より一貫せる晦庵が二元的原理が、心性に人物に種種の發現を爲すに隨うて、之を實踐哲學と純正哲學とに配し、以て其系統所屬を表示すること左の如し。

純正哲學原理　一　實踐哲學原理

宇宙（無極而太極）
- 無極　理　義理　德性　仁義禮智　道心
- 陰陽　氣　氣稟　精神　虛靈知覺　人心

心

今試に參照として、象山の一元的原理を同樣の系統に組成し、以て之を對比せば正に左の如くなる可し。

純正哲學原理　一　實踐哲學原理

宇宙——太極　理　中　性　仁義禮智　本心—心
習　利欲私見　私心—（心の蒙蔽）

晦庵が心に關する這般の剖析は、實に張横渠が合性與知覺有心之名といへるに同しく、亦虞書の所謂人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中に本つく。所謂虞書の文、今其本文的眞僞を辨するの要なしと雖も、晦庵が中庸序說亦明に之を引證せるより見れば、彼が以て眞と爲しゝは確なり。斯の如くにして心を解き、斯の如くにして人の善惡の由來を說けり。曰はく、人心者氣質之心也、可爲善、可爲不善と。道心固より善ありて不善なし、唯人心則ち不善あり。道心の微なる、人心の危をして乘せしむるあれば不善茲に生ず。思ふに善惡の存在は道德上の大なる問題なり。心を以て善と爲さむか、惡の存在得て說明すべからず。心を以て惡と爲さむか、善亦說明を得ず。心に於いて善惡共存すと爲すに於いて、行爲に於ける兩者の存在始めて茲に說明せられむ、而も若し單純なる共存を許さば、人の惡を去りて善に就かさるべからざる所以の本據安にか在る。朱は則ち之を解するに理氣道人の說を以てし、陸は乃ち本私習性の論を以て之を辨せり。以爲へらく、本心に隨へば不善なることなく、私心に隨へば善を失す。本心は天の命ずる所即ち性にして、私心は之を蒙蔽する者即ち習欲なりと。是故に善惡の由來に關する見解は陸朱二家未だ根本的の逕庭あらざる

なり。唯其心を說くに於いて、晦庵は人心を以て道心に對し、而して人心に善あり不善ありと爲し、象山は私心を以て本心に對し而も謂ふ所の私は本心の蒙蔽に即いて名つけたる者にして、蒙蔽せられたる心即ち私心なりと爲し、以て改善を要する者と爲し、乃ち不善の目を與ふるのみ。晦庵實に人心以外別に道心の存在を說く、果して如何にして存在すと爲すか、如何にして何處にか之を求めむとする。象山則ち本心を本つくるに性を以てし、性を本つくるに天命を以てす、天命に隨ふ即ち是れ進歩の方法なり標準なり。天命何れの地にか認識する、未發の中に於いてするのみ。說明の一貫的體裁は此或は彼に及ばずと雖も、立旨の太簡太易、由り易く從ひ易きに於いては、彼の此に如かざること遠し。晦庵乃ち之を駁して曰はく、陸子靜、學者欲執喜怒哀樂未發之中、不知如何執得。那事來面前、只得應他。當喜便喜、當怒便怒、如何執得（語類卷一百二十四、五右）と。未發之中を以て時間的の未發と爲さむか、實に晦庵謂ふ所の如し。以て性質上の未發と爲さむか、此非難は自ら消して、象山の意は中庸費隱の說に合ふを看るべし。之に關する晦庵自個の見は左の如し、曰はく、未發固要存養、已發亦要審察。無時不存養、無事不省察（學部通辨終篇中十、一左）と。曰はく、未發有工夫、既發亦用工夫。既發若

不照管、也不得、也會錯了。（仝上）時間的の未發已發固より省察工夫の要に於いて徑庭なきこと明なり、何ぞ故らに之を揭くるを要せむ。要するに晦庵は性を以て善惡の標準とするに疎にして理氣を以て善不善の說明と爲すに切なり。說明に於いては則ち大に詳密なりと雖も、標準に於いて較〻空疎なるを免れず。

朱の所謂氣稟何よりか生ずる

陸子靜之學、看他千般萬般病、只在不知有氣稟之雜、把許多麁惡底氣、都把做心之妙理、合當恁地自然做將去。（中略）只我胷中流出底是天理、全不着得些工夫、着得這錯處、只在不知有氣稟之性。（朱子語類卷一百二十四、十一左）

論性不論氣不備、孟子不說到氣一截、所以說萬千與告子幾箇、然終不得他分曉、告子以後、如荀揚之徒、皆是把性說了。（仝上）

といふ。然らば則ち氣稟何よりか生ずる。曰はく、形體我即ち身よりす。晦庵曰はく、今人論道、只論理不論事、只說心不說身と。此論頗る印度思潮の連緣を見る。孟子曰はく、食色性也と。此を以て彼に比す、吾人は其間に自然と不自然との大逕庭を認めずんばあらず。凡そ斯の如きは說明の完備略〻到れりとすべきも、學者の迷妄を啓いて進歩の指針を與ふるに於いて、彼は決して孟子を軼する能はざる者、彼は寧ろ告子荀

進學工夫及ひ教育方法

楊と其立論の範疇を同じうする者と謂ふ可きなり。象山既に所謂氣稟之性を說かず、而も如何にして本私習性を辨せしかは、吾人の既に觀たる所。晦庵乃ち陸子靜說「顏子克己、不是克去己私利欲之類、別自有箇克處、又却不肯破。某嘗代之下語云、不過言語同斷心思路絕耳。此是陷溺人之深坑、切不可不戒。（學蔀通辨下十一右）」と喇罵す、寃亦太し。

第四、進學工夫及ひ教育方法　蓋し晦庵は結局道心亦人の心に備はると爲さゝる能はず、而も彼は極めて之を輕視す、故に其進學の要を觀する亦氣質の稟よりせざるを得ず。其答項平父書に云はく、人之一心、萬理皆備、若能存得、便是聖賢、更有何事。然聖人教人、所以有許多門略節次、而未嘗教人只守此心者、蓋爲此心此理、雖本完具、却爲氣質之稟不能無偏、若不講明體察極精極密、往往隨其所偏、墮於物欲之私、而不自知。（學蔀通辨終篇中三右）

と。又云はく、此心固是聖賢本領、然學末講、理未明、亦錯認人欲作天理處、不可不察。（仝上）

と。乃ち謂へらく、氣質の稟は善不善を有す、吾人は人欲と天理とに向うて銳尖明晰なる剖析を試ざるべからず。之を爲すこと如何、曰はく、（仝上三左）

涵養致知力行、三者便是以涵養做頭、致知次之、力行次之。不涵養則無主宰、既涵養、又須致知、致知又須力行。若致知而不力行、與不知同、亦須一時並了、非謂今日

朱は歸納的なり陸は演繹的なり

涵養明日力行也。要當皆以敬爲本。敬只是提起這心。莫教放散恁地。則心自明。這裏便窮理格物。見得當如此。便是。不當如此。便不是。既見了。便行將去。

其綱を涵養致知力行と爲し、其方を一時並了と爲し、其要を敬と爲し、其歸を窮理格物と爲す、詳明親切至れりと謂ふべし。凡そ、這般進學の綱領、其形式に於いては學者の粗、首肯せさる能はさる所、殊に幼稚者の敎育若しくは初學者の進捗に於いては、殆と每に此方法に率由するの切要を看る。而も晦庵既に理に對するに氣を以てし、道に對するに事を以てし、心に對するに身を以てし、故らに之を立して以て呼號する所あり。彼は特殊を見、具躰を見、差別を見、總合を見て進學必ず此端よりせざるべからずとせり。是故に彼の工夫は歸納的なり、彼が格物窮理と謂ふは個個の理を窮の個個の物に格るの謂なり、謂へらく斯の如くにして始めて以て聖賢の域に到るを得むと。乃ち以て象山を見る、自他の間實に鴻溝の存するなくんばあらず。蓋し象山は特殊を見ざるに非ず、而も直に普遍を見たり。具躰を見ざるに非ず、而も亦抽象をも具躰視せり。彼は差別を見るよりも平等を見るに急なり。是を以て彼の方法は分析的にして、總合的に非ず、演繹的にして歸納的に非ず。向下的にして向上的に非ず、歸納的なる者は半途にして止むの弊あり、演繹的なる者は根本の誤謬直に全般を謬るの虞あり、甲は支離に陷り易く、乙は鹵莽に失ひ易し、長短未だ俄に較し易からずとするも、儒學性善の說は明に演繹の眞正確實なる根底を與へむとしたるを疑はず。晦庵乃ち獨り他の短處を電睨して曰はく、

兩者の得失

人之有是身也則必有是心。有是心也則必有是理。然聖人之敎、不使學者收視反聽一以反求諸心爲事、而必曰博學審問愼思明辨而力行之者、何哉。蓋雖在我、而或蔽於氣稟物欲之私、則不能以自見。學雖在外、然皆所以講乎此理之實。及其浹洽貫通而自得之、則又初無內外精粗之間也。世變俗衰、士不知學。挾冊讀書者既不過於誇多鬪靡以爲利祿之計、其有意爲己者、又直以爲可以取足於心、而無事於外求也。是以果然墮於佛老空虛之邪見、而於義理之正、法度之詳、有不察焉。

誇多鬪靡及び利祿

道之不明、其可歎已。

これ晦庵が作鄂州學誓古閣記の云ふ所、其當時の學弊の淵源を探りて深憂に堪へさるの情、誠に哲人たるを失はずと雖も、末流を以て源泉を棄つるその筆法に隨はば、彼亦自家の立脚地を去らざるを得ざるべし。當時の學弊、誇多鬪靡と利祿とに至

りては、熱誠敬虔なる學者朱陸の二子が、共に慷して以て慨する所、白鹿洞義利の辯に於いて、紫陽が象山に拜跪せし所以なり。而も對症の藥果して何れの家の方劑か最も適當する。吾人は必ずしも成敗の跡を以て英雄の事業を品隲せずと雖も、理功共に赴く所は亦之を拒否するを得ず。晦庵鵝湖に會する年十二月、嘆して曰はく、子壽兄弟氣象甚好、其病却是盡廢講學而專務踐履、却於踐履之中要人提撕省察悟得本心、此爲病之大者。要其操持謹質、表裏不二、實有以過人者。其自信太過、規摸窄狹、不復取人之善、將流於異學而不自知耳（學部通辨上三左）と。爾後數歲、その學徒の競辯忿厲を戒むる語に云はく、子靜平日所以自任、正欲身率學者、一於天理、而不以一毫人欲雜於其間。恐決不至如賢者之所疑也（全上左）と。人の善を取ることに關し、讀書に關し、往往象山を誣ふる者ありと雖も、晦庵が竊に重を象山の行實に置きしの狀、則ち歷歷として見るべきなり。況んや象山の天地之性人爲貴といひ、人爲萬物之靈といひ、人所以貴與靈者只是這心といへるが如き、晦庵は雖聖賢復生與人說、也只得恁地と嘆稱す。晦庵が敬といひ一時並了といふが如き、亦思ふに象山が拒否するを得ざりし所、伊川の知行合一說を距ること遠からざる者なり。晦庵の讀書法が象山の法と異にして、逐段

逐句義理を理解すべしとせる、亦固より其所なりとす。

以上の四件は朱陸二家異同の細目なり。斯の如く二家が太極の見解に於いて、理の見解に於いて、心性の見解に於いて、將又進學工夫及ひ教育方法に於いて、頗る顯著なる逕庭を來たし、其互に相敬重せると同時に互に相惜まざるを得ざりし所以の者、其因果して安にか在る。吾人は今や此相異の細目を按じて、其實に一貫の條統を有するを見るなくんばあらず。

晦庵象山同しく是れ聖人の學を以て任する人、是故に彼等の起點は同しく人生本有の問題にして其歸點も亦同しく是れなり。如何にせば吾人は進歩すべきか。見在は不善を有す、不善を去りて善に就く、是れ即ち進歩なり。而も不善と善と孰れか多くの根據を吾人の心性に有する、吾人が善に向ふは單に一の希望なるか、將た善は吾人に對して實に權威を有するか、抑〻希望即ち權威なるか。凡そ這般を解釋して明確透徹ならしめむが爲には、先つ見在の吾人に於ける善不善の根據を覈にし、而して善の權威を繹ねざる可らず。此覈の資として晦庵乃ち理氣の見あり、理氣の見が斯問題に向うて有する地歩は唯是れのみ。而も陰陽象數の說、支那歷代の思潮に

交脞せること既に久しく、宋代學術の競起して、濂溪一たひ大に之を道ひ、康節は象數に耽り、横渠は亦陰陽に趨り、二程の稍〻之を遠さかるありしも、晦庵が廣博にして駁雜なる頭腦は再ひ斯問題に雜ふるに所謂純正哲學の問題を以てし、乃ち理氣を以て一方に向うては善不善を説明するの兩元と爲し、而も一方に向うては更に陰陽に本つけ太極に本つけ以て天地宇宙を説明し了せりと爲す。借問す人生に於ける善不善と宇宙の説明に於ける陰陽と果して何等の關係かある、乙を解くは甲を説くに於いて將何の交渉する所ぞ。象山の學、その廣博固より晦庵に及ばず、而して其駁雜亦晦庵に過ぐる能はざりき。彼は其易論に於いて頗る思想の昏迷を見はせりと雖も、其哲學は要唯人生本有の問題を解釋するに止まりて、傍岐迷徑紛紛として陋隘膚淺なる世界觀の搆成に營營せさりしは聊か以て多とするに足る者あり。

一括して之を斷するに、晦庵の旨は説明に在り、而して象山の旨は實に標準に在るなり。説明の學としては朱の陸に軼すること固より數等、而も標準の學としては陸決して朱の下に在るを甘んずべからず。抑〻儒學の要は本來安に在りと爲すか、二家講學の起點歸點とする所亦未だ嘗て斯標準に在らずんばあらず。唯夫れ標準は

若干の説明なしに講明すること能はず、這般問題に於ける説明の價値は、其標準講明の手段たり行程たるに於いてのみ存するを得べし。晦庵曾て象山が良知良能四端等を説くを評して曰ふ、則ち不是に非ずと雖も、亦唯漂蕩浪遊の子に向うて、田あり屋あり盍ぞ速かに歸來せざると言ひ、而して路銀を給することを遺るゝ者に似たりと。（語類卷一百二十四、三右）象山の學風誠に路銀を給せざるの譏を得易し、而も路銀は必要の程度内に在るも猶實に蕩子の浪費し易き所、晦庵寧ろ必要を超過して夥多の財物を供給する者たらざるを得むや。曰はく子靜説話、常是兩頭明、中間暗（性理大全卷四十二、九左）と。然らは則ち晦庵の説話は起頭明にして末端漸く暗き者と爲すを得むか。吾人は晦庵の學に於いて道心人心の名目を除くの外其善惡由來の説明の巧妙精緻なるを嘆ぜずんばあらず。唯彼が説明の鋭鋒は更に一轉して宇宙の本源に向ひたり。是れ彼が既に人生本有の問題を離れ、儒學の本致を遺れ、彼自身の地位を忘れ而して亦彼自身の力量を忘れたる者なり。

願はくは吾人をして輕輕に看過することなからしめよ。陸朱の二家の間に存する此一大鴻溝は、實に孟子の時に在りて漸く將に顯著ならむとせる者なりき。爾來

唯廣博深邃なる大思想家を少きしが爲に、唯思想の新潮流の輸入紛雜ありしが爲に、纔に判明なる旗幟を樹てて相爭ふに至らざる者なりき。而して此人物此氣運は今や漸く熟して、宋代の二家乃ち之に當れる者のみ、說明と標準と、是れ實に人生の二面を劃する者、これ實に儒學と科學とを劃する者。而して彼の宗敎といふ者、彼の理學といふ者は、則ち此界劃の不明によりて生來せる畸形兒のみ。宋代一系の學者乃ち儒學の宗統を紹ぐを事とせずして、却りて這般畸形兒の產出に營營せり。象山カ猶足らず、則ち足らずと雖も、支那文明の程度は吾人が彼を責むるに蒙昧なる支那科學の開拓者を以てするを許さざるなり。晦庵は理學に流れたり、象山は宗敎に傾けりとせむ。而も此の失は未だ彼が如く太たしきに至らず。

異同の時代

朱陸異同の時代に關して、趙東山の對江右六君子策、程篁墩の道一篇は早異晚同の說を取り、陳建は學部通辨を著して熱心に早同晚異の說を主張し、象山の異端なるを詆排せり。曰はく、通按、朱子於象山、自甲辰乙巳歲以前、每去短集長、時稱其善、疑信相半。自丙午丁未歲以後、則於象山鮮復稱其善、而專斥其非、絕口不復爲集長之說。其先後予奪分明兩截。此朱陸早同晚異之實也。上卷 末下卷所載、著朱陸晚年氷炭之甚、而象山既沒之後、朱子所以排之者尤明也。と。引用の誤謬に陷り易きは普通の論理學書も亦既に之を言ふ、吾人は未だ容易に兩說の孰れにも首肯する能はず。而も二家は一代の碩學偉人なり、其相知ること愈久しうして相解すること益明なりしは確なり。思想の相違は到底實に存せし所、即ち異同を沒却する能はずと雖も、異同に關して末派の喋喋するが如き蒙晦を免れしは事實なりとす可し。明に在りて王陽明、清初に在りて黃宗羲、全祖望の徒、皆早異晚同の說を取りき。凡そ此問題の斯く二派の學者に重要視せられしを以て見れば、晦庵の重んぜられしことを知るべく、而して早同晚異の說は多く朱を奉ずと稱する徒に在りて、早異晚同の說は常に陸王に追隨する人に在るを見れば、此等の襟度遙に彼等の上に歸然たりしを知るべし。吾人は晦庵を偉とし、而して其徒を墮とす。

第三　後繼

明州の四先生

象山既に歿して百數の學徒、其最も遠く聞ゆる者を楊簡袁燮舒璘沈炳と爲す。所謂明州の四先生なり。文信國月旦して云はく、楊は月の雲間に澄むに比すべく、袁は氷の玉澤に瑩くに似たり。若し夫れ春風和平の懷を惹くは則ち舒にして、秋霜肅凝の感を催す者は則ち沈を推さゞるを得ずと。今次第に之を觀むとす。

楊慈湖の盡無唯心論

慈湖楊簡が學、自個を以て中心と爲し、心を以て標準と爲し、克己を以て進學の要と爲す。象山の統を紹ぎて更に一歩を前進するの觀なき能はず。吾人は彼が易說を讀みて頗る奇異の感ありと雖も、各處に散在せるその敎學の珠光は亦注目を惹くに足る。謂へらく、易者己也、非有他也。以易爲書、不以易爲己。不可也。以易爲己之變化、不可也。天地我之天地、變化我之變化、非他物也（宋元學案卷七十四、二右）と。謂へらく聖人即易也、德業即易也（上七左）と。彼既に自個の云爲の外に天地の行動を認めず、自家の事業の外に天地の化育を認めず、乃ち人が天地の至靈として天地の化育に參贊する所以の者彼に在りては直に天地の化育を成すに在るなり。所謂聖人、是に於いてか所謂神と等し。進歩の究竟理想は聖人即神たるに在りと爲す。彼が全く宗敎的に蕩流せるや是に於いて其端を認むべし。乃ち曰はく、誠遂己、則不學之良能、不慮之良知、我所自有也、仁義禮智我所自有也、萬善自備也、百非自絶也（上八左）と。曰はく吾心中自有如是十百千萬散殊之正義也。禮儀三百威儀三千、非吾心外物也（上十右）と。斯の如く慈湖の學は自個を本とし、起とし、歸とし、理想とし、標準とす。其見解直截痛切、佐久間修理が所謂匹夫の云爲五大洲に關する者、將に這般銳尖なる鋒鋩より爛發するあらむとす。恨むべし天下の事物其平を得ると難し、乃ち象山の敎をして從來誹謗の焦點と同質に變せしめし者は實に彼なり。其絶四記の劈頭に云ふ、人心自明、人心自靈。意起我立、必固礙塞、始喪其明、始失其靈（上）と。陳北溪が答師書に其學風を狀して曰はく、不讀書、不究理、專做打坐工夫、求形軀之運動知覺者、以爲妙訣。又假託聖人之言、率就釋意、以文蓋之。慈湖纔見伊川語便怒形于色。朋徒私相尊號爲祖師と。黃宗羲も亦曰はく、慈湖工夫、入細不能如象山、一切經傳有所未得處、便硬說闢倒、此又學象山而過者也と。彼が如何に極端に趨り、如何に佛臭を帶びしか、實に想ふ可きなり。乃ち全祖望をして而壞其象山敎者實慈湖。然慈湖之言不可盡信、而行則可師と嘆せしむる